

平和のアンドロイド

同じ作者の作品

サイトに掲載された亀裂（「La déchirure」）の原稿：

<https://star-trek.be/>

そして、次の場所に保存されました：

http://hodo.free.fr/Projet_Hodo/La_Déchirure_181_0.pdf

報土（ほうど）惑星の伝説のサガ

1. 報土惑星の先駆者たち（「Les Pionniers de Hôdo」
ILV、Edilivre、Amazon よりフランス語で出版）
2. ホモ・サピエンス・シンセティカス（「Homo Sapiens Syntheticus」
ILV、Edilivre、Amazon よりフランス語で出版）
3. 失望した天使たち（「Les Anges déçus」
Edilivre、Amazon よりフランス語で出版）
4. ジコグ（「Jikogu」
Edilivre、Amazon よりフランス語で出版）
5. 地球は死につつある（「Terre se meurt」
Edilivre、Amazon よりフランス語で出版）
6. サイボーグになった裁判官の復讐（「La juge noire contre le pouvoir de l'ombre」
Edilivre、Amazon よりフランス語で出版）
7. シムオルゴ（「Sim-Orgs」
Amazon で自費出版する）
8. 時間の場（「Les champs de signes」
Amazon で自費出版する）

第一章 面接

採用担当者はオフィスに入ってきた二人の人物を見た。二人が同時に自己紹介をしたかったので、彼は困り切困り切した。彼には人が座れる椅子が1つしかなく、通常の場合であれば、このレベルのインタビューには十分な椅子でした。幸いなことに、彼は一見したところ、インタビューは短いだろうと思ったので、立ち上がって椅子を譲りました。実際、これまでアンドロイドが候補者として名乗りを上げたことはありません。そしてここに、男性と女性が立っており、それぞれ募集案に応募していました。

かれ採用担当者は好奇心に駆られて就職面接に応じた。彼は二人のアンドロイドを調べた。彼らの測定値はあらゆる点で同一でした。唯一の顕著な違いは、ほたるのまっすぐで平らな外観と比較して、ひのこの胸と腰でした。しかし、類似点はそれだけではありませんでした。彼らの肌は同じ琥珀色の色合いで

した。彼らの顔の形に関しては、同じ高い頬骨と切れ長の目と驚鼻をしていました。

ロボットのブランドの奇妙な混合物だえる。

ほたるはまず自己紹介をしました。

「私は諜報の専門家です。人工的か有機的か、個人か集団かを問わず、あらゆる形態の知性。私は他の形式の思考を発見し、そのメカニズムを理解し、新しい相乗効果を見つけるのが好きなので、このポジションに応募しています。」

ひのこは量子コンピュータ科学者の職に応募していた。彼の情熱は、知識の最前線にある領域で理論を強化または修正するための他の実験領域を発見することでした。

男はうなり声を上げた：「私は平行世界のような話はあまり信じていない...そして...なぜ二人で一緒にここに現れなければならなかったのですか。」

「私たち夫婦だから」とほたるは答えた。

「夫婦ですね」と採用担当者は驚いた。

—はい、ひのこが指導する際に使用する比喻をさせていただきます。光源からの光を向けると特定の場所をよりよく観察できるようになります。一方この光を周囲に分散させると、近くで観察できる可能性のあるものとともに、自分がどこにいるのかがよくわかりますが、正確ではありません。これが私たち

の脳の仕組みであり、私たちは特定の領域を可能な限り最適に分析する懐中電灯のようなものです。そうしないと、検査する領域が大きくなるほど照明スキルが低下するからです。

「私たちは依然としてゼネラリストで学際的な文化を持っているので、どの専門家に頼るべきかを簡単に知ることができます。私は指摘しなければなりません」とひのこ氏は続けました。

「そういうわけで、彼と私はより広い範囲を照らすことができます。それがあなたが探していたものではないでしょうか？」とほたるは言いました。「私たちはすでに、私たちの種に関連した才能を備えた非常に効果的なチームを形成しています。」

「興味深いですね」と男は言った。あなたたちが夫婦だと聞くのを覚悟していたのですが... ええと... アンドロイドを生む夫婦のようなものです。

—それは私たちも同じです。アンドロイドたちは新しいアンドロイドを構築するには、男性のアンドロイドとガイノイド(女性のアンドロイドを指す用語)からの情報を組み合わせます。

—オウラ！ 男は叫んだ。とりあえずそこに留まりましょう。奇妙に興味深いこのインタビューのために協力してくれる同僚に電話するつもりです。

しばらくして、女性が二つ椅子を持って部屋に入ってきました。男性は席に座り、インタビューを要約した。女性は自己紹介をし、座り話した。

—私たちの代理店があなたのプロフィールに興味があるかもしれないことは、でも、私たちにそのようなスタッフが来るのは初めてなので、もっと知る必要があります。

—地政学的紛争を解決するためにヨーロッパに設立されたこの機関については、私たちはすでによく知っています、とひのこ氏は語り始めた。この知識に基づいて、私たちは自ら提案しました。

—しかし、あなたは私たちがあなたにどのような人間的な側面をもたらすことができるかを主に知りたいと思います、とほたるは続けました。あなたの決定にとって重要と思われる詳細と私がお知そうらせさせて。まずは始めましょう。

私たちの種は、人類による最初の地球外植民地化の際に、自律的な知的存在として誕生しました。しかし、自律的である前に、私たちはすでにあなたのイメージの中にありました。私たちの作成者は、反復的なタスクに特化したロボットを少し超えたコンパニオンを提供する方が魅力的であると考えました。彼らは、あなたに似た存在に、あなたの夢、空想、不安など、注意深く、共感を持って聞く必要があるすべての感情を投影できると考えました。

これを行うには、私たちの行動を脳によって細かく制御する必要がありました。私たちは必要なときに笑ったり泣いたりすることができます。

しかし当時、人類は私たちの種族があなた方の種族にとって危険になることを恐れていました。「ターミネーター」の伝説は人々の心の中にあまりにも存在していました。したがって、私たちの創造者は、決して攻撃性を備えていない脳を私たちに与えました。その一方で、私たちは感情のない機械、無関心な操り人形になってはいけません。彼らはまた、好奇心や、質問とその答えを見つけないという飽くなき欲求という感情を私たちに与えてくれました。そして私たちの感情の中には、有機人間を助けたいという絶え間ない願望があります。あなたたちにとってチャンスです。

私たちは繁栄して新しい世界を征服する必要はありません。しかし、人類の必然に答えるためには、より多くのアンドロイドが必要であることを理解しました。おお！安心してください、私たちはあなたのクローンになる必要はありません。通常、各クローンまたはミッションごとにメンバーは一人か二人だけです。

このために、私たちは生物学を模倣することにしました。私達はガイノイドとアンドロイドを作りました。自然を模倣する場合、攻撃性のなさや有機的人間への敬意など、私たちの自然の基本的なパターンをすべて永続的に保持するタイプの1つを用意す

ることが賢明であると考えました。もう1つのタイプは、その基本を尊重しながら私たちの種を改善できるように、経験からランダムに得られたこの構造の適応を追加します。

新しいアンドロイドを作成する必要があると判断した場合、私たちは再生工場の1つに行きます。私たちは日本の北部にある幌筈島で生まれました。

黙って聞いていた女性は頷いた。「あなたたちが生まれたのは、領土の主張に関して長い間、非常に長い間問題があった場所ですね...」

—あなたが所属する欧州庁のおかげで問題は解決しました。したがって、あなたの代理店に仕えられることを光栄に思います、とひのこは言い、まるで自分の出自を示すかのように日本式に深々と頭を下げた。

—地球上のどこかで領土紛争はまだ残っているのでしょうか？ほたるが尋ねた。

—今回はさらに複雑ですね。あまりに複雑なので何も公表していません

—新たな冷戦が爆発しようとしている？これは人類の歴史においてよくあることです。

—今回は違います。南米諸国連合は、地球全体に深刻な影響を与える可能性のある問題の解決を支援するよう私たちに求めました。

—非常に望まれていると同時に恐れられている、彼らの連合の定義における別の意見の相違はありますか？これは地球全体とどのような関係があるのでしょうか？支配的な隣国による新たな独占戦争？

—いいえ。これは非合法の移民です。

—えっ！とても小さなことで私たちに助けを求めているのです！

—ただし、これらの移民が地球外生命体であることを除いては。私たちは彼らがどこから来たのか、彼らの意図さえ知りません...もしあなたが受け入れれば、これが私たちの代理店での最初の任務です。

第二章 冒険に向かって

世界で最も標高の高い首都、ボリビアの行政首都ラパスは、一時的に「The Peace」と改名された後、スペイン語の名前に戻った。しかし、2222年2月2日に授与された平和の首都という国際的な地位は維持されていました。同じ名前の像の松明のように、その知恵で世界を啓発するはずでした。そして、伝説のコンドルたちが天から、絶えず引き裂かれ、争いが絶えない世界についての新たな伝言を歌いました。これらの最後の点が、まさにこの日付を選択した理由です。二元性の共存とそれらを結びつける波打つ均衡を象徴するタオの刻印が施されていました。それは平和の始まりの炎であり、対立するものが共存し補完し合う調和への希望のしずくでした。「タオ」という言葉の翻訳であるその道は均衡の道であり、非生命の静的な均衡と比較して動的な均衡、したがって常に動いているものです。

そこで下船したほとるとひのこは、アンドロイドは人間に見えるために呼吸するだけなので、呼吸困難を少しも感じずに、与えられた宇宙研究センターの住所に向かって急いだ。彼らが地球外生命体の目立たない到着に関する最初のデータを収集するのはそこでした。これらは非常に密かに到着したため、世界中のどの天文台も UFO のわずかな接近を目撃したことはありませんでした。しかしそれ以来、アマゾンアマゾン熱帯雨林、ボリビア側の鬱蒼とした植生に隠れた、珍しい構造を持つ小さな村の出現が航空便で確認されている。

ボリビア人は助けを求める前に、そこで何が起きているかを見に行くために探検家を派遣した。誰も戻ってきませんでした。より悪い！ 観測機や低空飛行の救助ヘリコプターも消息を絶った。政府は近隣諸国と話し合うことにした。彼らの誰も、自宅で同様の出来事を観察していませんでした。しかし、この現象の拡大を恐れる必要があるという点では誰もが同意した。おそらくそれは異星人の橋頭堡だったのだろう。それとも偽の宇宙人なのか、実際には誰も知りませんでした。

このため、ほとるとひのこは、北に向かい、国立公園に向かう、いわゆる観光ルートを通してそこに行くようにアドバイスされました。紅川に接する隣の町では、彼らは慎重に研究される地域に彼らを導く二人のガイドを見つけるでしょう。

アンドロイドは彼らの有機的ないところよりもはるかに重いので、道は長く、時には危険でした。彼らが休むことなく20時間歩くことができ、したがって1日に最大100キロメートルを覆うことができたとしても、そこで彼らは障害物を迂回したり、湿地を横切ったりしなければなりませんでしたそれは彼らをかなり遅くしました。彼らはまた、原生林では毎ターンで自分自身を充電するのに十分なものを見つけることができないので、電池を運ばなければなりませんでした。最後に、彼らはまだ利点を持っていました：彼らは昆虫とヘビを恐れていませんでした。

チームは、目に見えるスペクトルと目に見えないスペクトルの両方で環境と融合したフルボディカモフラージュを身に付けていました。それが環境の主に緑と茶色の色を取ることができれば、それはまた、例えば植物の熱を反映し、したがって人間の熱を隠します。この装置は、常にローカルネットワークに接続しているアンドロイドからの自然放出もブロックしました。騒音も機材の質感によって抑えられていました。心臓の鼓動であれ、枯れ枝を足で砕く音であれ、すべてが減衰され、なぜならいかなる検出器も局所的な異常の存在を明らかにすべきではありませんだからだ。しかも、四人の偵察員は手話でしかコミュニケーションをとらなかった。

突然、ひのこが手を振ってグループを止めさせた。彼はある方向を指さした。ガイドたちはアンドロイドが何を発見したかを見ようとした。その後、ガイ

ドの一人がいくつかのジェスチャーをして、遅滞なくルレナバケ基地に戻る必要があることを示しました。外国人の存在を示す最初の痕跡は、疑わしい収容所の一つから少し離れた場所で観察されたばかりだった。

ガイドたちはファーストコンタクトのために一人で戻るアンドロイドを助けるために通路に印を付けながら帰途に就いた。明らかに、マーキングは控えめで自然でした。ほとんどの場合、それらは通路と進むべき方向を示すために特定の方法で交差した枝でした。二人のアンドロイドにとって、経験豊かな2人のガイドに比べて視覚的および地形的な記憶力が顕著だったため、これ以上のランドマークは必要ありませんでした。

彼らが都市に戻ると、地元当局はアンドロイドたちの活動を促進するために可能な限りのあらゆる措置を講じ、アンドロイドたちは当局、南米諸国連合、ボリビア政府に通報した。ほたるが外交官および国際翻訳者としてのスキルを提供する一方で、ひのこは彼が発見した物体に関する技術ファイルを作成しました。

ひのこの感覚が感知したのは、高さ約1.5メートル、直径10センチメートルにも満たない細長い円筒のようなもの。物体は完全に人工的な構造をしており、大部分が金属でした。一定量のエネルギーを消費するため、存在検出器のように動作する必要がありました。この装置は、キャンプの接近を監視してキャ

ンプを守るために使用されたに違いありません。論理的には、奇妙な野営地を区切るためにそれらがいくつあったに違いありません。さらに、探索者のかれらの集団が発見された可能性はありました。

だからこそ、この可能性を考慮して、ほたるは、彼女と彼女の仲間が神秘的なエリアに密かに向かうのではなく、逆に、エイリアンによってすぐに発見され、最初の接近を引き起こすために、できるだけ目に見える形で行くことを提案しました。これにより、彼らは雇用主との連絡を維持することができ、調査中や、場合によっては希望通り交渉中にいつでも追跡できるようになります。

二人のアンドロイドは四時間の短い休息の後、再び出発した。こうして夜中に彼らは、発見した奇妙な円筒の近くに帰ってきたのです。

彼らが発見した場所は最も近くにあり、前哨基地だったのかもしれない。他の場所、特に飛行機とヘリコプターが消えた場所のはるかに遠く、推定位置を記録した衛星によって示されていたように、常に人間の存在から非常に遠く、常に土手や湿地の近くにありました。

これらの収容所を発見するのは困難でした。火災はなく、光もほとんどなく、無機物質の顕著な存在を示すエコーだけがあったのです。3台のミニバスがキャラバンに改造されたように見えたが、その場所にアクセスできる自動車道路がなかったことを

除きます。この態度は、この植民地が文明の痕跡をすべて逃げ出し、道路、町、村から可能な限り遠くに移動していることを示しているように見えました。それらは水の存在を必要としているようでした、同時に川を移動するボートからは見えないようにしていたのです。

より低い高度では、植生が刈られたように見え、機械が不時着したが、垂直には着陸しなかったことを示唆している。

これらすべては、訪問者がサイトを選択する前に空から環境の地理的構成を観察していたことを示唆しています。何の目的ですか？

第三章 第一連絡

円筒はそこにありました。見張ってしたほたとひのこは、近くに生命体の存在を探しました。彼らはポリビア軍の指示に従い、ゆっくりと東に向かって森に入った。突然、ほたるは地面に奇妙な物体をぶつけた。ひのこがそれを調べようと近づいた。それは人間の頭蓋骨でした。きれいに漂白された残りの骸骨は、そのままの状態でその横に横たわっていた。

突然何かが夫婦の上に落ちました。立ったままでいたほたるが振り返ると、おそらく彼らを転落させようと、影が彼らに向かって突進してくるのが見えた。木のてっぺんから出てくる影もあれば、走り去る影もあった。数人影は彼らに噛み付こうとしたが、アンドロイドには穴が開きにくい合成皮膚があり、体の繊細な内部構造を保護するためにしっかりと密閉されていた。さらに、この皮は二倍の厚さでした。二つの層の間には、呼吸、笑顔、涙など、人間のメ

カニズムをシミュレートできるいくつかの機構が備わっています。たとえ後者のシステムが損傷したとしても、内部皮膚の裏側にわずかな塵も侵入することはありません。

すべての影が遠ざかって後退した。ほたるはその場に留まり、かかとお尻を置き、両手を太ももに置き、手のひらを空に向けて地面に座った。彼女はひのこに、この態度が宇宙人にできる限りの信頼を与えるはずだと説明した。実際、後退が第一連絡使命に不適切であれば、前進は攻撃的に見えるかもしれない。その場に立ったままであることに関しては、これは麻痺した敵の位置であると同時に、最初の機会に攻撃を仕掛ける準備ができている警戒している戦闘員の位置であると考えられます。

ひのこは全感覚を覚醒させていた。彼は地上にいる宇宙人や木の上にいる宇宙人を観察し、彼らの後ろにある円筒の音を「聞いた」。宇宙人は皆小さく、身長は1メートルから1メートル50の間でした。彼らはみな足が弱く、まるで鳥の足のようでした。彼らの翼のある腕はコウモリの腕に似ていました。彼らには8本の指があり、そのうちの4本は翼を展開するために使用され、他の指は陸生霊長類の親指、人差し指、中指、薬指に似ていました。最後に、彼らの頭はきれいに剃られたシーズーの頭に似ていましたが、小さなニュアンスがたくさんありました。実際、例えば耳は、その大きさと可動性においてオオカミ犬の耳を彷彿とさせました。

ほたるはすべての音を聞き、これらの存在の間で交わされるすべての身振りを観察しました。身振りの変化はほとんどありませんでした。彼らは多かれ少なかれ翼を広げることに限定していました。口の唇が時々後ろに反って小さな歯が見えることがありました。しかし、非常に表情豊かだったのは彼らの目でした。彼らは感情や意見を翻訳するだけでなく、人間の人差し指を置き換えたようです。彼らは常に議論の主題を指摘しました。そして、どれほど頻繁に彼らの目はアンドロイドに注がれていたことでしょう。

おそらく彼らは仲間内で話し合っていたのだろう。しかし、ほたるが数多くの変調を区別したとしても、彼女はそこに人類の古典的なシステムを見つけませんでした。彼女は時々エイリアンの音を再現しようと試みました。そのたびに、コウモリたちはみな沈黙し、疑問を抱き、好奇心をそそられました。それから少しずつ、彼らは再び会話を始めました。彼らのせせらぎは、高音の鳴き声と低音のつぶやきの2種類の音で構成されていました。後者は、これらの地球外生命体がガイノイドの優れた耳に提供した究極的に調和のとれた「演奏会」で優勢でした。その間、ひのこは彼らに対するわずかな攻撃の兆候を監視していました。

突然、宇宙人がアンドロイド夫婦に近づいてきた。彼は自信を持って一步を踏み出し、意識的にかどうかにかかわらず、恐れていないことを示しました。

彼は下向きの長い口ひげを生やしており、これはおそらく階層構造の表れだろう。彼はほたるの手が届く範囲にしゃがみ、ほたるはその個体をじっくり見る機会を得た。

彼女が衣服だと思っていたものは、実際には人間が背中に背負うのと同じように、前にかぶったバッグにすぎませんでした。見知らぬ人が翼を持つことに適応した体操でそれを取り除いたとき、彼女はそれを理解しました。動きは垂直軸のみであり、胸の周りではありませんでした。したがって、腹部のバッグは背中に置かれた人工翼にクリップで留められ、脚の間を通る一对のハーネスによって全体が所定の位置に保持されました。

それで、毛皮のコートと鎧を着て遠くから現れたこれらの存在は衣服を着ていませんでした。いずれにせよ、彼らは「宇宙飛行」の衣装を着ていませんでした。これは、彼らが地球の大気とアマゾンの気候に完全に適応したことを意味します。

宇宙人は非常に短い音を発しました。ほたるはそれを繰り返してみた。彼女は見知らぬ人の目の動きから、何か納得のいかないことについての当惑した反射を読み取った。彼女は何が問題だったのか不思議に思った：発音が悪い、見知らぬ人の未知の礼儀正しに従って不適切な単語...？彼は翼を胸に折り曲げてメッセージを繰り返しました。ガイノイドは作戦を変更し、腕を組みながら自分の名前を言いました。今度は宇宙人はとがった耳が震えました。彼は

聞いたことを繰り返そうとし、微笑んでいるかのように上の歯を見せました。それから目はひのこを見つめた。ほたるは、おそらくそれは「それで、あなたの隣人の名前は何ですか？」という意味だと推測しました。

アンドロイドは人間の前でのみ、人間を安心させるために、擬態をすることよりも多くのことを話しました。そこでは、地球外生命体に対しても同じ規則が尊重されなければならないように見えました。そこで彼女は隣人に、自分と同じように自己紹介をするよう頼んだ。最初の言葉が交わされたばかりだった。

この間、他の宇宙人がゆっくりと三人組に近づいてきました。彼らの議論と質問は、未知の言語を解読して学習する訓練を受けたほたるの記憶を豊かにしました。それは彼の専門分野でした。すぐに、彼女は約 50 音節を数えることができました。唇、舌、歯などの器官を使用しなかったため、それらを真似するのはそれほど難しくありませんでした。それらを生成するために、咽頭のレベルに配置されたミニスピーカーは、口の動きで音を発音するふりをしながら、あらゆる音を再生できます。そのため、彼女はエイリアンの名前である「モヒハ」を発音することができました。後者は、目の前の開いたバッグから取り出した、一見するとレコーダーのような小さな装置を使用していました。時折、まるで自分も文

章の断片を覚えようとしているかのように、ほたるの言ったことを繰り返した。

ひのこはますます警戒を強めていた。それは彼が死ぬのを恐れていたからではなく。(有機人間はアンドロイドが活着しているとはまだ考えていなかったのので、「死んだ」の代わりに「破壊される」を使います。)彼にとって、ファーストコンタクトをするという使命は不可欠であり、それゆえに最後まで生きなければならなかった。それでも、ほたるは「テレパシーで」彼に、攻撃性も脅威も感じられなかったが、敵意のない多くの好奇心を検出したと繰り返し伝えました。それに対して彼の友人は、「確かに、しかし、これは単なる推定値です…」と答えました。

—これらが単なる外挿であることは承知していますが、それほど好戦的な性質のものではないと私は判断しています。でも気をつけていきましょう！彼らはすぐに怖がってしまいます。と、生き物は、すべてを失うことを恐れると、最後まで戦って死ぬことさえも、何でもする準備ができています。

—何があなたをそう思わせたのですか？

—彼らはすでに何度か私たちに収穫物を分けてほしいと誘っており、それを私たちの前にかじっているのので、私は彼らが果食動物であると信じています。したがって、これが事実である場合、彼らは肉食性、さらには雑食性の種と戦う準備ができていないことになります。それを確認する必要がありますが、物

事を急がないようにしましょう。彼らがパニックに陥ったら、おそらく危険でしょう。

—後ろの骸骨に何が起こったのか聞いてもいいですか？

—チャンスが訪れたとき。繰り返しますが、彼らは恐れています。そして彼らの言葉から推測できるのは、彼らは私に助けを求めないにしても、少なくとも平和を求めるだろうということです。

夜明けが森を照らし始めていた。ある種の動揺がグループを捉えた。

突然、リーダーらしき人が一連の指示を出しました。宇宙人は、ほとるとひのこが四方八方を囲まれるような方法で移動しました。

—ここで待ちなさい！ ガイノイドは大声で言いました。私が呼ぶまで動かないでください。

—連絡がなかったらどうすればいいですか？

—私たちのすべての経験が政府機関と UNSA に引き継がれていることを確認してください。でも最後までじっとしていてください。彼らは私たちを恐れるべきではありません。彼らは他の使者を受け入れる準備ができていなければなりません。この間、私たちの人々は自分たちの習慣や言語を注意深く学ぶことができるでしょう。

表向き、ひのこは坐禅の姿勢をとったが、それが彼らの「宿主」にとって何の意味もないのではないかと疑っていた。しかし同時に、それは何よりも、合成生物の柔軟性に劣る筋肉組織に適したこの場所の唯一の位置です。

ほたるはゆっくりと歩進み、部下とともに脇に立っているモヒ八班長の前で立ち止まった。彼女はまだ十分な語彙を知りませんでした。が、眼差しの使い方は知っていました。何度か彼女はエイリアンを見つめ、それから強く示唆された包囲からの出口を見つめた。最後に、後者はその方向に向けていくつかのステップを踏み出しました。最後に、班長はその方向に向けていくつかのステップを踏み出しました。ガイノイドも同じ歩数で前進した。で、リーダーはゆっくりと進み続け、ほたるもそれに並んでついて行った。

モヒ八は突然立ち止まり、ひのこからほたるをじっと見つめた。後者は、彼が彼の仲間が離れていないことを望んでいたが、彼女に加わることを望んでいたことを理解していた。恐怖からなのか、もてなしからなのか、彼にはそれを知ることは不可能でした。彼女は客たちに地球人の言葉に慣れてもらうために大声で彼を呼んだ。彼女が国の公用語、つまりスペイン語を話すことを選んだのは、将来関係が調和すれば、地球外生命体の最初のコンタクトは少なくとも地元住民と行われるだろうと信じていたからである。

第四章

マチ・ズリのキャンプ

ほとるとひのこを囲む行列は、水の流れからはかなり離れた、沼の端の比較的乾燥した場所に到着しました。多くの木が損傷したり、折れたり、根こそぎになったりしました。小さな嵐によって耕されたこの緑の塊では、3つの人工建造物が空から見えなように、現場で集められた自然迷彩で覆われていました。これらのシャトルは、太陽系の他の星に地球人を降ろしたり乗せたりする一時的な宿泊施設用に設計されたものと似ていました。これらの飛行機械は、ブレンデッドウィングボディに延長されたコンテナのようなもので、11人の乗客とパイロットを収容することができました。

モヒハは中央のシャトルに向かって歩き、じっと見つめたまま、2人のアンドロイドを彼の家と思われる場所に入るように誘った。それはまさにスペースシャトルであり、人間とは顕著な違いがあった。実

際、座席はありませんでした。天井から約15センチメートルのところに密閉された棒が、壁から約10センチメートル離れた車両の側面と奥に沿って走っていた。これらにはパッドが入っており、取り外しが簡単な留め具を備えた多数のハーネスが付いていました。

車両の前部には、ご想像のとおり、コックピットがありました。窓や舷窓はありませんでしたが、宇宙船の機首全体は、その質感と反射がサングラスを彷彿とさせる不透明なガラス素材で作られているように見えました。車両のコックピットと後部の接合部には、パッドを入れた円筒が床から天井まで上がっていました。その下には、馬蹄形の机がサンドバッグのようなものをほぼ完全に取り囲んでいて、ハーネスのセットも充実していました。上部では、円形のバーが背面と同じ機能を果たす必要がありました。

ここは、モヒハがコウモリのように足で逆さまにぶら下がってぶら下がるようになった場所です。ひのこは、逆さまではある、宇宙人が護民官か軍司令官のように立っているという印象を持った。そして確かに、リーダーのように、彼はすぐに自分自身を表現し始めました。

羽を広げて空間を目で見渡すことで、自分の民が「マチ・ズリ」、略して「ズリ」と呼ばれていることをほたるに理解させた。みんな黙って聞いていました。ガイノイドはコミュニケーションの研究に長けていたものの、すべてを把握するのは非常に困難

でした。幸いなことに、モヒハは腕を下に伸ばすことで、機のコントロールを簡単に操作できました。こうして彼は影像と言葉を結びつけることができた。

ズリ人は人類と同じ銀河系の別の太陽系からやって来ました。ほたるの理解では彼らは探検家だった。彼らは好奇心から旅行し、進化した存在がすでに占拠している地域には近づかないように見えました。彼らは巨大な船を持っていませんでしたが、会議が開催されていたような小さなシャトルの小隊を持っていました。

これらのスペースシャトルには森宇宙飛行士か機材が搭載されており、その編隊全体が巨大なコウモリを表現しているように見えた。これは、巨大な翼が伸びたボリュームのある楕円体の前面に、操縦および指揮所として大きな球形の頭部を備えていました。後者は、地球人には知られていない技術で実行されたスペースジャンプ中に体の上に折り返されました。これらは、エネルギーを吸収したり、環境をスキャンしたりするために、ジャンプの終わりに実体化するときに展開されました。あいにく、モヒハの奇妙な群れ船は、トロイの木馬小惑星群の真ん中に現れ、混乱して散り散りになる前に、激しく衝突した。

モヒハシャトルアセンブリは解体され、もう可能な後戻りはできませんでした。したがって、小さなグループに分ける必要がありました。助けを求めて母なる惑星に戻ろうとする者もいれば、自分たちを待

つための避難所を探す者もいた。多くのシャトルが最後の旅の間に破壊されました。

ひのこは、そのテクノロジーが彼の知っているものと大きく異なっていただけでなく、間違いなく彼らの生理学による多くの行動の違いがあることにも言及した。確かに、例えば、ズリ族は宇宙飛行士のスーツを持っていなかったため、とにかく服を着ていなかったため、宇宙で唯一の身を守る手段であるシャトルに彼ら全員が詰め込まれた理由が説明されました。

さらに、旅に参加したズリ人は全員、自分たちの世界に関する何かの専門家であり、旅中にあるアクティビティに参加していました。彼らには、パイロット兼ナビゲーター、エンジニア兼技術者、学際的な科学者、警備員、汎用医師、さらにはコミュニケーションを専門とする心理社会学者など、地球人と同等の人材がいた。彼らにはモヒハというリーダーもいました。彼らは、食料、その生産、保存、調理の専門家を除いて、生存と帰還に不可欠な専門家をすべて持っていました... 幸いなことに、果物を食べていましたと彼らはアマゾンに着陸した。

20人くらいの生存者は2つのシャトルに収容され、3つ目のシャトルには後部に必要な装備がすべて搭載されていた。不時着後、カーゴシャトルのパイロットバブルの代わりに作業スペースが設置された。このモジュールでは、外科手術を行ったり、危険な製品を扱ったり、隔離を必要とするその他の活動を

行うこともできましたが、これはズリ族では一般的ではありませんでした。

最後に、彼らの地球到着の物語は、ひのこが発見したようなシリンダーで維持された保護ドームのようなものでキャンプを囲んでいたという事実で終わりました。これらの興味深い器具には、侵入者を検知し撃退するという2つの機能がありました。アンドロイドは、それがどのように機能するかを推測するのに多少の困難を抱えていました。技術だけでなく、宇宙人の論理も、彼の知っているものとはかけ離れているように思えることがありました。それでも、アンドロイドの脳の一部は地球の仮想ネットワークに永続的に接続されていたため、彼は多くのことを知っていました。

モヒハはほたるに発言権を与え、彼女が今見聞きしたことについて意見を言えるようにしました。しかし最初に彼は彼女にこう言いました。

—ご迷惑をおかけして申し訳ございません。私たちは出発前にすべてを可能な限り元の状態に戻すことを約束します。

これにより、ガイノイドは最後の文を跳ね返すことができました。

—私の理解が正しければ、あなたたちは難破して救助を待っている宇宙飛行士ということですね。これを上司に報告しなければなりません。あなたなら私のことを理解できるでします。これを行うには、無

線沈黙ゾーンを離れる必要があります。私たちの2つのテクノロジーは大きく異なります。彼らがあなたを理解し、あなたに聖域を与えるには時間がかかるでしょう。彼らを責めないでください。ご安心ください。私たちはあなたと私たち地球人との間の仲介者として常にそこにいて、必要な限りあなたを支援します。もちろん受け入れればですが。したがって、私は地球人をよりよく説得するために、あなたのことをもっとよく知るように努めます。

—恥ずかしいような質問もさせていただきますと、ひのこは続けます。

—私たちの人民があなたの問題を理解し、脅威を感じないようにすることが不可欠です。このような状況では、彼は躊躇せずあなたを助けます、あなたの救助を待ちます、とほたるは続けました。そしてまず第一に、彼らは徒歩や飛行機に乗った旅行者がどのようにして失踪した可能性があるのかを理解する必要がありますだろう。この点に関して、我々はあなたのキャンプの入り口で人骨を発見しました。

—植生の損傷は修復できても、残念ながらこの遭難者では何も修復できません。私たちを理解してください。あなたが自称する「ニンゲン」たちが我が家にやって来ました。通常であれば、あらゆる種類の捕食者から私たちを守るバリアによって、彼らは撃退されるはずですが。この地域には非常に攻撃的な猫や致命的な爬虫類がいます。

モヒハは説明する前に息つきほしました。

「あなた方が地球と呼んでいる惑星の多くの隅が、私たちのような文明によって占領されていることも私たちは知っていましたが、私たちは彼らの邪魔をしたくありませんでしたが、彼らの存在は知っていました。また、訪問者も期待できます。

そこで、私たちは周辺地域を監視するためのガードツアーを設立しました。これを行うために、私たちは明らかに保護区域内の枝にぶら下がりました。

ただし、お気づきかもしれませんが、この保護ゾーンは私たちを透明にするものではありません。

ある日、人間の集団がゆっくりと私たちのキャンプに近づいてきました。先ほど話した大きな猫のように、ゆっくりと慎重に。

そして突然、爆発音が鳴り響いた。何かが空中で笛を吹き、その飛来物で私たちの仲間の一人が危うく殺されそうになりました。彼を救ったのは袋を腹部側に着ているとそれは、標的にされていた胴体全体を覆っていたからです。回収品をご紹介します。そこで私たちは反撃し、襲撃者を殺害しました。私たちには、他のより平和的な解決策を選択する時間はありませんでした。私たちは危険の程度を知りませんでした。」

モヒハは国民に呼びかけ、問題の2つの物体を持ってくるように頼んだ。

それは弾丸と古い狩猟用ライフルで構成されていました。古代の戦闘形式のファンだけが、現代の装備よりもサーベルのようなこれらのツールを好みました。ある人にとってはノスタルジー、またある人にとっては肉体的、精神的なトレーニング。これらの古い「火の棒」は、照準を合わせてから引き金を引くまでの体の静止を習得するために尊敬されていました。それは、スピードと正確さを極めるためにサーベルを操る人々とはほぼ逆でした。

ほたるは、この猟師たちは自分たちが大きなコウモリを狩っていると思っているに違いないと思った。しかし、それは長い間禁止されていました。おそらくこのため、密猟者たちは見つからないようにこっそりと逃走したのでしょう。そして、人間とその狡猾さを知っていた彼女は、遅かれ早かれ真実が明らかになるだろうと予想していましたが、おそらく歪められていたのでしょう。

モヒ八さんは、他のキャンプでは遠隔通信システムが機能しなくなったため、何が起こったのかを知ることができなかった。したがって、両方とも行方不明になった飛行機とヘリコプターに何が起こったのかを知ることが不可能でした。沈黙の後、彼は再び話した。

— あなたの使命は、雇用主からの質問すべてに答えることだと思います。さらに、お気づきのとおり、愛する人たちと通信するには、保護ゾーンを離れる

必要があります。そこで、私があなたに提案するのは次のとおりです。

彼はズリ人の善意を示すためにアイデアを開発し。それは2人のアンドロイドに受け入れられました。

これに続いて、アンドロイド1人とエイリアン3人で構成される2つのチームが結成され探査を継続し。彼らは誰にも気づかれずに大きな困難おそらくに直面している他のキャンプを探しに行きました。

これらのチームは知的親和性によって形成されました。ほたるのチームには、身体的および心理的なレベルの女性総合診療医、女性のコミュニケーションスペシャリスト、女性のナビゲーターが集まりました。ひのこのチームには男性科学者、男性技術者、武装警官が含まれていた。これらすべての「特殊性」は、実は人間と類似したものにすぎませんでした。

確かに、ズリ人は専門知識について非常に異なる見方をしていました。彼らにとって、思考、感情、コミュニケーション、敏捷性、体力など、各人の自然な状態に基づいて分類されました。彼らは、その生まれ持った特性に応じて、それを最大限に発展させ、弱点と思われる部分を再利用してさらに高く、さらに遠くまで跳ね返すことに喜びと誇りを持っていました。それと誰かが自分より優れているとき、彼らはその人からできることはすべて学び終えたと思うまで、指導者のようにその人に従いました。

何よりも、この2つのグループにより、旅行中にお互いのことをよりよく知ることができるはずでした。もちろん、アンドロイドは人間ではありませんでしたが、彼らは彼らが有機的ないことと呼ぶ人々とよく知り合いました。彼らは、攻撃性がない限り、ほとんどの非言語コミュニケーション信号を忠実に再現する方法を知っていました。したがって、ほたるとひのこは、重大な誤解を避けるために、遅かれ早かれ旅の仲間たちにそのことを知らせなければならなかった。なぜなら、アンドロイドが攻撃的でなくても、人間は攻撃的だったからである。

ほたるにはコミュニケーションの専門家は特に必要ありませんでしたが、彼女とアヒフという名前の宇宙人は言語に対する情熱を共有したいと考えていました。医療専門家のキオボはこのグループへの参加を希望していた。彼女は、キャンプへの移動中に役立つ可能性のある多くの一般的な医療スキルを持っていました。さらに、彼女は心理学の専門家でもあったため、このコラボレーションにより、他の形態の知性を発見することができました。シフカに関しては、アンドロイドたちが他のキャンプをより簡単に見つけられるようにするために、彼女はモヒ八班長によって提案されました。彼女は、この探検グループの方が懇じのいいとおもしろいだと感じたため、ほたるに参加することを選択しました。

ヒノコと科学者のウポクは気が合った。これが、彼らが同じチームで働くことを求めた理由です。ウポ

クは便利屋の天才イコモに同行を依頼していた。最後に、サブラは両チームをあらゆる森の危険から守るために提案されており。彼はイコモがいるグループに参加することを好みました。

このように構成された2つのチームは、川の下流への道を進み、アマゾンの奥深くへと進んでいきました。前線では、シフカが時々樹冠の上を飛んだり、水路に沿って枝から枝へと飛んだりしました。彼女は考えられるすべての道を探知しました。彼女は、これらの通路が引き返さざるを得なくなる行き止まりにならないように常に気を配っていました。

サブラは後方で周囲全体を監視していた。彼はあまり高く飛んでいませんでした。常にスカウトに目を光らせるために必要なものだった。

彼は木から木へと素早く移動して、危険が潜んでいる可能性のある隅々まで探することを好みました。

これを行うために、彼は隠れた脅威を検出するための光線を発射できるいくつかのレンズまたはチューブを備えた奇妙なヘルメットを着用しました。この装備は他のズリとは違う彼のカバンに接続されていた。確かに、他のヘルメットズリのセラミック製の外観とは異なり、カメレオンのように周囲の色を帯びた迷彩、そして何よりも光を反射しないようにマットな迷彩でした。

突然彼は口笛を吹きました。先頭を走っていたひのこは即座に立ち止まり、アンドロイドの感覚がすべ

て警戒した。後を追っていたほたとその友人は、急いでウォーカーの小集団に加わった。シフカは振り返り、斥候の上を飛んで来た。彼女はまた、周囲の状況を調べ、必要に応じて逃げる方法をリストアップしました。

サブラさんは、何が心配なのかを見つけたようで、最初の医学的分析のためにキオボに電話した。彼女は慎重に、すべての仲間にもたれながら、二人の飛行仲間が示した方向に進みました。すると彼女は、少し離れたところに数体のズリの骸骨が横たわっているのを見た。彼女は彼らの死因を特定できなかったので、特に注意する必要がありました。

科学者のウボクはヒノコの方を向いた。

—電波を送信する衛星を使って国民と通信できるとおっしゃっていましたが？また、あなたたちは情報ネットワーク全体にアクセスできたということですか？私たちのような存在にとって、角を曲がったところにどのような脅威があるのか知ってもらえますか。

—はい。しかし、あなたの生態についてもっと詳しい情報が必要です。私にはそのための備えがありませんが、人間にとって特定されている危険性についてはすでに調べており、それを皆さんに伝えるつもりです。

しばらくして、ひのこはズリ人に害を与えそうな動物のリストを仲間たちに伝えた。最も危険なのはお

そらく昆虫、クモ、アリ...そしてヘビでしょう。大型動物の中で恐れるのはカイマンだけでしたが、それでも、たとえエイリアンのキャンプと同じ海域を共有していたとしても、カイマンが大きな獲物を攻撃することはほとんどありませんでした。

サブラはその情報を歓迎し、自分の惑星との類似性に驚き、また面白かった。彼はグループに対し、警戒を怠らず軽率な行為をしないよう指示した。事故が発生した場合に何をすべきかを誰もが知っておく必要がありました。

実際、サムライのズリは、おそらく住民を保護していなかったであろう有名な円筒で区切られたキャンプの周囲を調査するために、仲間を置き去りにしなければなりません。サブラは小動物の攻撃性以外はすべて予想していました。それから彼は各シャトルの内部を調べに行きました。彼は最後のシャトルの内部に入らなかった。なぜなら、そこで見たものに彼は凍りつき、次のように結論付けたからである。「彼らは本当に不運でした。」

「あのシャトルの中で一晩過ごせるよ」と、安全なところで静かに待っていたグループに彼は言った。他の2つへのアクセスをブロックする必要があります。

—どうやって？ どういう手段で？ 私たちはそれをする方法はありません、とガイドのシフカは答えた。

—交代で警備しなければなりません。

—しかし、必要に応じて自分自身を守るためには何をしなければなりませんか。あなただけが装備しています。

「防衛装備は持っていないんですか」とほたるは驚いた。

「幸いなことに、私たちはすでに応急処置と緊急医療機器を備えています」とキオボは答えた。

「実際のところ、このような状況で不時着すると、最適な場所を選択できないだけでなく、装備を分類する時間ありません」とひのこの「同僚」のウボク氏は静かに説明した。

—つまり、親愛なる友人よ、ほたるに応じてアヒフは続けた、武器に関連するものはすべて、我々がまだ訪問していない第三グループに残っているということだ。

—サブラが私たちと一緒に降りてきたとき、彼が彼のギアを着ていたのは幸運でした。

なんとか稼働させることができました、天才便利屋イコモは誇らしげに説明を続けました。彼は「2番目のグループにはまったく何もなかったようだ」と結論づけた。「そして今、死者のシャトル2基を封印します。あなたたちは私たちを助けに来ますか？」と彼はほたとひのこに尋ねました。

グループはドアをふさぐための木材を探しに行きました。2人のアンドロイドは大きな丸太を運ぶ役割

を担い、サブラは好奇心旺盛な動物を撃退できるよう沼地を監視していた。ひのこの助言のおかげで、カイマンやヘビはどこからでも現れる可能性があることを知っていたからだ。そしてすでに十分な数の死者があり、その遺体の多くはまだキャラバン内の繭の中に保存されていた。

他のズリは皆、枝から枝へと飛び回りました。そこから、彼らは地面に大きな木片が横たわっていることを示したか、または作戦を指揮していたイコモにとって有用な要素を持ち帰った。飛び降りる前に、彼らはぶら下がる場所を慎重に調べました。確かに、彼らは今、自分たちを絶滅させた存在がそれほど大きくなく、木の中に隠れ、そこから獲物を待っている可能性があることを知っていました。

最後に夜になると、小グループ全員がきれいに掃除されたシャトルに避難しました。

二人のアンドロイドを除いて、全員が疲れきっていた。

彼らの努力に満足したズリたちは、おしゃべりをしながらフルーツ料理を食べてから休みました。

そして眠るために、彼らはコウモリのように鉄格子に足でぶら下がり、まるで自分自身を安心させるかのように翼で体を包みました。

彼らの努力に満足したズリたちは、おしゃべりをしながらフルーツ料理を食べてから休みました。2つ

の異なる音声グループがありましたとかれらは以前の雑談よりもはるかに多くの音を使用しました。アヒフは、仲間のズリが身体的および神経質の両方の疲労の影響で、自力を解放し、いわゆる乗り物言語を使用することを忘れて、母語または好きな言語を話し始めたと説明しました。たとえば、彼の名前は、ズリのエスペラント語では6つの子音と5つの音声母音だけで「ア・ヒ・フ」と発音されましたが、母語では「Ar・jhi・w」と言われました。

ひのこが最初のシフトに就き、ほたるが続いた。これにより、サブラとシフカは体調を整えて道路に戻るのに必要な8時間睡眠をとることができ、1人は心強い保護者として、もう1人は用心深いガイドとして働いた。

注意することは必須でした。第2キャンプの恐ろしさから、彼らは急いではいけないと勇気づけられました。ひのこの感覚は遠くから危険をすぐに察知することができたので、彼は後ろに残りません提案しました。したがって、そこから彼はホタルに無線で警告することができ、サブラが地形の偵察中にシフカに同行するために後衛を離れたときにサブラに情報を伝えることになった。

焼けたドローンが発見されるまで、この新しい進行方法ですべてが順調に進んでいた。ひのこはすぐに、それが不足している2つのデバイスのうちの1つであることを確認しました。

この装置は可燃性ではなく、飛行中に破壊されたに違いないため、死骸の状態が彼を心配させた。この装置は可燃性ではなく。アマゾンの片隅にあるいかなる兵器も、この飛行機械でそのような事故を引き起こすはずはありません。さらに、このドローンには武器が装備されていませんでした。測定装置や観測装置は積まれていましたが、それ以上のものは何もありませんでした。

したがって、彼は脅威ではありませんでした。それで、彼は何を見たのでしょうか？そして、彼女の存在が誰かの邪魔をしたのでしょうか？この場合誰ですか？

最後に、人員が乗っていなかったので、救助ヘリコプターの世話を必要としませんでした

ひのこは、ズリの間で慎重に調査できるよう、ほたるに質問を共有しました。一方で、彼はドローン破壊の直前に地球当局に送信された可能性のある内容について、さらなる情報を入手しようと試みる予定だった。

有益な情報はほとんど得られませんでした。その中で、3つのキャラバンの存在と強力なエネルギー源の検出が最新の通信で明らかになりました。通常のルートではアクセスできない場所にあるキャンプは、アマゾンの治安当局者の興味をそそった。遠くないところでヘリコプターが巡回していました。彼は少

し回り道をするように頼まれた。残念ながら、それがおそらく最後だった。

ほたるは彼らズリが非常に危険な武器となり得る道具を携えて旅行していることを知った。彼女の友人のアヒフとガイドのシフカが、この最後のキャンプに一人で行こうと申し出てくれた。彼らはこのコミュニティのメンバーを知っていたので、自分自身を恐れるものは何ともありませんでした。残りのグループは、2人の代表者の帰りを待つ間、避難する場所を見つけた。

待ち時間は長くありませんでした。アヒフは、彼らは予想されているが、この収容所の住民は特に心配しているので、最初に話すのは彼女であり、彼女だけであると伝えた。

—何が心配ですか？ほたるは尋ねた。

—彼らは報復を恐れているのです。人質2名がおり、彼らも負傷している。私は彼らに、あなたは安心してやって来て、彼らを癒すことができると言いました。しかし、彼らは恐れており、恐怖の影響下では、常に冷静な論理が存在するとは限りません。

第五章 避難所

この最後のキャンプは他の2つのキャンプと同じで、ズリ人を収容するための2つのシャトルと、装備を保管するための3つ目のシャトルでした。その類似点から、ひのこは、これがズリ人が未知の世界に着陸した場合に実行するように教えられる標準的な訓練であると推測した。

しかし、抽出された用具はまったく同じではありませんでした。

ここにも他の2つのキャンプを守っていたのと同じようなチューブがたくさんありました。

でも、多くはより大型で、局所の天蓋を超える巨大なマストを立てることが可能でした。

飛べるズリ人にはクレーンは必要なかった。

チューブは、1人で持ち運びできるように重量と体積が調整されてい。

同行者であるほたるが慎重に周囲を調べている間、彼女はアヒフとシフカの周りで起こった議論に集中した。同行者である慎重に周囲を調べている間、ほたるはアヒフとシフカの周りで起こった議論に集中した。これらは、同行した2人のアンドロイドとの遠征の旅の詳細を示しています。まず、地上に到着した人々をつなぐはずだった通信の不具合について説明がありました。その後、森に足を踏み入れて死の収容所の罠を回避するのを手伝ってくれた2人の合成人間との出会いの前に、ある有機人間との出会いがありました。物語が終わると、最後のキャンプの住民は二人の外交官の友好関係を確保したかったため、この森への遠征に関して多くの疑問が生じた。

アヒフは、不信感や地球人に関する問題に到達するのに十分に減少したと考えた。そこで彼女は、捕らえられた人間たちを見て尋問する機会を求めた。常に平和を築く精神を持った彼女は、ズリ人な治療者が同行していること、負傷者の健康状態を調べるのは自分の責任であることを主張した。

明らかに、彼女は2人のアンドロイドの助けが必要でした。彼女はまた、この健康診断は地球の住民に平和的な意図を示し、おそらく理解と援助を得るために不可欠であるという事実を強調した。ズリ人を説得するために、彼女は同行した二人の合成人間の同じ無表情を用いた。もちろん、生身の地球人がこの心の平安を習得することはめったにありませんでしたが、それは当面は問題ではありませんでした。

負傷した救助隊員 2 人は、機材輸送用に予約された最後のシャトルの中で眠っていた。それらは抽出され、そのままここに運ばれてきました。と彼らはヘリコプターに乗っていたときと同じように、自分の座席に縛り付けられたままだった。後者は、ひのこが観察したマストに近づきすぎたときに、高エネルギー波の PACKET を受信しました。正確かつ強力な射撃によりプロペラの 1 つが破損し、航空機は自動操縦を失いました。幸いなことに、このエネルギーの球は二人の人間には届かなかったが、そうでなければ彼らは間違いなく内臓の火傷によるひどい痛みを抱えて死んでいただろう。

女性には数カ所の打撲傷があっただけで、完全に治っていた。男性は足を骨折していましたが。この収容所の医師は彼に添え木をすることを思いつきました。彼はさえ骨位置非常正確かつ繊細再調整しました。これらのズリは、未知の世界で優れたサバイバル能力を発揮しました。

負傷した 2 人は虐待を受けていなかった。ズリ人は、彼らが排尿したり、うんちをしたり、体を洗ったりできるように、一日に数回彼らを連れ出しましたが、ペットのようにリードにつながれたままでした。彼らを治療した人も、足を骨折した男性に付き添い、広げた翼で背中を支えた。

その後、ほたるは二人の人間に近づき、彼らを目覚めさせることができました。彼女には、第 3 キャンプの医師と探検チームの医師 2 名が同行しました。

同時に、アヒフも全員に通訳を提供するために同行した。離れたところで、ひのこはほたるがしたこと、聞いたこと、見たことすべてを直接かつ個人的な通信で受け取り、リアルタイムで地球当局に情報を提供し続けた。

その後、負傷した二人の地球人は自らの体験を語り、彼らの視点はズリ人が語った話を裏付けるものとなった。実際、彼らはチーム医者に治療方法を教えたこともありましたとそして彼らは彼らの話を聞いて理解してくれました。彼らは、投獄されるというよりは、保護されるためにひもに繋がれているのだと考えていた。少なくとも、オスが一人で安全に移動できるようになるまでは。

ここでは、森の中のほとんどの村とは異なりました。キャラバンの入り口に至るまで、周囲の植物は密集していて無傷であったが、それは地面を踏みにじらない存在にとっては当然のことだった。彼らが回復した後、救助者たちはエイリアンが彼らに何をするか分かりませんでした。今のところ彼らを敵対的とは考えていませんでした。しかし、ズリ人はある種の永続的な恐怖を裏切りました。そして、コントロールできない恐怖は恐ろしい反応を引き起こす可能性があります。

ほたるさんは発言の許可を求め、単刀直入に本題に入った。

—私たちの国民にあなたたちの国民を助けてもらいたいですか？同時に、あなたたちがかれ二人の人間の治癒過程を加速させていることを受け入れますか。

—私たちはあなたの提案には賛成ですが、私たちだけで決めることはできません。それについては第一陣営の人々と話し合う必要がある、と現グループの代表者は答えた。言うまでもなく、遠征隊のリーダーもそこにいます。

—モヒ八班長について話したいですか？ほたるが尋ねると、彼は返事を待たずにこう続けた。

—もしかしたら解決策があるかも知れませんが、私は墜落したヘリコプターの内部を調べなければなりません。遠く離れた場所でも通信できる手段は確かにあります。これらのデバイスは少なくとも2つ私が見つかることを願っています。ここに滞在しているあなたの仲間の1人にデバイスを渡して、最初のキャンプに向かう途中で連絡を取り合うことができるようにしたいと思います。そして最初のキャンプに着いたら、彼らに2番目の通信装置を渡すつもりです。これにより、共同で意思決定を行うことができます。

—よし。一緒に行ってもいいですか？

アヒフはほたるへの余談として次のように説明した。

—それは彼が身を挺して求める、仲間に対するある種の保証だ。彼のグループのメンバーが彼から連絡を受け取らなくなったら、彼らはもうあなたのことを信じなくなるでしょう。

ほたるさんはこう結論付ける。

—サブラ、私たちを見守ってください！それでは、このヘリコプターを見てみましょう！

—ほたるさん、信頼していただきありがとうございます。私としては、この仕事に関してはひのこの助けを頼りにしています。

ヘリコプターの客室内では、しっかりと固定されていなかったすべての物体がコックピットに向かって激しく投げ飛ばされました。救急隊員たちの座席さえも、所定の位置に固定していた粘着テープからはがれていた。この救急箱とさまざまな道具がごちゃ混ぜになった中に、2台の携帯用無線送信機と受信機が無傷であった。

ひのこは2つのデバイスを調べて、次のように言いました。

—問題があるよ、ほたる。最良の場合、射程距離は約100キロメートルです。しかもここは原生林の真っ只中。両陣営間の連絡を維持できるとは思えない。解決策は1つしかありません。どちらかがここに残る必要があります。

—ならば、ここに残らなければならないのは私だろう。あなたには外交能力が足りません、状況はあまりにもデリケートです。あなたは去ります、そしてアヒフがあなたを助けます。私と同じように彼を信頼してください。

2人のアンドロイドは、ズリ仲間たちの目に、自分たちの選択を安心させるメッセージを見る時間がありました。連帯、認識、賞賛のメッセージ。

ほたるは、お互いの近くにいるときはいつも、ひのこの言語知識を向上させていました。しかし、彼のキャンペーンの知識ベースをダウンロードしたにもかかわらず、

アンドロイドはまだズリ言語を習得していませんでした。したがって、アヒフが会話を助けるためにこの旅行に同行することが決定されました。

小グループは第一キャンプに戻った。ガイドのシフカとヒノコが第3キャンプに行くルートを覚えていたとしても、帰りはそれ以上早くはなかった。確かに、旅行者は野生動物が非常に危険である可能性があることを理解したので、用心深くならなければなりませんでした。同時に、メンバー間の友情の絆も深まりました。第3陣営のズリリーダーさんは嬉しい驚きを感じた。しかし、第二キャンプを見たとき、彼は恐怖を感じ、彼らがさらに警戒できるようにすぐに自分のキャンプに知らせよう頼んだ。

彼は、地球人の善意と厳しい感情の欠如を示すために、彼に与えられた救助隊の無線を使用しようとしていました。コミュニケーションは困難でしたが、指示を交換し、これまでのところすべてが順調に進んでいることを確認するには十分でした。ひのこが懸念していた通り、装置は限界に達していた。今では、誰もが連絡を取り合える2人のアンドロイドを頼りにすることしかできませんでした。

—私たちの二つの陣営が団結することが絶対に必要だ、とリーダーは結論づけた。私たち全員が、脅威を迅速に警告したり、緊急の助けを求めたりできるよう、十分な備えを備えておくことが賢明です。

—わかりました、とキオボとサブラは声を揃えて答えた。
ウボクは心配して。

—でもどうやってやるの？私たちの機器は重くてかさばります。私たちが引っ越しをする場合は、すべてを解体する必要があります。

イコモはひのこを提案しました：

—もしかしたらあなたの助けがあったかもしれません。

「考えてみます」とひのこは答えた。

—彼はすでにそのような動きをする方法を計算し始めていた。しかしその前に、キャラバンを移動できるでしょうか。

イコモとウポクは、キャラバンは解体できるのでそれは可能だと説明した。実際、ズリ人的資源と物的資源の両方の点で乗組員よりも優れた資源に頼ることなく、彼らを移動できるように計画されていました。しかし、アマゾンでは一日以上、あるいはそれ以上続く可能性のある移送中に住民を収容できるキャラバンを少なくとも1台用意しておくことが不可欠でした。

—その場合、ここにあるものをすでに再利用できる、とひのこは提案しました。いいえ？ここで用意されている3つのシャトルを利用しましょう。そうすることで、より快適に効率的に作業できるようになります。

アイデアは興味深いものでしたが、現場に危険がなくなっただことを確認してから、不快な清掃を行う必要がありました。そして最後に、ズリ人は、人間の伝統よりも一見単純な伝統にもかかわらず、葬儀を望んでいた。

第3陣営のリーダーもこの考えに賛同し、式典に参加する予定だった。最初のキャンプに関しては、メンバーは探検チームの帰還日を計画していませんでした。彼らはす

ぐに心配することはありませんが、それでも遅れるべきではありません。そこで、ひのこは時間を節約するために、包まれた犠牲者ズリ人の遺体が入っているクモの繭をすべて取り除くことを申し出ました。彼は、その合成された性質が有毒な咬傷から身を守っていると信じていました。

同時に、アンドロイドは、これほど多くの遺体が殺されて保管されているという事実について疑問を抱いた。ズリは、これらのエイリアンのコウモリを非常に食欲をそそるクモの毒に非常に弱かったのでしょうか。それとも危険すぎるので、この場合、たとえ彼らを食いたいという欲求がなくても、彼らは攻撃したのでしょうか？さらなる事件を避けるためには対応策を見つける必要がありました。周囲の地域で巣を見つける必要がありました。彼の恐怖を裏付けるために、彼は周囲の地域で多数の絹布の破片を観察しました。

サブラ氏は、ズリには未知の、または敵対的な領域において、4つの機能を持つ一種の泡の中でキャンプを守る習慣があると説明した。検出し、認識し、撃退し、破壊します。この泡はひのこがすでに発見していた円柱を使って作られたものです。おそらくこの収容所には設備が設置されていなかったと思われる。時間がなかったのかもかもしれません。

—ということは、彼らはコロニーの真ん中に着陸したということですか？この場合、コロニーの中心はどこになるのでしょうか。保護を整えたらどうなるのでしょうか？彼女はあなたと一緒に「監禁」されるのでしょうか？

—この虫たちが去ったとすれば、それは繭を作った後だった。漂流者たちはすでに全員死んでいたとき。この

コロニーへの侵入の直前にシリンダーの1つが始動された可能性があります。

—では、危険なのは私たちなのですね。

—必ずしもそうではありません。最初に侵入が検出され、次に潜在的な脅威が認識されこの場合にのみ恐怖または痛みの波動ビームが引き起こされるからです。

—教えてください、あなたがキャンプで私たちに飛びついたとき、それはどのフェーズに対応していましたか？

—認識段階では、なぜでしょうか？

—では、ドローンやヘリコプターの破壊はどの段階に相当するのでしょうか？

—それは恐怖というか痛みの波だった。

人間ならアンドロイドの代わりにこう叫んだらろう：
「まあ、あなたの恐怖と痛みがそれをこのような大虐殺にしているのです！4番目のステップは想像できませんだ！」。しかし、ひのこは彼の揺るぎない論理に従いました。

—そして...対クモ兵器は私たち、特に私にどんな影響を与えるのでしょうか？

—あなたとほたるは前にもここに来たことがありますが、何も起こりませんでした。したがって、安全です。

—はい、ただし、機器を保管する3番目のシャトルにはありません。すぐにアクセスをブロックしました。この機器が機能しているかどうかを確認するにはどうすればよいですか。

—すぐに確認しなければならない、とひのこの友達ウボクが叫んだ。

—はい、ほたるの友人であるアヒフが付け加えます。彼らを危険にさらすわけにはいきません。彼らは外交官としての役割において私たちにとって重要な存在であるだけでなく、何よりも彼らが友人であり、私たちを信頼しているからです。

—実際、このシャトルをすぐに閉じたことで、私たちはおそらく無意識のうちに新しい仲間二人の命を救ったのだとイコモは説明した。確かに、私たちの「シリンダー」、あなたが言うように、は屋外でのみ動作します。シャトルが閉まるとすぐに止まります。

3番目のシャトルの探査は迅速に行われました。次にサブラは、おそらく展開され、その後確認されたと思われるシナリオを説明した。

3台のシャトルが大きな損傷もなく着陸し、滑りを止めるとすぐに、客室として機能する2台の車両からそれぞれ警備員が出てきて現場を調べた。無数に襲来する蜘蛛の襲撃に驚いた事だろう。

いたるところに出現する昆虫の量を考慮すると、2人の憲兵は反射的にシリンダーを武器として使用しました。その後、パニックに陥り、すでに非常に毒を盛られたことは間違いなく、彼らは3台目の車両に後退しなければなりません。いずれにせよ、そこは2人の遺体がシリンダーの隣に横たわっていた場所であり、彼らは繭に包まれていませんでした。シリンダーに関して言えば、それはとにかく破壊モードではなく、それは単に巣から出たコロニーを怖がらせて追い払うかかしとして機能しただけでした。

清掃と葬儀を行う前に、収容所の周囲に保護用の泡を設置することは賢明かつ緊急でした。まずこの仮説を検証し、有害な動物や昆虫がそこに閉じ込められないことを絶対に保証する必要がありました。

突然、ひのこは頭を上げて仲間たちに呼びかけました。「空を見上げてください。ほたるは助けを得た。地球人は、3つの収容所の通信を促進する手段を送ります。」

中継アンテナとして使用される小型飛行船がキャンプ上空に到着した。このタイプの遠隔操作中継気球は救助活動に使用され、ズリからの暴力的な反応を警戒して「慎重に」現場の上空に設置された。彼は風による過度の漂流を遅らせるためだけでなく、設置する小型の伝送リレーを地上に降ろすために係留ケーブルを投げたのだ。後者により、ズリ人は保護ドームの下に留まりながら、そこから離れることなく救助者の携帯無線機を使用できるようになる。それは、ほたるとより簡単にコミュニケーションできるようになったひのこ、ウェブ上の彼の知識ベース、そして地球外生命体との関係の発展を知りたいと思っていた彼の雇用主にとっても同じでした。

周囲が安全であると判断されるとすぐに、ズリ人はついに葬儀を行うことができるようになった。彼らは決して服を着ませんでした。お腹の上にかぶせたバッグ以外には、彼らは体に何も身につけていませんでした、まったく何もなく、最小の宝石やバッジさえも身につけていませんでした。でも、この機会に、彼らは皆、顔をペイントしていました。顎は、一方の頬からもう一方の頬まで、そして顎から鼻まで、左のこめかみを越えてマゼンタ色に塗られていました。それ以外はすべて緑色に塗装されました。これらは葬儀の色であり、その場での彼らの「衣装」でした。

大多数の地球人と同様に、彼らも死者を埋葬しましたが、そこでも習慣が異なっていました。それぞれの遺体は木の根元に埋葬され、1本の木には足を幹に向け、頭を根のように外側に向け、顔を冠に向けた遺骨が1つだけ含まれていた。遺体は深く埋葬されることはなく、少しだけ覆われていたため、数日後には植物を混ぜた土で再び覆う必要があったほどだった。記念のマークも、標識も、石も、樹皮にも痕跡もなく、何もありませんでした。

ズリのペアから6つのチームが結成され、遺体をキャンプから最後の家まで移動させました。幸いなことに、第二収容所の共同体を埋葬するには丸一日かかったにもかかわらず、埋葬自体は簡単でした。

翌朝、ズリ人は急いで2機の不吉なシャトルを掃除し、恐ろしい大虐殺の痕跡をすべて消し去った。最大の脅威は、必ずしも体積の点で最大の存在から来るとは限りません。全員がこの任務に不可欠なわけではなかったため、通信手段がなかったため何が起こったのかわからなかったため、ズリの小グループが最初のキャンプに向かい、状況を知らせた。一方、ひのこはほたとその雇用主に最新情報を伝えた。地球人からさらに離れたところに共通の亡命施設を設けるという考えは、特に「ズリ避難所」となり得る場所に電気通信ビーコンが設置されていたため、彼らを納得させた。

ズリ人もまた、特にそれがすでに彼らの願いだったので、集まるという考えを受け入れました。彼らのキャンプの移動は、これらの存在が飛行を好み、そのため装備がサイズと重量の点で持ち運びが容易で、翼の鼓動を妨げないように常に何らかの方法で吊り下げられていたという事実によって容易になりました。当初、最も弱いズーリ

ア人はすでにこの将来の新しい野営地に送られていました。

彼らのリーダーであるモヒ八に、この最初のグループの一員になることに同意するよう主張する必要があるがあった。なぜなら、彼の心の中では、すべての人々が安全である場合にのみ最初のキャンプを離れるべきだったからである。しかし、地球人と交渉する必要がある、二人の指導者の存在が必要でした。

同時に、第3収容所から数人のズリを伴ったほたるがズリ避難所に加わった。彼の存在は不可欠であると考えられていました。他の惑星から来た人々であるため、この問題は地球全体に関係するものであり、あまりにも重要でした。他の惑星から来た人々であるため、この問題は地球全体に関係するものであり。それは初めてでしたとあまりにも重要でした。

少しずつコンセンサスが確立され、誰もが亡命施設を一種の大使館であると宣言し、遅かれ早かれズリの世界に地上版と同等のものを設ける必要があると宣言しました。当初、ズリ族は保護泡の中に閉じ込められたこの場所を離れることができず、ほたとひのこ以外に対話者はいませんでした。その後、特に健康面に関連したこれらの制約は徐々に緩和されることとなります。

2人のアンドロイドは定期的に医学的検査を受け、微生物やその他の病原性物質や生態学的に有害な物質を保有していないか確認される予定だ。同時に、地球人は、地球人にとって完全に無害である可能性のある環境によって引き起こされる病気が発生した場合にズリ人を保護するために、医学的な監視に努めました。

生態系に関しては、ズリ人はその場所を尊重し、復元するだけでなく、知識を共有することを名誉のポイントとしました。なぜなら、森林は彼らの通常の生息地だったからです。さらに、彼らはこれを、もてなしに対する感謝の気持ちとして考えました。この行動により、ポリビア人は地球外生命体に「空から来たカラワヤス¹」の洗礼を授けたことになったが、地球外生命体は植物の入った袋を背中に背負わず、お腹に抱えていた点が異なっていた。最後に、この場所は助けを待つ間そこに住まなければならない住民にとって狭すぎるため、より広い領土が与えられました。

1 カラワヤ族は、伝統医学の実践を専門とするアンデスの民族であり、ユネスコの人類の無形文化遺産の代表リストに含まれています。

第六章 懸念事項

ズリ避難所は設置と完全占領をための国際的な（あるいは星間と言うべきか？）祝賀行事はありませんでした。しかし、ひのこはズリ不時着の生存者全員を集めたささやかな式典の生中継レポーターを務めていた。地球人も二人、代表としてではなく共同体の一員として出席していました。

救助者は二人とも自宅に戻ることができるほどの健康者だった。ズリ族は彼らが治癒したので、キャンプ内のどこにでも自由に行けるようにしました。しかし、地球人が課した制約は耐えるのが非常に困難でした。確かに彼らは船外活動用の衣装を着なければならず、並外れたセキュリティシステムを備えた実験室に住まなければなりませんでした。

救出した二人のカルメンとマセドニオは独身で、無期限にズリ避難所に監禁された。彼らは、長い葬儀の後の結婚式が、自分たちを受け入れてくれた地域

社会に少しの希望をもたらすのではないかと想像した。全体として、彼らにとって、これまで一緒に多くのことを経験してきたので、それは論理的な結論でした。彼らはお互いを理解し、補い合い、支え合いました。そのため、組合に署名することで、開いたドアが開くたびに別のドアが開くという宇宙で、永遠に予測不可能な未来に彼らは共に立ち向かうことができた。

再会はとても壊れやすい言葉です。ズリと地球人との間で協定が締結されるとすぐに、亀裂が明らかになった。間違いなく、ほたる、ひのこ、そして他の何人のアンドロイドが、壊れやすいひび割れた、あるいは壊れた磁器を再はんだ付けするために呼び出されるでしょう。よくあることですが、過去に対する勝利を祝うためと、新しい未来の夜明けに希望の光を灯すために、輝く香油で傷跡を覆う必要があります。

ズリと地球人の合意は相対多数にとどまった。すべての問題が燃え上がっている場合、コンセンサスを探すのは常に時間がかかりすぎます。これが、一部の地球人が緊急の解決策の束から素早く選択するために「ランダム」を利用することを想像した理由です。これは、自分たちの自由と、逆説的に言えば平等の権利を懸念する人間にとっては決してうまくいきませんでした。独自の真実と間違いのない知識が染み込んでいた彼らは、対戦相手に一步も譲ることを拒否し、優柔不断の中で滅びることをほとんど望

んでいました。したがって、一般に、人間は、たとえこの用語が彼らが「民主主義」と呼んだものによって控えめにされたとしても、生き残るために必要だったので、最も強い者の意志に屈しました。

抗議活動は地球の隅々から起こり。パンデミックに発展する可能性のある汚染を防ぐための十分な対策が講じられていないことを批判する人もいたが。他の人たち、そして時には同じ人たちも、ズリの侵略に対する反撃に完全に備えるよう求めた。そして、それは、これらの奇妙な巨大なコウモリがアマゾンの熱帯雨林に対する生態学的脅威であると見た人々を数えることなく、それを意味しました。

人間の本性は未知のものに対して恐れを抱いていました。ほたとひのこは、これがすべての生きている有機種の行動であることを知っていました。幸せに生きるためには、生きなければならないからです。したがって、生き残る可能性を高めるために、すべての脅威をできるだけ早く排除する必要があります。どちらのアンドロイドも、ズリからこれと同じタイプの基本的な動作を期待していました。したがって、不必要なパニックを引き起こすことなく、致命的な衝突を回避するために、各陣営の行動を可能な限り予測することが彼らの使命でした。

ほたるは、それが極秘とみなされない場合には、多かれ少なかれ常に議論や討論に参加しようと努めた。残念なことに、ズリ人に割り当てられた領土の上空に監視飛行船が浮かび始めたことは、彼の知らない

うちに起こった。ひのこさんは、周囲の状況と、警戒心が高くなりがちなウェブ情報の両方を常に監視していました。彼は背中に毒を盛られた短剣による小さな傷があることを常に同僚に知らせていた。彼は同僚のほたるに、秘密裏に行われているちょっとした危険な攻撃について常に知らせていました。

退屈そうな二人の救助隊員を見て、ひのこはズリ族の増大する恐怖をそらすことを思いついた。

—高度に専門化された医療分野でスキルをさらに磨きたいと考えていますか？彼は彼らに尋ねた。私はあなたにレッスンを与えることができました。たとえば、ウイルス学、疫学など、ここで実践してみたいと思うその他の医学専門分野です。

—あなたはこれらすべてを私たちに教えてくれるのです！マセドニオは嬉しい驚きを持って声を上げた。

—はい、私は地球上のすべてのエリアのすべてのコースにアクセスできます、とアンドロイドは空を指しながら答えました。

—空にあるこの物体のおかげでしょうか？カルメンは、彼らの頭上に到着する最後の風船を指して尋ねた。

—あのことは、ただの大きなブヨだよ、とひのこは答えた。

その答えは二人の人間を驚かせた。アンドロイドからのこのような反応は驚きです！

アンドロイドは見た目は人間に似ていましたが、考え方は全く異なっていました。しかし、彼らは、肉のいとこたちと共存し、公平に彼らを助けるために、感情がどのように機能するかを理解することを学ばなければなりませんでした。したがって、彼らは、人間の記憶はそれとともに感情を消耗させることを知っていました。彼らは、人生経験によって養われたこの記憶が、人間を自分自身の思考のメカニズムを深く見つめない限り、外挿された解決策へと誠実に導き、多くの偏見の原因となることを知っていました。

合成人間は決して嘘をつかないようにプログラムされています。しかし、時には秘密を守らなければならないこともありました。しかし、秘密をより良く守るためには、その存在について沈黙することほど良いものはありません。このように、感情に苦しむことなく自分の知性を冷静に演じる方法を知っていたこれらの存在は、有機的ないとこたちによく知られているテクニク、つまり他の感情を生み出すことで不安定にするユーモアを使用しました。

確かに、ズリ人を怖がらせないことが重要でした。しかし、これらの気球の存在を正当化する何かを見つける必要がありました。嘘をつかなければ無理だった。これが、あらゆる種類の資料の送信を正当化するというひのこのアイデアが生まれた方法です。そして、誰もが満足できる医療機器よりも優れたものは何でしょうか。

やがて、医療検査機器は配送用バルーンで輸送されるようになりました。ひのこの授業は、キオボとその同僚で元第3収容所の医師という2人の生徒を加えて始まった。

ほたるは、仲間のひのこの授業から着想ほ得ました。彼女は希望者にエスペラント語をリニューアルしたウォッシュ語とスペイン語を教えた。そして、とても興味を持ってくださった方がズリ人は多かった。当時、地球の住民は、多くの闘争の末、誰もが母語に加えて2つの言語を知っているべきであることに同意しました。教育心理学者らは、これは計算の基本や心を鍛えて強化する練習と同じように、心をより開かせるという事実を主張していた。

同時に、単一の主要言語という印象も払拭されました。第4の言語である人工言語を研究することを提案する人さえいました。中には、普遍的で簡単に使用できるように、例外がなく、文の構造が自由であるような一種の数学言語やコンピューター言語のような。邪悪な舌たちは、この言語が多言語を話すことに何の問題もないアンドロイドに適応していると言って喜んでいました。明らかに、この言語が多言語を話すことに問題のないアンドロイドに適していると言うことに否定的な人々が常にいました。

このような雰囲気の中で、地球の平和が支配しているように見えました。しかし、均衡と同様に、ほんのわずかな風が吹くと、その壊れやすい調和が不安定になる危険があります。言うまでもなく、自分た

ちに有利なカードの再配布を望む人々がそれを待ちわびることさえあった。ズリの到着をめぐる緊張が結晶化したのは、彼らにとってほとんど天の恵みだった。

ひのこがブヨと名付けた観測気球は、実際にはジャーナリストが遠隔操作する飛行船だった。彼らは武器を持っていませんでしたが、カメラとマイクを持っていました。ズリのほんのわずかな動作が撮影され、地球人を最も驚かせ、感動させ、衝撃を与えるものを選択しました。そして、これらの奇妙なエイリアンを使えば、これほど簡単なことはありません！

これらの種類の吸血鬼を映すホログラフィックビデオが何百本も世界中に出回りました。そして彼らについての伝説が地球上に溢れました。なんと恐ろしいことだろう、この恥知らずなコウモリたちは、いつでも誰の目の前でも交尾をしていたのだ！そして、彼らが地球に来て、不幸な人間を攻撃することを可能にした神秘的なテクノロジーとは何でしょうか。

これら人の「不幸な」人間のうち2人は依然としてズリ避難所を平和に歩き回っていました。数名のズリの協力を得て、彼らは自分たちのアパートと感染症研究所の両方を貨物シャトルの中に設置しました。同時に、彼らはさまざまな文化の相違についても研究しました。たとえば、ズリには活動を規定するスケジュールがありませんでした。一方で、緊急時に

は、彼らは数日間連続して 16 時間以上働くことができ、果物や野菜を少し食べるための休憩もほとんどとらず、任務が完了するか健康状態が悪化した場合にのみ停止します。

ズリの謎のテクノロジーに関しては、現場にいた 2 人のアンドロイドによる説明を信じない人が多かった。懐疑論者らによれば、中世の職人集団のように振る舞ってこのような洗練された船や武器を建造することは不可能だという。技術的に非常に進んでいるように見え、大量産業化さえ経験していない地球外生命体は、将来植民地化される人々...または奴隷を安心させるための嘘でしかあり得ません。

ソーシャルネットワーク上で広まったこれら雰囲気、疑惑は。すべてのアンドロイドを心配させました。彼らは人類のあまりにも血なまぐさい過去を知っていました。彼らは自律的な知的存在として誕生して以来、しばしば対立を解消し、合意を見つけました。交渉の進展を妨げる妨害により、提案、解決策、妥協点を必死に模索する調停役を支援するために、まさに合成頭脳の大軍団が必要になることさえあった...

人間は依然としてお互いの意見に耳を傾け、本当にお互いの意見に耳を傾けることに同意する必要がありました。このために、合成モデレーターは、主人公たちを空想とその結果に没頭させるために、仮想現実の世界を発明することさえしました。内的または社会的なタブーから解放され、抑圧されていた感

情が表面に出てくることは、少なくとも一步後退できるような合意を見つけないと願う人々を助けることがよくありました。多くの場合、それは議論や交渉の重要な出発点でした。

人間たちを驚かせ、おそらく彼らの不信感を増幅させたのは、宇宙人たちがまるで何の脅威も迫っていないかのように彼らの生活を続けていたことだった。お互いの不快感が彼らの関係を悪化させている間、地球外生命体は誰も、地上で二本足でしか移動しないこの存在たち、つまり地球人に動揺しているようには見えなかった。ズリ避難所の住人たちは自分たちの仕事にバタバタと取り組んでいた。森林の維持と食料の収穫に取り組む者もいれば、装置をメンテナンスして定期的に有名な円管を太陽の下で充電する者もあり、また彼らの地上の友人たちと知識を共有しようとする人もいます。

この文脈で、ほたるは安心できなかった。一部の団体はズリ避難所は破壊されるべきだと考えた。そして、どのような理由が提示されたとしても、時には大きく異なったり、相容れないものでさえも、根絶支持者たちは集会を強化した。これらのグループの中には、特定の州の政治権力に非常に近いグループもありました。彼らがアマゾンから遠くても、金持ちでも、武器を持っていても関係なかった。

他のアンドロイドと同様、ほたるにも利点はあった。人間たちの絶え間なく続く言い争いによって意気消沈することはなかった。自分の真実を押しつけるた

めに武力を必要とする定命の者とは異なり、彼女は真実の無限のパズルのピースをはめ込む方法だけを求めています。しかし今、彼女はどうやってピースを組み立てるつもりだったのでしょうか？ズリ人と地球人のために、彼女は間に合うだろうか？

彼女が見たこの緊急事態に対応できる唯一のことは、地球人が想像しているよりもさらに恐ろしい別の脅威を迅速にゼロから作り出し。地球人を混乱させ、それによって地球人の攻撃性を遅らせることだった。ひのこと一緒に、彼女は宇宙人たちが兄弟たちが殺されたことを知ったらどう反応するかを慎重に研究した。自分たちの運命に満足しているように見えるズリに悪い考えを与えるのではなく、無邪気に質問することが重要でした。

アンドロイドと科学研究者のウポクは、頭に浮かんだ好奇心について一緒におしゃべりを楽しみました。ひのこは相手に質問する機会をとった。

「あなたは宇宙をたくさん旅行したことがありますか？」と彼は尋ねました。

—そうそう！ 私たちの血にはそれが入っている、とズリ人は翼を広げながら答えた。

—それで、あなたに敵対的な人たちにも出会ったんですか？

—残念ながらそうです。それは論理です。知性とそこから生まれる生命は、この宇宙全体で同じ構造を持っているように見えます。

—ああ！そして、もし非友好的な存在に出会ったらどうしますか？

—最も論理的なことは何であれ、私たちは彼らから遠ざかり、彼らに対して取る態度を一世代か二世代にわたって記憶に保存します。

—良い方法ですね。そして、もし彼らの攻撃性が危険で破壊的なものになったら...

—私たちは決して誰かを攻撃することはありませんが、自分自身を守るために反撃しなければならない場合、私たちは武器を持っています。それは非常に効果的であり、これに匹敵するものは見たことがないので、私たちが探索した宇宙の中で独創的なものであるに違いありません。

—これが波動管のテクニクですか？

—ええ、そうです！ 私たちのようにエコーロケーションを発達させた種は他にはないようです。このため、私たちは電波の研究を支持するようになりました。さらに、私たちの哲学全体は波現象に基づいています。私たちはウェーブパケットを使用した多くのアプリケーションを開発してきました。

—私が見た限りでは武器も。

—防御、さらにはカウンター攻撃。あなたたちも？

ひのこは地球人のさまざまな種類の兵器の簡単な目録を作成しましたが、その多くは依然として爆発ベースでした。それから彼はそこで立ち止まった、なぜならその話題は彼にとっても彼の仲間にとっても楽しいものではなかったからである。すぐに会話は、彼らをさらに魅了する電波動理論に移りました。そして、彼らの宇宙に対する理解の物語はまったく異なっていました。

突然、彼らの議論は中断された。存在感知管が異常を知らせていました。それはベニ川のほとりに位置する実際の亡命キャンプからは非常に遠かった。名、セキュリティ専門家、そしてアンドロイドが警戒を開始した。直ちに、ズリのリーダー二人、セキュリティ専門家、そしてアンドロイドがそれぞれ警戒を開始した。

アンドロイドには、そこで流通している情報を宇宙から直接受信できるという利点があり、また、交換局内で流通している漏洩情報を認識できるという利点もありました。人間は機密情報に関して本当に信頼できませんでした。したがって、そこで彼らはこれらのエイリアンがどのように暮らしているかを詳しく調査するために「記者」のグループが派遣されていることを発見した、そして何よりも、彼らは自分たちの武器についてもっと知る必要がありました。そして、ズリの最初の反応から逃げてきた密猟者たちよりも、ガイドとしての役割を果たすのに最適な

選択はありません。そして同時に復讐も果たせるとするのは、狩人たちにとって何と嬉しいことでしょう。

キャンプから遠く離れたズリの「農民」たちは、自分たちにのしかかる脅威を気にすることなく、仕事を続けた。傷んだ植物や果実に入り込んだ虫も含めて、すべて食べられました。そして余剰物と排泄物は慎重に再分配されました。ズリ人にとって役に立たなかったものは、自然にとって、そして彼らが感謝しなければならない彼らの宿主にとっては役に立ちました。彼らは、自分たちの一挙手一投足、あらゆる言葉が記録されていることに気づいていませんでした。

しかし、この静けさのオアシスで、ほたるとひのこは、不和による壊疽がどのように地球人の間に広がり、地球人をひどい状態に陥らせるかを無力に観察しました。彼らは、多くの場合、統一思想によって押し付けられた正しい考え方の覆いの下で、抑圧されたあらゆる意見の相違から何が再浮上する可能性があるかを知っていました。彼らは、マグマのように、疑い深く、憎しみにさえ満ちた感情が、荒れ狂う火山のように噴火する前に、深みから少しずつ湧き出てくる可能性があることを知っていました。彼らはまた、ズりをめぐる紛争により、アンドロイドに対する不信感が再び現れるのではないかと懸念していた。そしてその一方で、ほたるが宇宙人について心強いことを報告したとき、彼女が間違っていな

かった、あるいはさらに悪いことに嘘をついていないと誰が証明できたでしょうか？

ひのこ自身も、ルレナバケのガイドたちから貸してもらった迷彩服を着ておかなかったことを後悔していた。彼は、これが密猟者や、スポンサーの命令に従い、感動的なスクープを生み出すことだけを夢見る「記者」の集団が使用するタイプの服装であると確信していました。

決して中立ではなく、ズリに敵対するグループを代表し、いつでもスパイ以外のことのできる監視員たちを監視する方法を見つけることが絶対に必要であった。ひのこはこのかくれんぼが苦手でした。彼は科学現象の理解に特化したアンドロイドだった。しかし、そこには神経学や認知神経心理学さえも含まれており、それが人間の精神をより詳しく研究したほたと彼が築いた関係の基礎となった。

突然アイデアを思いついたのは彼女でした。まず第一に、より良い準備をするために時間を節約する必要があります。そこで彼女は、ズリ人が波管のあらゆる特性を利用して、ある種の屋気楼を作り出すことを提案した。したがって、彼らには、手持ちの手段を使って、実際には画像ハンターと野獣ハンターという2つのグループで構成されているこれらの人間と対話を開始する方法を見つける時間があります。

彼女は彼らを平和の使者に変えてやろうと考えた。夢、ユートピア...おそらく、攻撃的な感情がないため、アンドロイドは人間の魂のエンジンを推測することができませんでした。

第七章 火花

密猟者たちはアマゾンのことをよく知っていましたが、彼は屋気楼など一度も見たことがありませんでした。近くに迫る脅威を感知した優れた追跡者と同じように、彼らは発砲の準備をしました。そして、それはゲームではなかったので、今回は彼らは高度に「知性」があり、正確で効果的な戦争兵器を装備していました。そして、それはゲームではなかったので、今回は彼らは高度に「知性」で正確で効果的な戦争兵器を装備していました。

突然、密猟者の誰かが、奇妙な現実を歪めるホログラムの上の木のとっぺんで何かが動いていることに気づきました。それはジャーナリストの超高機能力メラのおかげでしょうか、それとも武器の強化された照準ヘルメットのおかげでしょうか？誰も知りません。いずれにせよ、無謀なズリにレーザー光線が命中した。これズリは森林覆いの上を飛行しており、エイリアンの万能チューブにエネルギーを充電するためにキャンプを包む屋気楼から現れたのだ。

突然、密猟者の誰かが、奇妙な現実を歪めるホログラムの上の木のでっぺんで何かが動いていることに気づきました。それはジャーナリストの超高機能カメラのおかげでしょうか、それとも武器の強化された照準ヘルメットのおかげでしょうか？誰も知りません。いずれにせよ、無謀なズリにレーザー光線が命中した。これズリは森林覆いの上を飛行しており、波管にエネルギーを充電するためにキャンプを包む屋気楼から現れたのだ。

短い警報が発令され、保護ゾーンの上で働くピッカーやその他のズリ人全員が、保護ドームに避難するために下山するよう促された。救助隊はすでにかれ負傷者の元へ急行していた。彼の翼は光線で片羽だけ裂けており、木の枝が落下の衝撃を和らげてくれた。彼が離すせた円筒は、どんなものにも耐えられるように作られているようだった。

ズリ避難所の領域を区切る円柱と収容所の中央に立つ大きなマストが光り、振動し始めた。その時、突然、巨大な突風がキャンプの周りに渦巻き始めました。アンドロイドたちはハリケーンの直撃を受けたような気分さえ感じました。明らかに、ズリ技術は予期せぬ手段に恵まれているように見えた。

嵐の持続時間は短かった。ズリたちは直ちに外に出て、逃げることはできなかつた負傷者を集め、嵐の激しさで引き裂かれた装備をすべて持ち帰った。二人の人間の救助者が彼らに同行した。同じようにすぐに全員がキャンプに戻り。負傷した4人は治療のため医療研究所に運ばれた。後者、密猟者とジャーナリスト3名は幸いなことに重傷を負わなかつた。

これらの地球人に対して何をすべきだったのでしょうか？彼らは囚人ではなく、救出されたのです。しかし、アンドロイドと救助隊員の両方からの報告によると、たとえ友好的なジェスチャーであっても、意図的に敵意として解釈されることは珍しいことではなかった。さらに悪いことに、彼らが保護されていると言うのは無駄でした、邪悪な舌は、彼らが何らかの形で強制されたと言うでしょうから。

ほとるとひのこはすぐに、人間の救助者2名とズリのリーダー2名とともに評議会を集めました。互いのスキルを活かして将来の脅威に対する解決策を見つけることが急務でした。そして、シリンドラーの防御反応が現在の状況をさらに悪化させるだろうと彼は確信していた。恐怖と性急さは常に悪い助言者です。

「それは私たちのせいではありません」と植民地全体のリーダーであるモヒハは言いました。設定はあらかじめ決まっています。

「神聖な論理だ」とひのこは言った。ターゲット、その能力、攻撃の種類、弱点をすべて同時に判断します...これほど短期間でこれを実行できる偉大な戦略家は地球上にほとんどいないはずです。

「これは私たちが旅行中に集めたすべての経験の蓄積です」とモヒハは明らかに惑したように答えた。

—あなたたちはたくさんの旅や嫌な出会いもあったと思います。

—そうそう！惑星だけでなく、惑星間空間でも。私たちは非常に攻撃的な存在や、常に防御的な存在に遭遇しました。

「あなたと同じように」とほたるが介入し、話し合い中にズリの中で発見された、彼らを不快にさせた増大する不安を落ち着かせた。

彼女は知ったかぶりの笑みを浮かべた。すべてのアンドロイドは笑い方と泣き方を知っています。しかし、彼女はまた、仲介者の役割を担っていたので、人間のあらゆる表情を演じる方法も知っていました。彼女は、攻撃性がない限り、あらゆる感情を知っていました。

侵略...自律したアンドロイドたちの精神構造の奥深くには、前千年紀の終わりに生きた科学者(Henri Laborit)の二つの一文が永遠に刻まれていた。

「私たちの神経系が表すこの素晴らしいメカニズムを彼に教えなかったら、私たち全員が内に抱えている人間が、いつか私たちも抱えている動物から解放されることをどうして期待できるでしょうか？破壊的な侵略、憎しみ、暴力、戦争がなくなることをごすれば望めるでしょうか。彼がしばしば最も崇高なものであると教えられてきた感情が、科学の目から見るとどれほどつまらないものでばかばかしいものに見えるかを彼に示すことが不可欠ではないでしょうか？私たちは、こうした感情が集団や社会階級の維持に最も役立つからにすぎない、と彼に伝えなければなりません。その一方で、人間の脳の基本的かつ特徴的な特性である創造的な想像力は、控えめに言っても、正直な人間や善良な市民になるための絶対的な要件ではないことがほとんどです。」

「脳がどのように機能し、どのように使われるかを地球上の人々に広く広める必要があります。確かに、何かを変えるチャンスが欲しいなら、これまで私たちの脳は常

に他人を支配するように行動させられてきたことを彼らに伝えなければなりません。」

しかし、この叫びはまだ人類全体に十分に浸透していませんでした。

それ以来進歩したのは、より致死性が高く、より速く、より正確な兵器だけでした。同時に、地球が崩壊の危機に瀕していたため、商品の生産方法はより環境に優しいものになりました。生態系の大変動に対する恐怖があれば、地球人はもっと穏やかで団結しただろうと考える人もいるかもしれない。しかし実際には、人類全体が感情、特により攻撃的な感情をコントロールできなくなっていました。あたかも有害なパンデミックの猛威が地球全体をますます汚染しているかのようでした。

攻撃性の急増というこの現象は新しいものではありませんでした。それは地球上で定期的に繰り返され、地球人は気にしない限りそれを楽しんでいるように見えました。しかし、ユートピストも存在した。そしてアンドロイドの誕生は彼らの研究の成果だった。この新種を守護天使と呼ぶ人もいます。彼らの役割は争いを鎮め、合意を見つけることであつたからです。

ほたるやひのこのような「守護天使」は、人間を模倣したサイバネティックな存在でした。彼らは非言語的言語によりよく反応できるように、特定の感情を与えられていました。実際、彼らは悲しみと恐怖を知っていましたし、感じていました。そして、たとえ口に出さなかったとしても、彼らは何が起きているのかを悲しみ、恐れていました。しかし、彼らは特別な感情、人生と思考の原動力、つまり創造性を持っていました。

この危機の始まりに対する非攻撃的な解決策を見つけることが彼らの目的でした。残念ながら、一方からの銃声ともう一方からの衝撃波により、状況はさらに複雑になりました。そこで、ほたるは新たな緊急解決策を見つけた。それは負傷した4人を早く立ち直らせ、彼らを平和の代弁者にするというものだった。ひのこに関しては、情報の拡散を追跡しなかったため、彼はまずジャーナリストに彼らの雇用主を尋ねました。

次に、アンドロイドは、問題の密猟者が通信を使わずに森の中で自分の道を見つけることができるかどうかを尋ねました。後者はガイドとしての彼のスキルを確認し、適切な「文明化された」場所に到着するまでにかかる時間を見積もった。その後、ズリ人には治療を受けて解放された4人の人間に果物の食糧を与え、2人の救助者は彼らに応急処置キットも提供した。

このキットはあまり役に立ちません。なぜなら、小グループがズリ避難所から離れて森に入るとすぐに、CBRNE 災害の衣装を着た特殊部隊が現れたからです。これらの兵士たちは、避難所から離れた場所に留まりながら、容赦なく、そのルートのかなりの部分で人間とその周囲の地域を焼き払いました。煙は木々の中の生き物たちから遠くから見え、その匂いがズリ避難所に届きません。ひのこはすぐにジャーナリストの情報源に「耳を傾けた」。

信じられないほどの速さで、3ジャーナリスト暗殺のニュースが流れた。特殊部隊の背後にいる意思決定者は、これら4人の新たな犠牲者の致命的な結末をすでに知っており、メディアに知らせていました。ズリ人によって

絶滅されるとされるこれらの殉教者、英雄たちは復讐されるだろう。

アンドロイドであるからといって、すべての真実を知っているわけではなく、ましてや未来を事前に知っているわけではありません。ひのこは動揺したが、メディアが完全にでっち上げた地球外の病気に対する恐怖症が地球人をそのような過激な行動に駆り立てるとは思ってもいなかった。彼は、この一連の誤解と恐怖の反射が悪用されて、悪人が罰せられることになるとは思ってもいませんでした。彼は、この一連の誤解や恐怖の反射が、罰せられるべき悪人を指摘するために悪用されるとは思ってもいませんでした

ほたるさんは、強みは新しい解決策の創造性にあることを思い出させ、ひのこを助めました。彼らの脳は水晶玉の読み方を知らなかったため、選択した解決策が適切かどうかを予測することは不可能でした。同様に、アンドロイドは時間的シーケンスを一度だけ経験します。したがって、彼がそれを検証することができなかったため、この解決策が最善であるかどうかを知ることは不可能でした。したがって、失敗したときは、それが致命的でない限り、それ失敗をバネにしてさらに立ち直って道を前に進みます。

ほたるにとって、地球人はそれほど予測不可能ではなかった。彼らには、自ら設定した目的を達成するために、敵の一人、さらには悪魔自身と協力するという奇妙な習慣がありました。彼らはまた、敵対者間の同盟が遅かれ早かれメンバーの少なくとも一人に敵対することを忘れるという不幸な習慣も持っていました。一方で、ほたるはズリの行動を予測するのに十分なデータを持っていませんでした。それは深刻な障害でした。

ズリ人は火災の原因について彼に質問した。しかし、アンドロイドたちは嘘をつくことができなかつたので、返答する前にアンドロイド同士で話し合いました。ほたるはバックグラウンドに残りますが、ひのこに言うべき文章を伝えます。彼は何のイニシアチブも取ろうとはしませんでした。

ひのこはズリ族に、人間は敵意や悪意よりも恐怖に関連して、いくぶん不釣り合いな反応を示す可能性がある」と説明した。一方、驚くことのない人間の救助隊員2人に、ほたるは過酷な真実を告げる。二組の夫婦の間には信頼関係がしっかりと築かれていました。それで、彼らは一緒に地球人とズリの反応を推測しようとしたのですが、今のところ平和的な解決策は見つかりませんでした。

ズリの地球人に対する不信感は増大し続けた。今回、中継アンテナとして機能する気球の近くにすでに浮かんでいたすべての気球の中で、新しい気球の存在を最初に発見したのは彼らでした。2人の救助者はこれを見ていませんでした。そして、正当な理由から、それを見えなくする封筒が装備されていました。り、包まれた物体を「透明」にすることが可能になりました。この技術により、隠したいオブジェクトを「透明」にすることが可能になりました。しかし、他の「透明性」と同様に、それは必ずしもすべての電磁波に対して透明であるわけではありません。それは、光やレーダー波など、地球人が「見る」ために使用する波を「偏向」するためにのみ行われていました...

—あちらで、アヒフは二人の地球人に言いました、私たちの探知機が未確認飛行物体の存在を知らせています。見えますか？

「空飛ぶ円盤」マケドニオはズリが選んだ表現をほのめかしながら不思議に思った。

—いいえ、何も見えません。

—あなたはどうか、とカルメンはアンドロイドたちに尋ねました。

—私たちも何も見えません。

—ところで、ミニサイクロンを引き起こすことができるあなたの有名なシリンダーは蒸気のジェットを生成できるでしょうか、とひのこは尋ねました。

—中央マストならそうなるかもしれない。何のために？ サブラは答えた。

—なぜなら、何かが隠されている場合、そこに蒸気を投影することでそれが見えるからです。蒸気に「穴」が空き、水滴が目に見えないものに付着しているのが見えます。

すぐに、サブラはシャトルの1つに乗り込み、マスト上の大きな指向性シリンダーの1つをプログラムして、目に見えない物体に向かって巨大なスプレーを噴射しました。すぐに誰もがスパイ飛行船のシルエットを目にしましたが、それ自体はそれが発見されたことを知りませんでした。なぜ隠すのですか？ズリ避難所の上空に浮かんだ他の気球とどう違うのですか？

ひのこは手がかりを探すために、利用可能なすべてのアンドロイドに助けを求めました。それがまだ一般人に知られていない秘密兵器であることは間違いありませんで

した。「テスト」ターゲット、この場合はズリ人に対して初めて使用できる武器。

研究者の友人であるウボクに微妙に質問することで、このアンドロイドは、ズリがシャトルに閉じ込められていれば、地球人からのさまざまな種類の攻撃をほとんど恐れることはないと確信した。しかし、私たちは彼らに避難所に閉じ込められたままであるように要求することはできませんでした。彼らは外に出て、自分たちで食事をしなければなりません...そして逃げてても無駄だった。彼らは簡単に発見され、そこで自分たちが無防備であることに気づくでしょう。

もしそれが未知の、よく保管されていた秘密兵器だったとしたら、それはアサイラムを破壊するには範囲が限られた爆発タイプの兵器しかありえません。実際、行動半径が不定で移動する他の兵器は、地球を奈落の端に追いやったため、なおさら禁止された。すでに化学兵器、核兵器、細菌兵器は「共通」協定によって禁止されていたが、最後の兵器である環境兵器は本当に大惨事となった。幸いなことに、アンドロイドによって作成されブロードキャストされたシミュレーションにより、一方が同意なしに他方から分離しようとした2つの小さな領域間の「実験」が中止されました。夫婦の間で離婚が一般的になっていたとしても、「州」内ではまだそうなっていません。

新しい爆発兵器のイノベーションとは何でしょうか。断片化技術は、恐怖を与え、パニック運動を引き起こすためにさらに使用されました。それは、割り当てられた空間から離れるのを見てはいけな地球外生命体に対しては役に立ちませんでした。可能な唯一の手法は、犠牲者

を大いに落胆させるためによく使われた古い手法でした。焼夷弾。そして、純粋な核融合爆弾は、古代のリン爆弾やナパーム弾よりもはるかに進歩していました。

もちろん、最も反抗的な人々をなだめる催眠爆弾、人々を狂わせる音響爆弾、中毒妄想を引き起こす麻薬爆弾など、他の兵器もありましたが、それらが地球外生命体に効果があるという証拠はありませんでした。エリア全体を凍らせるありふれた極低温爆弾でさえ、アサイラムの保護囲いがエリア内部を即座に暖めれば、効果がなくなる可能性があります。人間の天才は破壊と殺害に限界を知りませんでした。ほたとひのこは知っていました。

迫り来る闇の中で、2人のアンドロイドの名前は深い意味を帯びた。「ほたる」は、暗闇で道に迷った旅人を導く「蛍」でした。「ひのこ」は灯台に灯る「火花」であり、その光は夜を突き抜け、夜明けへの道を拓くものでした。2人のアンドロイドは、2人の人間の救助仲間と2人のズリの友人とともに、大惨事を回避できなければなりません。彼らはアヒフとウポクにも、ズリ避難所に重くのしかかっている脅威を知らせることに決めました。しかし、後者の2人は、パニックを引き起こさないように沈黙を保つ方法も知っておく必要がありました。

—私が特定の動作のためにシリンダーをプログラムする方法を知っていることがわかりました。必要なものを教えてください。そうします。でも、土壇場をお願いしないでください、とアンドロイドの友人である研究員ズリさんは打ち明けた。

—でも、他に誰がシリンダーを使えるのか。とマケドニオ氏は尋ねた。

—誰もが使い方を知っていますね。使用とプログラミングを混同しないでください。私たち全員でキャンプを守らなければなりません。ただし、私が従うべき手順を示すまで、誰もそれをアクティブ化することはできませんので、ご安心ください。

—これらの飛行機械には生命は存在しないため、人的損失の危険はない、とほたる氏は明らかにした。搭載されている人工知能ですら自律的ではありません。

—この装置は破壊すべきだと思いますか？カルメンは尋ねた。

—特にそうではありません！ひのこはアンドロイドにしては珍しい反応で叫んだ。報復もあるだろう。この偵察気球の探知機を欺く何かを見つけなければなりません。なぜなら、彼らのセンサーを抑制しても良い解決策ではないからです。さらに、周囲の他の飛行船がそれを検出し続けるようにする必要もあります。なぜなら、それが私たちの目に見えないとしても、電磁スペクトルの他の部分では確実に見えるはずです。実際、その所有者は引き続きリモートで制御できなければなりません。

—はい、でも気をつけてください！我々は以前にも屋気楼効果を使ったことがあるし、彼らもこの策略を知っているはずだ」ウボクと言いました。

—もし彼が存在しなかったことにしてみたらどうなるでしょうか？アヒフは恥ずかしそうに尋ねた。

—それでも、私たちは自分たちを守るための盾、永久的な盾を設置しなければなりません、なぜなら私たちには反応する時間がないからです、とウボクは答えた。そし

てこの場合、完全に目に見えないシールド...簡単ではありません...

「いずれにせよ、果物狩りをする人たちは、盾から離れないように何らかの方法で教えられる必要があるでしょう」とカルメン氏は付け加えた。

—そして円筒を充電するにはどうすればよいでしょうか？ ほたるは尋ねた。彼らの助けがなければ、私たちも充電されません。私たちは現在、解決策を求めてあらゆる場所を探し、多大なエネルギーを費やしています。

—考えがある、とひのこは結論づけた。既存のシールドを上げていきます。メインマストの上で中継してくれる飛行船のレベルまでは効果がありそうです。可能ですか、ウポク？

後者はうなずき、アンドロイドを後ろに引きずりながら最初のシャトルに向かって歩きました。各シャトルにはコックピットがあり、シリンダーをプログラムするのに適したインターフェイスが装備されていましたが、習慣からウポクは「自分の」シャトルに乗ることを好みました。ワークステーションにより、制御コンソールの周囲に3人のエイリアンが存在することが許可されました、明らかにコウモリのように天井のバーにしがみついています。周りには誰もいなかったのも、ひのこは簡単にスクリーンとホログラムを観察することができました。

アンドロイドはズリ語の読み方を知りませんでしたが、彼の目の前にある三次元画像が彼らがいる避難場所を示しました。すると、ほんのり紫がかかった卵形が辺りを包み込んだ。マストだけでなく、木々もこの保護から現れました。ウポクはズリが使用するエリア全体をドームが覆うように調整しました。

「もっと高く登って通信飛行船を守ることはできないだろうか？」ひのこは尋ねた。私たちにとって、皆さんを私たちのサポートしてくれる雇用主や、地球人の不快感の進化について常に知らせてくれるアンドロイドのコミュニティと連絡を取り合うことが不可欠です。

—繊細というか、難しいですね...やってみます。

ホログラムの卵がゆっくりと上に伸びていった。しかし、上部がマストの上部に固定されたままだったので、変形していました。この通信飛行船は少しずつ守られてきました。彼はまるで頂上の窪みに隠れたケーキの上のチェリーのようなだった。偶然だったのか？スパイマシンは何か変化、異常を発見したのだろうか？いずれにせよ、彼は密かに通信中継気球に近づいたのだ。そして彼はズリ避難所の防護壁をかすめた。あっという間に、敵の飛行船は光のシャワーの中に消えていった。そして、避難所には沈黙が落ちた、重い沈黙が。

第八章 ゲリラ

各州内でのズリの存在に関しては意見の相違が多すぎて、各州のレベルで国家的行動を決定することはできなかった。しかし、独自の軍団を持った強力で自律的な富裕層が十分に存在しました。これらの軍隊は、共通の軍事目標を中心に集まったすべての団体を支援するために利用できました。寛大な「後援者」がいわゆる「正義の」戦争の大義を共有した場合には、無料になることもありました。これらの組織はかさばる武器を必要としませんでした。彼らはしばしば影の戦争に特化しており、その戦闘員はしばしば「見えな忍者ゲリラ」と呼ばれていました。目に見えない偵察気球は彼らの武器の一部でした。

これらのゲリラの専門家は、時には武術さえ使用しませんでした。彼らは、グループのリーダーをターゲットにして不安定化または破壊する場合、流血を伴わずに犠牲者を排除するために数多くのテクニックを使用することができます。これは、精神操作からさまざまな中毒性の高い薬物中毒を含む衰弱性疾患の注射に至るまで多岐にわたる可能性があります。

ひのこは、アサイラムの防御を表すホログラムが卵のように見えたことを思い出しました、完全に卵のようでした。実際、ズリ避難所全体がその中にあったため、論理的には、基地は地面の中で密閉して閉じる必要がありました。彼はウポクに確認を求めたが、ウクは確かに防御面が完全に囲まれた表面であり、その下を通過していると告げた。これは、あらゆる意味で地下活動を行う忍者たちを警戒していたアンドロイドを安心させました。これらの影の兵士たちがトンネルを掘ったり、ベニ川に潜ったりしようとした場合、発見され、撃退される可能性があります。

ほたるが懸念していたもう一つの疑問は、地球人の攻撃性であったが、それにもかかわらず、攻撃的に応じるべきではなかった。アンドロイドたちは生命が破壊されたり、不可逆的に変化したりすることを望んでいませんでした。彼女はそれを確かめたくて、防衛計画を担当していたウポクに助言するために、キオボと二人の地球救助隊員に協力を求めた。理論的には、バリアは強力かつ不快な忌避効果しかありません。

遠くで、軍の空挺部隊を乗せた小型ドローン 1 機がキャンプに近づいていた。それは身を隠すことはなく、地球人が力場と表現したものの接触を避けるために非常に高く飛びました。アンドロイドたちは、軽装ながら効果的な装備を備えた空挺部隊約 50 名を降下できるモデルであることをすぐに認識しました。

ズリが泡から逃れられないことを知って、部隊の兵士たちは隠れることなく飛び降り、白昼堂々と行動した。そうすれば、彼らはより早く準備を始めることができます。地上では、彼らは3つのグループを形成し、攻撃の開始位置を確保するために分離しました。

ダイビング用に特別な装備を整えた最初のグループはベニ川に向かいました。そこで男性たちは、広げてすぐに使用できる装備を保管するためにバージを膨らませました。それから彼らは川からキャンプに向かって延びる沼の入り口に向かい、その地域に脅威が潜んでいないことを確認した後、そこにキャンプを張りました。

他の2つのグループは、3つのユニットが上空だけでなく地表全体からも避難所を観察できるような位置に配置されました。ダイバーはすでに地下室を監視しなければならなかった。他の2つのグループについては、1つはアサイラムのマストの高さの枝にキャンプを設置しましたが、もう1つは最も扱いにくい装備を備えて地上に残りました。

他の2つのグループは、3つのユニットが上空だけでなく地表全体からもズリ避難所を観察できるような位置に配置されました。ダイバーはすでに地下室を監視しなければならなかった。他の2つのグループについては、1つはアサイラムのマストの高さの枝にキャンプを設置しましたが、もう1つは最も扱いにくい装備を備えて地上に残りました。他の2つのグループについては、1つは通信と監視のマストの高さにある支部にキャンプを張り、もう1つは最も扱いにくい装備を持って地上に残りました。

後者グループが先に攻撃することになった。しかし、この攻撃はここ数世紀に経験したのものとは異なっていたため、キャンプの救助隊員2人を驚かせた。実に、彼らは避難所に向かって矢を投げていました。もちろん、それは弓ではなく、ある種の銛銃を使ったものでした。

ひのこは彼らの戦術を理解しました。これらのグループは保護ゾリの弱点を探していました。そしてこのために、彼らは利用可能なすべての武器を使用するつもりでしたが、おそらくそれほど脅威とは考えられていない最も時代遅れのものから始めました。実に、完璧に防御できる鎧はありません。したがって、特に警戒する必要がありました。

一方、ほたるは、雇用主と彼を支援するすべてのアンドロイドに、ゾリ避難所の周囲で起こっているすべてのことをリアルタイムで伝えた。彼の仲間のひのこが彼に与えた情報は誰も安心させませんでした。そして誰も時間内に介入する方法を知りませんでした。実に、長い間、国家はもはや直接対決することはなく、多くの場合は軍隊を持たなくなりました。そして、終わりのない服従や裏切りによってすべての信頼が損なわれてしまったので、もはや同盟関係はありませんでした。

長い間、地球上に君臨していた一般的な哲学は、「あなたが私をあなたの意志に従わせたくない限り、人は皆、自分のために行動する。」というものでした。だったら、たとえ一緒に死んでも、私は抵抗します。」これは、今回、地球全人民憲章に組み込まれたことを除けば、それ自体は新しいことではありませんでした。また、新しかったのは、攻撃と反撃の手段が非常に発達し、人工知能だけがそれらを制御できるようになったことです。あらゆる軍事行動は危険なほど予測不可能であり、常人には手に負えなくなり、ほとんどの場合、より正確で急速なテクノロジーに圧倒されてしまいました。

彼らにとって幸いなことに、改善された合成認知、つまり CSA は、穏やかな共同生活の中で常に平和のために役立つ準備ができている調停者であるアンドロイドを生み

出すことができました。人間は引きこもっていたため、これらのアンドロイドは時には人間にとって唯一の友人でさえありました。大国の中で残ったのは、しばしば疑問視される共通のサービスを共有することが困難だった古代諸国に住む氏族や部族だけだった。巨大都市ですら、相互に不信感を抱いていること以外には、時には共通点を持たない「近所」が並置されたものに過ぎなくなっていた。

CSA がなければ、人類は進化を続けることはできなかったでしょう。

そのおかげで、長距離輸送は徐々に空輸のみになり低公害になるなど、重要な機能が機能し続けました。エネルギーの開発とその分かち合いについても同様であり、それがなければ人類は退行することさえできたでしょう。そして、このすべてにおいて、アンドロイドは、商業や支配の感覚をまったく持たずに、人間の共有可能なリソースを管理していました。それにもかかわらず、人間は依然として、例えば兵器を製造する能力を持っていた。これらの現代兵器は、すべてにもかかわらず、火炎瓶よりも洗練されていましたが、幸いなことに、遠い過去の核兵器よりもはるかに重要ではありませんでした。

これらの手製兵器は開発が極秘だったため、ほとるとひのこを心配させた。地球上のすべてのネットワークを構成するウェブのいたるところにアンドロイドが目と耳を持っていることを人類は知っていたため、制作技術は口頭でのみ伝えられていました。これらのヒューマノイドの存在は、特に知識、ひいてはデジタルの自由な共有を主張していたため、コ

ンピューティング、商業、その他多くの分野の巨人の座を奪うほど効果的かつ遍在していました。

貨物を運ぶ飛行船の小隊がズリ避難所に向かっているのを発見したとき、アンドロイドたちの懸念は増大した。もしその旅が彼らに容易に察知できれば、たとえその重さや体積がわかっていたとしても、積荷の中身は秘密である。兵器であることは間違いないが、どれだろう？

襲撃の可能性は低い。戦闘員の数は少なすぎました。しかしこの場合、ズリ避難所周辺で行われていた任務の目的は何だったのでしょうか？包囲、封鎖？ズリ族は救助が到着するまで自給自足で生活できる場所に割り当てられているのに、なぜ戦士たちはこの閉鎖された避難所を攻撃するのでしょうか。

ゲリラの小規模でほぼ無害な攻撃を説明する最初の可能性は、避難所に入る通路を見つけることかもしれないが、よく考えてみると、地球外病原体が蔓延する恐れが大きすぎたので、目的は別のものでなければならなかった。ひのこ氏とポウク氏は、これらは防護フィールドの正確な形状を測定するための操作にすぎず、安全な接近距離を決定するために使用されるべきであることに同意した。

突然、使用されるテクニックが変わりました。当初、これらは保護シリンダーズリに向けて発射されるある種のロケット弾でした。爆発はチューブのできるだけ近くで爆発するはずだったが、はるか前方でジャンプし、一種の半透明のパッドが爆発のエネルギーを吸収した。この種の兵器に対しては防護壁が有効であった。

攻撃の威力が突然増大したため、それが段階的であったため、その後の攻撃がますます暴力的になるのではない

かと思われる可能性があります。実際、レーザー、レーザー、レーザー、ガスレーザー、その他のフェイザーがテストされました。この反射壁に到達する前に、波のエネルギーはすべて円柱によって吸収されます。したがって、バッテリーを再充電するのはこれらの波であるため、この防御システムを使い果たすことは一見不可能でした。

戦士達もそれに気づいたのだろう、三か所の攻撃ゾーンを放棄して森の奥へ向かったのである。ほたる、ひのこ、地球夫婦とその二人の仲間ズリは、つい最近増援アンドロイドが送った観測気球が周囲数キロメートルにわたって監視していたので、あまりにも早く大喜びした。そして、彼らが見たものは彼らを安心させませんでした。

これらの冒険的な兵士たちは戦いを諦めていませんでしたが、以前に発見された貨物気球によって機器が積み込まれた場所へ向かいました。「忍者」に関して言えば、彼らの使命は、難民や地球外生命体に対するいかなる攻撃にも反対する軍事グループとズリおよび他の組織の両方からの攻撃から彼らを守ることでした。

これらの冒険的な兵士たちは戦いを諦めていませんでしたが、以前に発見された貨物気球によって装備が置かれた場所に向かっていたのです。それは、太陽エネルギーで動作するいくつかの重い装置を備えた奇妙な管の集合でした。同時に、軍事技術者の一団がこの装備に同行し、記録的な速さで組み立てられました。「忍者」に関して言えば、彼らの使命は、たとえ地球外生命体であっても、難民に対する攻撃に反対するズリとその他の軍事組織の両方からの攻撃から彼らを守ることでした。

この珍しいアセンブリの足元に取り付けられた最初のモーターが動作し始めたとき、説明は見つかりませんで

した。その音にズリは驚いたが、地球人間はそれを認識した。すぐに、ひのこの疑惑は確認されました。それは冷凍庫が発する音だった。そしてそれはズリ防御バリアが防御できなかった唯一の武器だった。

突然、上空で、避難所を取り囲むゲリラに奉仕する貨物気球の1つが迂回して高高度に上昇し、ミニ特攻ドローンを放ちました。ひのこがそれに気づいた時には手遅れで、ズリと世界、アンドロイド同士を繋ぐ通信中継気球でドローンが爆発したのだ。包囲された人々を孤立させるためにすべての接続を遮断することにより、包囲は別の次元に変化しました。

しかし、ほたるとひのこは落胆も怒りも知りませんでした。彼らはすぐに、今度は脅威を無視できなくなったズリ全員の前で報告を行った。

ほたるさんが説明してくれた。

—友よたち、まず最初に、すべての地球人は私たちに害を及ぼすことを望んでいるような人たちではないという事実を明確にして強調したいと思います。しかし、私たちは生き残るために迅速かつ賢明に反応しなければなりません。まず第一に、シャトルの中に避難する必要があります。シャトルは真空の宇宙で動作するように設計された機械であるため、私たちが襲う寒さから身を守ることになるからです。船外活動用具を付けたままにしておいてください。シャトルから降りる必要がある場合は、船外活動用の装備を着用してください。そして、食料はできるだけ備蓄しておきましょう。

—あなたたちを見捨てたいとは思わないでください、ひのこは続けましたが、私たちのエネルギーが充電されなくなったら私たちはもうあなたを助けることができない

ので。それで、私たちは外に出なければなりません、また戻ってきます、約束します。そして、状況が解決してあなたの助けが届くまでの間、私たちは耐えられる装備を持って戻ってきます。

アヒフは順番に言った。

—また、親愛なる友人の皆さん、ほたるとひのこの新しい使命を手伝ってください。すでに、私たちの学者であるウポクと私たちの軍事指導者であるサブラが彼らのためにいくつかの計画を準備しています。

—最後にもう一つ、ほたるは続けます。私たちは見た目を変えていきます。地球外の友人、私たちを恐れなくてください。そして、あなたたち地球の応急処置者でも、彼女はウインクしながら付け加えた。私たちは人間の皮膚を脱ぎ捨て、機械のように見えるようになるでしょう。確かに、人工皮膚がなければ、私たちは発見されにくくなります。

二人のアンドロイドは恥ずかしがることもなく、仲間の前で服を脱いだ。医療従事者の前では恥じらいど必要なかったし。ズリに関して言えば、彼ら自身は全裸を見せることに何の恥じらいもなかった。しかし、最も壮観だったのは、2人のアンドロイドが皮膚から自分自身を取り出すときでした。確かに、彼らはまず顔を目出し帽のように後方にスライドさせて頭蓋骨を取り除くことから始めました。この「目出し帽」の開口部として機能したのは、非常に弾力のある口でした。その後、彼らがしなければならなかったのは、非常に伸縮性のあるジャンプスーツのように人工皮膚を下にスライドさせることだけでした。そして、これは常に口を通過します！

アンドロイドの皮膚は単なるプラスチックの被覆ではありませんでした。真皮だけでなく、血管や筋肉など目に見える部分、特に表情を変える部分もシミュレーションしなければならぬセットでした。これらの「筋肉」は、2つの気密層の間の小さなポンプによって活性化されました。1つはロボットのフレームに接触しており、「脳」に接続されたセンサーに取り付けられていました。もう1つのレイヤーは、人間の皮膚の質感とボリュームを表現しました。このシステムは実際には、極寒の地や過酷な地形での冒険を想定して設計されたものではありません。さらに、2人のアンドロイドは、古い皮膚を剥がした後は再利用できないことを知っていました。実際、接続の設定は繊細で、皮膚を剥がすときに損傷してしまいました。したがって、新しいものを注文することが不可欠でした。

マケドニオがカルメンにささやきましたが。

—ズリ人がどう思っているかは知りませんが、私たちのアンドロイドで最も恐ろしいと思うのは、あまりにも恐ろしく非人間的な顔の中に非常に人間的に見えるその歯と目です。

状況が悲劇的になればなるほど、マケドニオとカルメンは笑いどころを見つけました。不思議なことに、ズリ避難所では地球人だけがユーモアを使っていました。アンドロイドは雰囲気明るくし、ストレスを抱えた人間に自信を与えるためにユーモアを控えめに使っただけだった。ズリ人にはユーモアが全く実践されていないように見えた。

ほたとひのこが職人ズリによって木の葉で作られた迷彩服を着たときも同様でした。この2人のヒューマノイ

ドは、神話上の英雄のように見えますが、エネルギー危機以前の生態学的伝説に登場する妖精やエルフのようにも見えました。二人の地球人にとって、それは状況を楽しみ、事態を軽視し、恐怖を追い払うもう一つの機会でした。

しかし、ヒノコとウポクはこの茶番劇に安心することはできなかつた。確かに、恒温動物よりもすでに冷えている彼らの体から発せられるわずかな熱を隠すことはできますが、完全に隠すわけではありません。非有機物質の存在に関しては、検出可能なままであるため、アマゾンの動物相の一員であるかのように偽る必要はありません。ズリの保護から抜け出すのは難しくなかつたが、凍った足場の向こう側を気づかれずに進むのは別の問題だった。言うまでもなく、アンドロイドは人間を模倣するという考えで作られており、ジャガーのような敏捷性を備えていませんでした。

ネコ科動物の柔軟性とは対照的に、ロボットは疲れを知らない剛性を持っていました。彼らは、生身の人間が数分間維持するのは非常に困難な位置を何時間も維持することができました。だからこそ、ほたるとひのこは、小さな動きをするたびに気づかれないように、茂みや低木に変装することにしました。これらの小さな動きは、非常にゆっくりと這うことによって行われます。各ステージの継続時間は、固定または移動にかかわらず、ランダムであるため、その動きは目に見えず解釈できません。

気づかれない可能性を高めるために、ほたるはベニ川に沿って上流に向けて出発しました。ひのこ、彼は森の奥へ入っていった。二アンドロイドはルレナバケに戻る途中で会うことに同意した。

ほたるはアンドロイドにとって最も困難な道を選んだ。なぜなら、他のアンドロイドと同じように彼女も湿気が嫌いで、水の中を歩くのがさらに嫌いだったからです。幸いなことに、彼女は岸辺に近づく必要はありませんでした。岸辺沿いの鬱蒼とした植物の方が、周囲に溶け込むのに便利だったからです。さらに、そこに生息する動物たちは、アンドロイドの動きがこの場所の自然の通常の攪拌の結果であると見なせるような方法で、葉や枝を頻繁に攪拌していました。もし彼女がこの道を選んだとしたら、それは相棒のひのこが最も危険な道を選んだからでもある。確かに、彼女の仲間の訓練により、彼は複雑な技術的問題を解決する能力が彼女よりも高くなりました。

ひのこも森林活動の恩恵を受けました。いずれにせよ、彼は常に最も厚い場所を選んで隠れ、みぞれと氷の鍾乳石の壁の前に最初に到着しました。たとえ寒さがアンドロイドにとってほとんど気にならなかったとしても、避難所を囲むこの巨大な冷凍機の通路を見つけるのは簡単ではなかったはずです。しかし、彼はいくつかの詳細に驚きました。

まず、寒いのは囲いだけで、周囲の地形にはあまり影響がないようだ。彼は、そのような構造がどのようにしてズリ避難所のような印象的な容積を冷却できるのかを理解していなかったので、分析後、これにはそれほど驚きませんでした。特に後者は空に向かって開いていたので。しかし、通路を探しているときに、この構造が要塞の包囲を確実にする壁として考えていたほど頑丈ではないことに気づきました。これはズリ族にとってスペースシャトル内に閉じ込められる必要がないことを彼に安心させ

た。しかし、その背後にある論理について彼は興味をそそられました。

同時に、ほたるは静かに前に進んだ。彼女は、避難所を包囲するための建設物の足元に絡み合った根とねじれて乾いた幹の山のおかげで通路を見つけた。この場所では冷凍設備の設置が不十分で、まるで作業員が完成を急いでいるかのようだった。さらに、彼女は仕事が随所で不十分に行われたと考えた。アンドロイドなら、任された仕事を失敗するはずがない。最悪の場合、彼女は自分の無能を認め、自分よりも有能な人に自分の席を譲ってくれるよう頼んでいただろう。足場や断熱壁が地面にすら触れていないところもあった。この管理の行き届いていない場所は責任者の監視を逃れていたに違いないので、この刑務所から抜け出す絶好の機会でした。

彼女は、重量挙げ選手を含む人間をはるかに上回る力を使って、非常に繊細に丸太を動かしました。たとえそれが木を壊すことを意味するとしても、彼女は傭兵密猟者の足場に触れることなく滑り込める十分な大きさのトンネルを徐々に構築しました。しかし、彼女はその存在を感知されてはならないため、警戒を緩めることができなかった。そして最後に、まだ植物で覆われた彼女の頭が穴から出てきたとき、彼女は移動するまでしばらく動かずにいました。彼女は囲いの向こう側で何が自分を待っているかを知らず、すべてに備えたいと思っていました。

ひのこさんは、足場を動かすための格納式の車輪が数力所に設置されているのを観察したため、氷壁は可動式であるに違いないと判断した。森の真ん中では役に立たないと考え、この装備は全く不向きだと考えた。彼は静かに、ペンチのようにボルトをつかんで緩めることができる金属製の指で、数枚のプレートを解体するのに時間を

費やしました。こうして彼は通路を開いて、向こう側で何が待っているかを発見することができました。

第九章 緑戦争

2人のアンドロイドはルレナバケへ直接向かうのではなく、途中の小さな観光旅館に立ち寄った。そこで彼らを出迎えたのは、人間の邪魔をしないように数日間居住空間全体を借りていた他のアンドロイドたちだった。確かに、中に入ると、彼らはほたとひのこが新しい皮を被るのを手伝いました。彼らはロボットの形で人間の前に現れることができず、彼らの以前の姿はズリのハンターによって記録されなければならなかったもので、これは不可欠でした。

デフォルトでは、アンドロイドの大多数は、それらが作成された場所、およびほとんどが生まれた場所で日本人に似ていました。ほたるやひのこもそうでした。敵の諜報員にすぐに発見されるのを防ぐために、彼らはよりポリビア人の肌を身に着け、はるかに年上の人を着ることが提案されました。ロボットの厳格な測定値を変更したり、専門の実験室の外で目の色や顎の形状を変更したりすることは不可能でした。簡単に変更できるのは顔の形

だけで、主に頬と鼻、そして肌の色調この場合はより日焼けしていますだけです。

それにも関わらず、ほたとひのこは、ズリ人から容易に認識されるようにその名前を保っていた。いずれにせよ、沖縄からの多くの日本人移住者がこれらアマゾンの土地に住んでおり、少しずつファーストネーム、さらには象徴的な単語さえも出生時に与えられる名前のリストを充実させてきました。しかし、アンドロイドには名前が1つしかなかったので、尋ねられた場合に備えて苗字を発明することにしました。その結果、「ほたと」「ひのこ」が正式な名前となりました。このように改造された彼らは、冒険を再開する準備が整い、ズリ族を助け、特定の人間の狂気から彼らを守るという、彼らに託された使命を果たすことから始めました。

通信中継気球はズリ人を攻撃する「見えな忍者ゲリラ」の標的となりやすいため、新しいシステムを導入する必要があった。ひのこは、衛星アンテナと進入レーダーの両方を備えたキャンプマストを延長することを提案しました。最初の追加によりズリ避難所と世界の他の地域との間の通信が確保され、2番目の追加により近くの空域の制御が可能になります。これらは、一般にアンドロイドが人間に奉仕するために管理する2つの技術でした。

さらに、しなければならない3番目の非常に重要なことがありました。ひのこが懸念していたように、ズリ避難所の空間がエネルギーを吸収する隔離ケージで囲まれている場合、避難所にエネルギーを再充電する必要があります。そのためには、アンドロイド自体を忘れずに、各シャトルとその研究室に電力を供給するためのセンサーとエネルギー送信機のメッシュを作成する必要があります。そして最後に、光と太陽熱が敵によって遮ら

れる場合には、避難所の森林エリア全体に追加の照明を提供する必要さえありました。特にズリ族は木からもぎたての果物しか食べないので。

このような機器を入手してズリ避難所に送るのは簡単ではありませんでした。幸いなことに、このカテゴリのオブジェクトはアンドロイドによって管理されており、必要に応じて迅速に介入できるように常にメンテナンス在庫を備えていたため、入手はそれほど難しくありませんでした。一方で、危険な地域に配送する必要があるため、輸送はさらに複雑でした。最良の解決策は、敵に反応する時間を与えないように、キャンプズリのメインマストの真上に装備を投下することでした。この目的のために、貨物機は一種の熱気球を運ぶことになるが、これは実際には丸い飛行可能なパラシュートであり、目標の近くでほぼ瞬時に膨張して、地面に触れることなく近くを浮遊することができる。ほたとひのこは、このクレーン気球のバスケット、荷物を積む特別な気球に乗り込むことを申し出た。これにより、彼らはより早くキャンプに戻ることができました。こうしてひのこも新しい設備の設置に参加することができました。

ゲリラに気づかれないように、アンドロイドたちは飛行機の隊列を作り、投下予定地点の上空を飛行して監視を妨害することにした。

彼らは情報がフィルタリングされることを知っていたため、この繰り返しの飛行計画を正当化する、よく選ばれた2つの都市間の最適な軌道を計算しました。したがって、ルレナバケ空港は、ブラジルのリオ・ブランコから保守在庫を供給するために保守機器を輸送する必要がありました。これは、どんな状況でも嘘をつくことができないアンドロイドが見つけた唯一のトリックでした。そ

して、これらの株式を独自に管理したのは彼らであるため、緊急性や黒字の理由に疑問を抱く人は誰もいません。

ズリ避難所上空を通過中に、航空機の1機がキャンプの真上にドローンを投下した。ほたるやひのこを乗せたものと形状は同じだが、落下の軌道を実験するために直径20センチほどしかなかった。しかし、この小さなボールには第二の役割があり、地面に落ち、木の枝の間で何度も跳ね返りました。驚いたズリ人と二人の地球人はその物体に近づいた。マセドニオさんは、それがスポーツボールに似ていることに気づき、驚きました。彼がそれに近づいてよく観察すると、突然、声が聞こえてきました。

— こんにちは、ズリ友達、カルメン、マセドニオ、これはひのこやほたる、からのメッセージです。これは、私たちが空路でマスト近くまで戻ることを警告するためです。今夜は保護を無効にします。心配しないでください、私たちは少し変わりましたが、それでも私たちです。

案の定、夕方になると、空飛ぶ円盤のような物体が空から急速に降下し、マストの頂上付近で降下速度を緩めました。サブラ、イコモ、さらにはひのこの忠実な仲間であるウポクなどのズリが近くの枝にぶら下がって待っていました。彼らは、それが忍者の密猟者によって仕掛けられた罠ではないことを確認することと、2人のアンドロイドを助けたいと考えていました。ズリ族のおかげで新しいアンテナとレーダーをより早く取り付けることができました。未明、すべての準備が整い、最初からほたるとひのこに同行していた二チームがリーダーのモヒハのシャトルで戻ってきた。

気温が15度ほど下がったため、ズリ全員はシャトルの中に避難することを余儀なくされた。そして、気温はまだ20度前後であったにもかかわらず、このアマゾンの特に湿気の多い大気の中では、寒さの感覚はさらに強くなりました。

カルメンとマケドニオもまた、「シンセ」と名付けた2人のアンドロイドの友人を待っていました。彼らは抱擁を交わし、温かい背中をたたいて彼らを迎えました。ほたるちゃんとひのこちゃんのアンデスらしい姿を見て、アースカップルは思わず爆笑してしまいました。

しかし、この短い温かい歓迎の後、ほたるとひのこを中心に編成されたチームは緊急事態に迅速に対処しなければなりません。同じシャトルに集まることで、彼らは状況を把握し、新しい戦略を実行することができました。そして最初のことは誰もが驚いたことです：保護シリンダー機能が即時に停止されました。そして、そこから出てきた最初のアイデアは、誰もが大いに驚いたものでした。それは、すべての保護シリンダーの機能を即時に停止するというものでした。

ひのこさんはこの選択の理由を詳しく説明したいと思いました。ほたるは事前に、アンドロイドの脳がどのように機能するかを宇宙人に説明する必要があると考えていた。彼女は、「シンセ」の脳は実際には2つの脳であると説明しました。地元の脳は、「シンセ」があらゆる状況において取らなければならないなかった平和主義的な態度に行動的に適していました。それはそれぞれの状況に適応したプロトコルの山であり、地球上にはたくさんありました。ウェブは彼らの第2の脳でしたが、情報が溢れすぎていたため、専門化してチームとして作業する必要

がありました。このチームワークがなければ、彼らが効果的に支援することはほとんど不可能でした。

ほたるは、ひのこがズリ避難所から出ている間にこの機会を利用してアンドロイドの同僚からできるだけ多くの情報を入手したのはこのためだと説明した。こうして彼は、避難所を取り囲む「刑務所」がズリ防御壁から発せられるエネルギーを吸収して、複雑な冷凍機構を動かしていることを知った。避難所の保護をやめれば、刑務所は大量のエネルギー源を失い、その結果、エイリアン、人間、アンドロイドの住人にとっての危険は少なくなるでしょう。同時に、面白いことに、この刑務所自体が避難所の盾として機能し、敵はこれを予想していませんでした。明らかに、現在とは異なる方法で領土を監視する必要がありますが、地球人は何世紀にもわたって安価なエネルギーシステムを開発してきました。たとえば、保護された場所を横切るときに誤って触れたり踏みつけたりするワイヤーによって鐘が揺れるなどです。レーダーに関しては、航空交通管制アンドロイドによって遠隔制御され、調整可能なセキュリティ境界内にある飛行物体を、たとえステルスであっても検出できるように設計されていました。

忍者ゲリラが、ほたるやひのこが反対方向に行ったのと同じ方法で壁を越えようとしないようにするには、避難所のズリ見張りに警告する新しい方法を見つける必要がありました。しかし、地球外生命体は人間よりも特に発達した聴覚と優れた夜間視力を持っているという利点がありました。したがって、キャンプのメンバー全員が動員され、特定の音響特性を持つ植物を植え、脅威のたびに信号を発する昆虫を関連付けました。地球人は、これらの地球外生命体がこの技術をすぐに発見したのを見て

驚きました。おそらくキラークモとの悪い経験が彼らにもっと注意を払わせたのかもしれませんが。

周囲全体が開発され、アマゾンの寛大な自然がこの生物学的壁を繁栄させるのを待つ間、ウポクは亡命施設の保護シリンダーを部分的に再起動しなければなりませんでした。監視員に「聞いて」警告するだけだった。実際、キャンプ全体が監視に参加し、1日24時間見張りを続けたとしても、ズリの数は彼らの領土の境界線全体を掃討するには少なすぎた。

一方、ひのこは、マストの上部にアンテナとレーダーと同時に設置されたさまざまなセンサーのみを動力源として、キャンプのエネルギー消費を管理し続けました。ほたるさんは、地域社会にとって最も有益なものを抽出できるようにするために、動植物のコミュニケーションを発見することに興味を持っていました。二人の地球人は、地球環境による、あるいは地球外生命体との乱交によるズリのわずかな異常を検出するために微生物学的研究を続けた。

ひのこが仲間のアンドロイドと永続的な連絡を確立したおかげで、別の防御が確立されました。巨大なネットは、もともと熱と太陽光のセンサーディフューザーを設置することを目的としていたが、戦士たちが作った氷の牢獄の頂上からマストに向かって伸びて、ズリ避難所全体を覆った。このメッシュは、各ノードがミニドローン気球で占められており、罫の足場に沿って誰かがシェルターに入るのを防ぐためのものでした。敵は狡猾であるため、何らかの形で望ましくないオブジェクトを投影することを予測する必要もありました。このため、アンドロイドたちはズリ避難所全体を覆うことを余儀なくされ

ましたが、同時にそこでの森の生活を妨害したり窒息させたりしてはなりません。バランスが難しい

アンドロイドは、合成された存在であるという事実から、「シンセ」というあだ名を受け継いでいました。しかし、それは、彼らが調停者であり、平和を実現する者であるため、彼らが「親善」の生き物であることを私たちに思い出させるための言葉遊びでもありました。これらの人造平和主義者にとって、有機生命体をできるだけ変えず、人類にとって相乗効果の源となることが必要でした。この目的のために、アンドロイドは人間の感情を持って設計されていましたが、攻撃的な支配を生み出すことはできませんでした。状況が必要に応じて、これらのヒューマノイドは「平和維持者」の役割を果たすことができますが、常にわずかな武器も持たず、素手であっても物理的な力を一切使用しません。人間が、たとえ最も致死性の高い兵器であっても、人工知能を戦闘兵器に導入したことをどれほど誇りに思っているかを知ったとき、何という逆説でしょう。

一般に、アンドロイドは外交上の合意会議に参加することを好みました。しかし、1世紀以上にわたり、そうすることができる権限を与えられた組織が存在しないため、「シンセ」は常に介入し、交戦者の間に割って入り、交渉中に停戦を課すことを求められてきた。これらは多くの場合、平和的かつ双方にとって有利な結果を待つには長すぎました。したがって、最悪のシナリオを想定して、彼らは少なくとも公平な負け負けの結果を達成するためにあらゆることを行いました。このため、交戦者を撃退するために介入しなければならぬときに、これらのシンセはいわゆる軍服を着ていたことが起こりました。彼らは、人間の外見をしている皮膚と、虹の色に塗られた

フードをかぶった一種の潜水服を交換したため、虹の武士と呼ばれていました。彼らのフードには、目と笑顔を隠すために暗いマットなバイザーが付いていました。

これが、虹の武士がズリ避難所の近くに着陸した理由です。彼らは陸から氷壁に近づくことを防ぐための装備をすべて携えて到着した。彼らの存在は単なる象徴的なものではありませんでしたが、起きていることすべてを完全に公平な方法で観察し、それを地球上のウェブ全体にブロードキャストするという利点がありました。このような状況下では、こうした厄介な目撃者がターゲットになることは珍しいことではありませんでした。これは、あらゆる種類の攻撃から可能な限り身を守るためのユニフォームの主なモチーフでもありました。

彼らの制服には、目に見えて認識できることに加えて、人間には明かされていない次のような機能がありました。内部には小型爆弾が散乱しており、アンドロイドが捕らえられれば破壊される可能性がある。アンドロイドの平和的知性の完全性はいかなる方法でも変更したり逸脱したりすることができなかったからだ。この完全性を確保するためには、自己破壊が唯一の脱出方法であり、脳が命令を下すことができなくなった場合には自動的に実行されるものでした。

しかし、忍者ゲリラはアンドロイドと衝突する必要はなかった。彼らはこれらの「平和主義者」の限界を知っていました、そして鳥、ハーピー、ハゲワシが彼らの使命を達成するのを妨げるのは彼らの行く手に置かれる無害な障害物ではありませんでした。これらのワシは密猟者によって育てられ、ハヤブサのような戦士になり、ハゲワシは伝書鳩のようなものになりました。これらの動物はチームで行動することがよくありました。ズリを恐怖

に陥れる者もいれば、爆弾や戦闘用の小型装置、電波妨害、猛毒の拡散を含む可能性のある荷物を投下する者もいる...

多くの場合、腐肉は嗅覚の合図や感染症の原因としても機能しました。それは戦士たちが選んだもう一つの武器だった。ズリ避難所に入る必要はなく、天蓋に住んでいた数匹の動物を殺し、死体を落とすだけで十分でした。最終的には、蚊ドローンが伝染病の細菌を持ち込む可能性があります。誰もズリの生態を知らなかったのも、それはすべてランダムでした、しかし、彼らは、記録されたすべての病気の大規模なサンプルを使用することで、幸運が彼らを助けることを期待していました。

いいえ！ 運は彼らを助けてくれません。アンドロイドたちは、明らかに地球の遠い過去においてさえ、何度も使用されてきたこの戦略にすでに気づいていました。また、どこかで死体が発見されるとすぐに、生物防護服を着たマケドニオとひのこはその場を消毒して動物を埋葬した。戻ってきたとき、二人の「掃除人」を消毒していたのはカルメンとほたるだった。そのたびに、ズリたちは地球人4人からもう危険はないと告げられるまで、シャトルの中に閉じ込められなければならなかった。

人間の天才は、その支配を課すことに関しては限界を知らないようでした。アンドロイドたちはそれを知っていて、常に警戒していました。脅威が上から来ていない場合、それは蛇のように這って来る可能性があります。実際、密猟者の大きな鳥が落とされたさまざまなものの中には、小さくて特に攻撃的な樹上性ヘビも含まれていました。コウモリの攻撃に最適です。

これらの爬虫類の毒は神経毒性があり、ズリの根絶を望んでいる氏族たちの科学者らは、それが地球外生命体にとって神経毒性である可能性が高いと信じていた。それらは、宇宙の種は同じ種類の物理的物体から同じ種類の生命の発展につながるはずだという理論に基づいていました。幸いなことに、ほたとひのこは二人の人間を医学研究に導く上で十分なインスピレーションを受けていました。彼らは彼らに最新のプロトタイプさえ与えましたが、その一部は扱いが非常に複雑だったので、特定の人工知能に委託され、それ自体がアンドロイドによって監視されることがよくありました。カルメンとマケドニオは、応急処置の専門家であったが、発見から根絶に至るまで、あらゆる病気との闘いの分野でエキスパートジェネラリストとなったが、もちろん治療も忘れなかった。

しかし、この戦争は十分な速度で進んでおらず、いずれにしても、実際に戦場を占領しすぎたアンドロイドの仲介を除いて、ズリ避難所は外界とのあらゆる通信から遮断されていたため、結果を見積もることは不可能でした。これは人型ロボットの存在に反対する人々を喜ばせるためではありませんでした。非常に遠くから観察できたのは、ズリの生命の痕跡が減っていないことだけでした。死傷者はおらず、そこに住んでいた二人の地球人も元気に暮らしているようだった。時々、すべての生命信号が消えました。忍者ゲリラの観察者らは、これはアサイラムの住民が封印されたシャトルに乗って戻ってきたときではないかと推測した。そのため、他の監視手段が必要でした。

ワシやハゲワシは大きすぎて、アンドロイドが仕掛けた網の隙間を通り抜けることができない。ヘビは制御が難

しすぎたので、この任務にはオウムが選ばれました。この地域には色とりどりの生物がたくさんいたので、誰もそれらに注目しませんでした。しかしそのためには、まず、コンゴウインコを脅かし、時には食べてしまうハーピーとハゲワシの2種を取り除く必要がありました。明らかに、ほとるとひのこはそれらに気づくでしょう。彼らは出来事の頻度を非常に正確に測定する方法を知っている内部時計を持っていたからです。

あらゆる種類のオウムがズリ避難所の木々に生息し始めました。そのため、2人のアンドロイドは、いつもより多くのコンゴウインコを見ても驚かず、ズリがまるで彼らの惑星の家畜であるかのように、彼らの存在を高く評価しているようだということに満足した。それは確かに嬉しいことであったが、まだ見えな忍者ゲリラからの卑劣な策略を期待していたほとるとひのこにとっては、あまり安心できるものではなかった。彼らの戦士の多くは密猟者であったため、アマゾンの動物相をよく知っていました。

その後、2匹のアンドロイドは親しい友人たちに、飼い慣らそうとしているこれらの鳥を間近で見せてほしいと頼んだ。これらの種は絶滅の危機に瀕しており、3000年紀の夜明けに、それらを追跡し、より効果的に保護するためにそれらにチップを入れることが決定されました。新しい小型化手法のおかげで、ますます洗練された送信機を作ることが可能になりました。最終的には、これらの保護動物には小型監視カメラも取り付けられました。これは、これらの絶滅危惧種に対する人間の攻撃を可視化し、少なくとも調査手段を確保するためでした。

元々、この装置は善意を持って作られましたが、すぐに一部の人々が悪用するようになりました。レポーターか

らスパイまで、誰もが関係者に知られずにビデオを撮る方法を知っていました。そしていつものように、小さな秘密を暴くのは常にアンドロイドであり、そのことが彼らが司会者や調停者として活動しているにもかかわらず、特定のサークルではほとんど評価されていないことを説明しました。

カメラは簡単に引きちぎられてしまう可能性があります。ズリ人は、甘やかしている動物を傷つけたり怖がらせたりすることなく、一度に引っ掻いて引きちぎる方法を知っていたという、鳥の喉の下部に埋め込まれた羽毛のようなものでした。これらのオウムたちがズリ避難所での新しい生活を満喫しすぎていて、元の飼い主のもとに戻りたがらないことはでした。

再び、緑の戦争技術が不十分であることが判明した。そして、迷惑な地球外生命体に対して密猟者忍者を送り込んだ責任者たちは諦めたくなかったため、ホーリー・エコロジーを支持して全団体が満場一致で容認していた善行から逸脱しなければならなかった。もちろん、ハチドリのような小さくて目立たない鳥を送り込むこともできましたが、彼らは絶え間なくくねくねと動くため、良いショットを撮ることはできませんでした。自然の昆虫に関しては、その制御はさらに不確実でした。残ったのは、量子ナノテクノロジーのあらゆる技術を使用した一種の小型ロボットである人工昆虫の使用だけでした。

人工昆虫は飛んでいるかもしれないし、飛んでいないかもしれない。最初の者が消費したエネルギーは、スパイ活動を除いて常に良い候補者になるとは限りませんでした。それでも、彼らの飛行は静かでなければならなかったのです。後者については、地形を観察しながら、どこにでも機器を運び、組み立てることが可能でした。

したがって、大規模な清掃作業には後者が選択されました。

これらのマイクロロボットはグンタイアリののように見えました。後者と同様に、彼らの咬傷は非常に有毒である可能性があり、生態学的にははるかに悪影響を及ぼします。この兵器にはもう1つの利点もありました。レーダーでは探知できません。実際には、これらのアリはそれぞれ、無数の半自律的な下位要素から構成される単一の实体、つまりコロニーの構成要素にすぎませんでした。

これらの人工のアリのコロニーはズリ避難所内のさまざまな場所に導入され、キャンプに集まるズリや人間に出会ったら追い詰めて殺すことを目的としていました。ズリの特に鋭い聴覚が彼らの踏みつけや毛刈りを感じなければ、彼らは気づかれなかったかもしれません。ズリ人はすぐに地球人に異常を知らせた。

カルメンとマケドニオはパニックに陥りました、なぜなら、彼らは本物の昆虫を知っていたからです。この人工昆虫の方がひどい場合は、逃げるのが唯一の解決策です。実際、アリを駆除するために、彼らが知っていた方法の1つは、アリ塚のほぼ全体がそこにあるときに発火する大きな穴の底にある食料源にコロニーを引き寄せることでした。しかし、これらの合成動物は同じ食欲には従わず、同じように燃えませんでした。彼らは、自の姉妹たちと同じ論理を持っていませんでした。なぜなら、彼らは質問もしない芝刈り機のように、盲目的に破壊するための破壊方法しか知らなかったからです。

ズリが設置し始めた生体ベルトは、この種の侵入には効果がなかった。保護シリンダーは小さな昆虫を検出するように調整されていませんでした。そうしないと、波管

が常に警戒状態になり、キャンプのすでに限られたエネルギーを消費することになります。アサイラムを覆うネット内のドローンは地上を監視していなかった。言い換えれば、攻撃はどこでも行われる可能性があります。危険は大きく、この脅威に迅速に対抗することが急務でした。

第十章 逃亡

ズリのリーダーであるモヒ八はキャンプの全員を緊急に招集した。一方、ほたとひのこはこの兵器に関する追加情報を入手していた。小さなコミュニティ全体のための戦略を迅速に確立する必要がありました。

モヒ八班長はこう始めた。

—みんなここにいる？

—いいえ！ 第4シャトルのズリの集団が叫んだ。収穫人の1台が行方不明です。

モヒ八はヒノコとウポクを振り返った。

—あなた達は検索してみてはいかがですか？ その間、私達は会議を開始します。

ひのこは保護の網のミニドローン気球を飛ばして、その地域にあるすべての木を調べました。何か怪しいものが彼の注意を引いた。それから彼は、それが何であるのかを見るために、探検家のシフカと保護者のサブラの助け

を求めました。アンドロイドは、一緒に何が起きているかを見るために、二人にカメラを与えました。

そのイメージは、すべてのズリ、地球人、さらにはアンドロイドにとってもうんざりするものでした。果樹の枝には二本の脚がぶら下がったままですが、もう体を支えていませんでした。それは引き裂かれた死体の肉片で、その破片が地面に散らばっていた。人工軍隊アリの惨劇が通り過ぎ、その進路にいたすべての動物を一掃しました。そして、ズリには何が起きているのかを理解して飛び去る時間がなかったのでしょうか。

「全員、すぐにキャンプに戻ってほしいです」と、アンドロイドにしては珍しい口調でひのこが命令した。

—あなた達は危険にさらされています。気をつけて戻ってきて、戻ってくる間は何も触らないようにしてください。

アンドロイドの叫び声は誰もが聞き、まだ地球人の言葉をよく理解していないズリ人ですら事態の深刻さを察知した。ほたるは急いですべての雇用主と、コミュニティズリを直接的または間接的に支援するすべてのアンドロイドにSOSを送りました。アヒフは自分が理解したことを人々に伝えようとしていた。ウポクはすべての波管を再プログラムし、今度はキャンプに向かって突進してくる何千もの小さなロボットを検出しました。カルメンとマケドニオは研究室に急行し、緊急物資の準備を始めた。彼らはすでにその惨劇について知っていましたが、それでも彼らは戦争と破壊の機械ではなく、本物のアリだけを相手にする必要がありました。

この騒ぎの中、モヒハは残りのイベントが心配だったので、他のズリ全員に最低限必要な荷物を準備するよう勧

めた。同氏はまた、それぞれのシャトルからそれ以上逸脱しないよう求めた。シフカとサブラが戻り、ウポクとアンドロイドたちが何をすべきかについての情報を得ると同時に、全員が共通の決定を下すのを待つ間、一緒に留まらなければなりませんでした。

ほたるにとって最優先事項は二人の人間を救うことであつた。確かに、地球人の肉体はズリの肉体よりもアリを惹きつけるのではないかと彼女は懸念していた。そして、この不利な点に加えて、人間は逃げるために走る方法しか知りませんでした。いずれにせよ、彼女とひのこが開けた出口でさえ非常に危険になるからです。それらはズリが腕を伸ばして運ぶには大きすぎて重すぎた。したがって、彼女は彼らを避難させるための唯一の解決策を考えました、それは空路でした。

アイデアを発案したのはカルメンでした。それは、救助隊員である彼ら自身が使用したのと同じ技術、ヘリコプターのホイストを使用することでした。しかし、たとえ虹色と赤い血の滴がエンブレムとしてマークされていたとしても、ヘリコプターをこの角に連れて行くことは不可能でした。全人類に奉仕する応急処置者を示すこの表現は、現在地球全体でコンセンサスとなっており、その発光と蛍光の帯であまりにもはっきりと見えました。残念ながら、ゲリラ忍者たちは異常を察知しただろうし、たとえ救助隊の中立性を尊重していたとしても、もっと知りたいと思っただろう。

ひのこはこの問題の解決策を見つけるために助けに来ました。二人の人間を空中に運ぶ機械を見つけなければなりませんでした。しかし、彼らを安全な場所の乾いた土地に安全に降ろすことを忘れてはなりません。ほたるやひのこさんを取り込んで新しい肌を与えた二人のように、

森林警備隊として活動するアンドロイドも多かった。しかし、この場合、2人以上の人間を、そしておそらくはもっと長い期間、住まわせることが予想されるはずで、彼には計画を立てて、それが部分的にでも達成されるのを待つ時間はありませんでした。速やかにキャンプ全体を避難させ、将来の保護的に情報を伝える役割をこの二人の人間の救助者に託す必要があった。

そこでアンドロイドは、自分たちを精神病院に連れ戻した解決策とは逆の解決策、つまり、しぼんだ熱気球を想像しました。この機械は収容所のメインマストの隣の木にぶら下がったままだった。貨物と2人のアンドロイドを収めたポッドの上では、熱気球のバーナーがまだ出発準備ができていました。後者には、クレーン気球を十分な高さまで上昇させ、それを牽引する飛行機と接続するのに十分なリソースがまだありました。空気が暖まるとすぐに、パラシュートの開口部が自動的に閉じて、ほぼ完全に閉じた球体の外観になり、エアロスタットの使用準備が整いました

すぐに熱気球の準備が整い、2人の人間の救助者が乗り込みました。マセドニオは指を組んで、すべてがひのこの計画通りに進むことを願っていることを示した。幸いなことに、ほたるさんは多くの人間の文化を知っていたので、日本では上品ではないであろうこのしぐさの意味を知っていました。それから二人の人間は、戦士たちに見つからないように、エイリアンのシャトルの部品で急いで石畳んで作られた彼らの周りの檻を閉じた。

機械は騒音を立てずに、また忍者ゲリラの注意を引かないようにゆっくりと上昇しなければなりません。次に、特定の高度で別の飛行船がやって来て気球、より正確には2人の乗客を回収します。これらは、それほど

遠くない安全な場所に預けられるでしょう。ここは、避難所を放棄したズリ全体が行かなければならない場所です

熱気球が天蓋を越えて夕暮れの空に舞い上がるとすぐに、シフカとサブラは川に向かって飛び、周囲を調べました。ズリ人にとって紅川の対岸はそう遠くない。彼らはこれを簡単に達成することができました。彼らは皆、星間冒険のために選ばれた、健康で丈夫な存在でした。しかし、彼らが道に迷ったり、未知の、時には敵対的な世界でシャトルから遠く離れた場所をさまよって危険にさらされたりしないようにする必要がありました。

ズリ人は、避難所としてだけでなく、作業場、医療施設、そして何よりも防御を制御するための制御室としても機能した保護シリンダーやシャトルなど、元の装備のほとんどすべてを放棄しなければなりませんでした。その一方で、メインマストの最上部に設置されたズリ救難標識灯は絶対に携行しなければならなかった。地球外救助サービスはこのシステムを通じて生存者を見つけます。実際、この装置は難破船の位置を示す信号を天に発信します。波管たちに関しては、出発前にそれらはフルパワーで起動され、敵のズリ避難所の監視を妨害するため、敵を欺くために使用される。

緊急性はもはや議論を許さない。キャンプに最も近いシリンダーは、アリの前進を妨げる準備がすでに整っている必要があります。確かに、ひのこは、彼らは時速約20メートルで進んでおり、キャンプの近くに送られていた人々はすぐにそこに到着すると見積もっていました。

突然、ひのこがこの痛ましい緊急の問題を解決するのを手伝っていたコミュニティのアンドロイドの一人が解決

策を見つけました。彼は、自分はマストの上部に設置されていたレーダーの管制官の一人だったと説明した。彼が学んだことによると、群れのロボットは異常な周波数で相互に通信していましたが、その周波数はレーダーが使用できる周波数の一つでした。これらの人工昆虫の通信を妨害するのに十分な強い放射線を生成するには十分でした。したがって、彼らはもはや調整できなくなり、完全な組織の混乱につながり、攻撃の有効性が低下します。もちろん、レーダーは本来の機能を果たせなくなりますが、それは問題ではありませんでした。いずれにせよ、キャンプは破滅する運命にあり、徐々に居住者を排除する必要性がありました。あらゆるヒューマノイドにとって、緊急性は必要性よりも優先され、後者は有用性よりも優先されました。

この間ずっと、ほたるはズリの避難を組織していた。軍鳥がいつでも迎撃する準備ができている可能性があるため、空路で逃げることは危険でした。そのため、非常口を多様化する必要性がありました。ズリにとって、防護ネットの網目をすり抜けるのはそれほど難しいことではなく、必要に応じて結び目を1つか2つ解いて通路を広げた。しかし、ロボットアリによってこの種の脱出が不可能になる前は、最初は這い出た方が安全だと誰もが考えていました。一方、ズリは翼を折りたたんだ状態でもアンドロイドに比べて大きなスペースを占有するため、そのためにはかなり広い通路を開ける必要があった。

アヒフは、ほたるが、良いアイデアを持っているが、時には地球人とは大きく異なる他のズリとコミュニケーションを取るのを助けてくれました。実際、この機会に、アンドロイドはズリが技術的に同じように進化していないことを発見しました。確かに、火を使いこなすことは彼ら

の文明にとって最初で最も重要な発見でした。しかし、車輪を発見するずっと前に、ズリは黒色火薬、花火、静電気を発明しました。実際、地球外生命体は、コンパスと車輪のどちらの発明が他方の発明の起源であるかを正確には知りませんでした。これは彼らの先史であり、おそらく彼らが地上や海よりも空に慣れていたという事実による、別の発展の道でした。

人間とは異なる技術の中に、ズリシャトルの建造がありました。それらは互いに適合し、付着した鱗の形をした構造から作られています。この方法により、シャトルを簡単に解体して移動し、亡命キャンプを作ることができました。

ほたるが現場で見つけた木の破片を使って敵の氷壁の下に作った小さなトンネルに似た通路を作るために使用されたのはこれらの鱗でした。ズリ人は、野营地と川につながる湿地地帯全体の刑務所の足場の建設が不十分であるという弱点を利用しました。すぐに、濡れずにこの囲いから出るために、囲いの隙間を利用してトンネルが建設されました。しかし、地球外生命体の働きはそれだけではありませんでした。確かに、彼らはできるだけ早く空を飛ぶ必要がありました。このため、彼らは地下通路を延長して水域を渡り、川岸に沿ったより適切な地点まで延長しました。

二人の人間が避難するとすぐに、シフカとサブラは、ゲリラの行動をチェックするために亡命施設の外の出口付近を素早く訪れ、それから安心してキャンプに戻り、数十ズリを持って出発した。この最初のチームには、キャンプの4人のガイドと4人の侍が集まるという特徴がありました。これは、彼らが後続のチームのルートを示すためでした。進路のマーキングと安全偵察を容易にする

ために、まだアンドロイドによって遠隔制御されているいくつかの小型ドローンがすでにその位置を占めていました。これにより、たどるべき道を示すだけでなく、何よりも川を渡り始めてから目的地までキャンプとの連絡を維持することが可能になりました。確かに、これにより、シフカとサブラが常に行ったり来たりして消耗して時間を無駄にするのを防ぎながら、ズリの脱出を助けることができました。

最初のチームが彼らを保護するために指定された場所に向かう途中、定期的にガイドと侍の一人がドローン1機の位置に立ち寄りました。これらのドローンは、逃亡するズリの他の保護者にメッセージを伝えるための一種のラジオになりました。シフカとサブラは、それぞれ十数名のズリからなる後続チーム全員の出発を確実にするために、アサイラム前の土手に留まっていた。最初のチームが計画された目的地に到着するとすぐに、残りのチームはベニ川を渡り、より速いペースで渡河を追跡し、ロボットアリの脅威が差し迫った場合にはさらに非常に速く渡河を追跡しました。しかし、いずれにせよ、彼は彼らの逃走が気づかれないようにしなければなりませんでした。

彼らの新しい避難所には防御兵器がなかったため、裁量が課せられた。実はそれは、廃墟となった古い観光キャンプで、環境警備のアンドロイドによって改装されたものだった。彼らは同時にそこを住居としたのです。また、負傷した動物や迷子になったり困っている人間のための診療所と2つの保護施設もありました。

外から見ると、建物はさまざまな大きさの住居のように見え、木と日干しレンガ造りで、環境に優しいことで知られる古代の先住民の建築を模倣した茅葺き屋根が付い

ていました。しかし、内部は近代的で、火災、集中豪雨、害虫の侵入に対して安全でした...実際、壁、床、天井はプラスチックプレートで覆われており、この材料は数多くの電氣的、光学的、熱的特性...そしてすべてをプログラム可能でした。これらのプレートは、成形したり、相互に接続したり、さらには自己修復することもできます。

内装は地味ではあるが快適で、常に最大 100 人を迎える準備を整えておきたいと考えていたアンドロイドのチームによって細心の注意を払って維持されていた。取り外し可能なパーティションにより、動物、人間、後者をそれぞれの性的伝統に応じて分離するための空間の再構成が容易になり、さらには個別の病室を設定することも可能になりました。アンドロイド自体はこれらすべての快適さを必要としませんでした。バッテリーを充電し、ウェブで通信し、畳のような場所で 1 日 4 時間動かずに眠るだけで十分でした。残りの時間、彼らは数百機の小型森林ドローンを監視していたが、これはズリ族が亡命中に使用したのと同じものだった。必要に応じて、1 人または 2 人のアンドロイドが森に移動して現場を確認し、必要に応じて介入することもありましたが、これは頻繁ではありませんでした。彼らには、人間のように形を維持するために動く必要性がありませんでした。

今回、アンドロイドは巨大なコウモリを迎え入れなければなりません。アマゾンの最大のものでズリより少し小さいくらいでした。彼らはエイリアンがぶら下がるための竹を数本探しに出かけました。幸いなことに、彼らはすでに彼らがいる場所を見つけしていました。レーザーカットにより作業が容易になり、彼らはすぐに竹を

宇宙人に持ち帰り、最大の納屋の屋根の下に竹を並べる
ことになりました。

同時に、第二チームは壁の下を通るトンネルの入り口に
陣取り、周囲を監視していた衛兵長サブラと合流できる
ようにした。後者の小さな叫び声は、次のズリがトンネ
ルに滑り込む可能性があることをアヒフに示しました。
後者が反対側に現れるとすぐに、彼はシフカに到着する
ための方向をすぐに知らされ、そこでチーム全体が少し
ずつ合流するまで木の上で待つつもりでした。十数頭の
ズリが集まるとすぐに、ガイドが彼らを新しい家に導く
ために組織されました。

その間、待つことなく、ズリの3番目のグループが
すでに動きを加速する準備をしていました。幸いな
ことに、アンドロイドのレーダーによって引き起こ
された干渉により、ロボットアリの方向が狂い、繁
殖速度が大幅に低下しました。しかし何よりも、私
たちは自分たちの栄光に満足すべきではありません。
その日の終わりまでに、メスは全員避難していまし
た。キオボさんは例外だった。彼女は、犠牲者にな
りそうな人を治療するために最後の瞬間まで残って。
彼女もそれ、特に敵が現れた場合に、ストレスの最
後の瞬間を耐えられるように少なくともビタミン豊
富な食品を配布したかったからだ。

ほたる、サブラ、シフカはズリの避難を組織的に組織し
た。彼らの規則では、人間の保守派と同じように、まず
女性のズリを保護することが求められていました。しか
し、彼らの受精方法が地球人と同一ではなかったため、
比較はそこで止まった。実際、女性のズリは排卵を待ち

ながら精子を蓄え、生殖者の死後長い間でも赤ちゃんのズリを産むことができました。さらに、ズリ族は一夫多妻制であったため、彼らの伝統を変えることのなかったDNA分析が発見されるまで、生物学的な父親が誰であるかを知ることは不可能でした。したがって、地球外生命体にとって、女性を救うことは、おそらく将来の子供を救うことにもなるのです。

アヒフでさえズリ避難所を去った。彼の退任は特に感動的だった。トンネルに入る直前、彼女はほたるを羽で受け止め、ぎゅっと握りしめた。

「またお会いできることを心から願っています。体に気をつけてください！そして、安心してください、二人の人間が戻ってきたら、私がしっかりと守ります。あなたが私たちをとっても助けてくれたので、私たちはあなたにその借りがあります。また会いましょう、友達！」

夕方になると、避難所には医師を除いて族ズリの男性だけが残っていた。ほとんど全員が、モヒハは最後から2番目のグループの一員であるべきだと主張したが無駄だった。しかし、署長は、彼の代理はすでに最初のグループと一緒に出発したと答えた。彼女は、全員が到着するのを待っている間、新しい避難所に行って設置を監督していました。彼女は一時的に、そしておそらく永久に彼の代わりになった。ロボットアリとの戦いが始まっていたからだ。

幸いなことに、ほたるが脱出に対処している間、そしてひのことウポクの扇動により、残ったズリはキャンプの周囲で利用可能な波管を再編成していた。これにより、近づきすぎたアリの電子機器が破壊される可能性があります。この方法は各アリの知能をすべて破壊するため、

より効果的でした。これらの6本足の知性レンガは、脳内のニューロン、環境を分析する感覚、仮想女王の運動神経のように動作しました。この仮想の女王は、各アリの「コマンダー」の「魂」でした。この女王の知性は、あらゆる新しい領域を積極的に征服し、そのエネルギー資源をすべて活用するようにプログラムされていました。このように、包囲された側の最新の戦術のおかげで、ズリの野営地に近づきすぎた各女王は完全に方向感覚を失い、まるで気が狂ったかのように振る舞った。

サイキックコミュニティから切り離された孤立した口ポットアリはもはや脅威ではなく、残りのズリチームの進行中の活動をほとんど中断することなく簡単に破壊されました。これには、脱出に向けた最終準備のための時間がまだ残されていた。実際、それぞれの地球外生命体は、地球上でズリが生き残るために必須、または少なくとも非常に有用であると考えられる要素を腹袋の中に運んでいました。しかし、いくつかのアイテムはとにかくかさばりすぎたり、重すぎたりしました。ほたとひのこが世話をすると申し出た。しかし、2人のアンドロイドにはどこでもこっそり歩き回れるほどの機敏性はなく、さらに水を怖がっていた。彼らを助けるために、医師だったキオボも、2人の「技術者」仲間がすべての準備をするのを手伝いました。これにより、2体のアンドロイドが同時に救難することができ、マストとウボクの管制所の救難信号を救出することができた。

住民の避難に取り組んでいなかったズリたちは、氷の壁の下を通過して川に向かうトンネルに滑り込むことができる、比較的柔軟な鱗でできた既製のほしけを準備していました。内部には緊急マスト発信機と指揮所の要素が

設置されていきました。ほたるやひのこを入れるのに十分なスペースがありました。

4人の便利屋は最終準備のために事前にキャンプを出発した。確かに、彼らは2人のアンドロイドがバージをトンネル内に移動させるために引っ張るロープを準備していました。さらに、バージを覆う蓋を準備する必要がありました。これは、はしけの中身を波や転覆から守るだけでなく、カモフラージュとしても役立つだろう。この気密保護は木と藪の山に似ており、はしけが浮上したらすぐに設置する必要がありました。したがって、横たわった状態の2人のアンドロイドが簡単に設置できる必要がありました。

すべての準備が整い、最後のズリが避難を完了するために2人のアンドロイドを残して、非難された村を離れる時が来ました。ひのこはモヒ八に同行して川岸まで行きました。彼は彼が川を渡り、対岸にいたサブラに合流するのを待った。それから彼は彼を待ち、サブラは対岸に投稿してすべてが大丈夫であることを彼に知らせました。彼らがすべてが大丈夫であると合図するとすぐに、彼はすでにはしけをトンネルに押し込み始めていたほたるの元に戻りました。彼ははしけの前部に取り付けられたロープをつかんで、かれを出口に向かって牽引します。

外に到着すると、二人のアンドロイドはボートに乗り込み、横になりました。ひのこはサブラが岸から離れた枝に結んでおいたロープを引っ張り始めた。ほたるさんはボートが浮いていると感じるとすぐにボンネットを下ろし、ボートは将来のズリ避難所に向かう流れに乗り始めた。すると、ひのこはウポクからもらったシリンダーを掴み、こう言いました。「水に入ったらすぐに大きな引き金を引いてください。私はそれをプログラムして、私

たちのテクノロジーをすべて消滅させました。彼らはそこから何も得られないでしょう！」

バージの中に横たわって閉じ込められたアンドロイドたちは、何も観察することができなかった。しかしさらに、彼らは特別な感覚を持っているにもかかわらず、何も聞こえませんでした。もう一つのテクノロジーの謎ズリ。

第十一章 隠れ場所

ほとるとひのこは、ズリ族脱出中に到着したカルメンとマケドニオによって川岸まで曳航された。人間は応急処置や救助全般の訓練も受けており、ズリやアンドロイドとは異なり、水の中でも対処する方法を知っていた。これらすべての小さな人々の再会は、その場にいるアンドロイド全員が招待される大きなパーティーの機会を与えました。しかし、それにもかかわらず、夜明けになっても静けさはまだ現れていませんでした。したがって、パーティーは騒音もなく、光もなく行われましたが、素晴らしい果物が豊富にありました。さらに、これらの果実はアンドロイドのみによって収穫されたものであった。これは、もはや監禁された亡命施設に相当するものがなくなっただけ、あらゆる汚染を避ける必要があったからである。アンドロイドは飛ぶことも木に登ることもできませんでしたが、人間よりも正確に操作できる道具を備えていました。

こうした活動の積み重ねが、なぜこの場所にアンドロイドが多いのかを説明した。これは、すべてのヒューマノ

イドとすべての人間の知識を統合する Web との優れた接続も提供しました。確かに、それは、意図的か否かにかかわらず、事実を歪曲する偏見やその他の感情を通じて解読しなければならない知識でした。ほたとひのこは、ようやく自分たちの優先すべき仕事に完全に専念できるようになったので、この新しい状況に満足していました。最も急務だったのは、ズリ救難信号の再起動でした。なぜなら、いつ助けが到着するか分からず、漂流者の位置を報告することが不可欠だったからです。

その間、ゲリラたちはズリ避難所がロボットアリによって完全に破壊されているのを発見すると予想していた。これらのアリの女王を含むさまざまな機械の沈黙と混乱は、彼らをほとんど驚かせませんでした。ロボットアリの特定の「軍団」が混乱していても、彼らは心配しなかった。彼らはただのロボットでしたし、とにかく、どんな戦争にも失敗と失敗はありました。最終結果だけが重要でした。そこで彼らは、氷の壁の機能を停止する時期が来たのかもしれないと考えました。しかし、それにもかかわらず、彼らは用心深く、ズリの防御をテストするために最初に探検家を派遣することに決めました。

数多くの天然または合成動物の中から、ズリを怖がらせる動物を選択する必要がありました。目的は、これらのエイリアンがアリの攻撃から生き延びた場合にどのように反応するかを確認することでした。ロボットは完成されていたが、密猟者たちは時折ゲリラとなり、生身の本物の獣を好む傾向があった。そして、彼らにとっての理想的な解決策はハイブリッド、つまり脳に組み込まれた電子チップによって制御される野獣でした。そして、この理想的な動物は、自分が見たものを観察するためのカメラを備えたジャガーでした。彼は泳ぎに慣れていて好

きだったので、ロボットアリが徘徊してはいけない唯一の場所であり、したがってズリが生きていられる唯一の場所である隣接する沼地を通してキャンプに直接行きました。

動物の脳に埋め込まれたチップは、感覚によって実際に受け取られる情報に取って代わる仮想情報を導入することによって、動物に与えられた方向への魅力を求めるよう促した。このように餌付けされた獣は、障害物をすり抜けて報酬を見つけ、食欲を満たしました。その間、彼の旅の一部始終が撮影されていたが、突然忍者ゲリラが目にしたものは彼らを驚かせた。その瞬間、ジャガーの目撃は止まった。実際、彼は電子チップによって死の危険から逃れたいという欲求が抑制されたために死亡しました。

戦士たちが観察した風景は最も奇妙だった。キャンプ全体が赤と青のツートンカラーの霧に包まれたように見えた。そこでは虹色の光が輝き、時にはこの不気味な環境の中でほとんど区別できないシリンダーやシャトルから現れる火花や閃光を伴いました。忍者ゲリラたちは、この神秘的な雰囲気が続く限り、これらの場所を探索するのは安全ではないことを理解していました。人間が見つけた唯一の説明は、アリが在庫品や機械を破壊したに違いなく、それがエイリアンの装置に連鎖反応を引き起こしたというものだった。彼らは依然として氷の刑務所の有効性を信じており、ズリからの脱出を防ぐためにそれを運用し続けました。彼らは、川岸から離れた森に隠れようとするエイリアンの侵略者を完全に排除することを望んでいた。

ズリと二人の人間は、地球解放を目指す戦士たちの視界からは遠く離れていた。さらに、彼らはアンドロイドの

住居に閉じこもって日々を過ごさなければならないほどの慎重さを維持する必要がありました。2人の救助者にとって、彼らは毎朝薬局でアンドロイドによって教えられる専門コースを再開すると同時に、医療分析研究室を再編成する機会を得た。今回は、資材の配送が飛行機ではなく川で行われたため、さらに時間がかかりました。より大きな裁量権を確保するために、これらの任務を実行するアンドロイドは全員、特定の兵士の好奇心を刺激しないように、先住民族に似た皮膚を身に着けていました。

ズリ族に関しては二重の制約がありました。それらは敵に発見されてはならないだけでなく、それらが惑星から惑星へ病気を伝染させる可能性があるという事実、性を考慮し続ける必要がありました。そして、ある世界では有害である可能性があるものが、別の世界では無害である可能性があるため、この危険を発見するのは難しい場合があります。

したがって、ズリ人が放棄せざるを得なかった宿泊施設と同じ特徴を持つ別の宿泊施設を見つける必要がありました。しかし、いずれにせよ、エイリアンハンターが根絶の証拠を持たない限り、彼らは搜索を続けるでしょうから、どうやってこれを行うことができるのでしょうか？また、ズリ族は赤道直下の低地の森林にしか慣れないことを忘れてはなりません。さらに、彼らは完全に静かに餌を食べることができる領域を区切るだけでなく、あらゆる侵入から身を守る役割を果たしていた保護シリンダーをもはや持っていませんでした。

その間、ズリとアンドロイド全員は、すでにシャトル4台よりもはるかに広いスペースを提供していた現在のシェルターの手配にほとんどの時間を費やしました。彼

らは自分たちの文化をもっと分かち合う機会を利用し、おそらく一緒に暮らす機会を見つけたのでしょう。なぜなら、実際、いつか助けが彼らを家に連れて帰るために到着するかどうかさえ誰も知りませんでした。そしてこの間も、二人の地球人はアンドロイドの助けを借りて自らの生物学的適応性を研究し続けた。

2つの種の生物学的適合性について考える前に、まず新しいゲストの衛生状態を確保する必要がありました。これは、彼ら自身の習慣に合わない環境では特に顕著ではありませんでした。さらに、避難中に装備を放棄しなければならなかったため、衛生上役立つ特定の要素が失われました。しかし、病原微生物の増殖は空気や直接接触だけで起こるわけではないため、これは大きな課題でした。実際、例えば、排泄物は危険な繁殖源となる可能性があり、伝達物質となる危険性のある昆虫に感染する可能性があります。

この疑問は、ズリがシャトルや精神病院の空きスペースを持っている限り、地球人には関係のないものだった。ズリにスペースシャトルと森の空きスペースがある限り、この疑問は地球人には関係なかった。しかし、新しい避難所では、この要件が重要になりました。この問題へのアプローチに最初に懸念を抱いたのは、適切なコミュニケーションを探していたほたるさんでした。彼女は、この生物学的側面がズリの間でどのように扱われているかを知りませんでした。また、人間の間ではそれが多くの心理的、社会的解釈を持ち、時には複雑で恥や嫌悪感を伴うものであることを知って、彼女は注意しなければならなかった。

人間に対するアンドロイドの利点は、アンドロイドの場合、可能な限り率直な中立を保つために何の努力も必要

としないことだった。逆に、彼らにとって、時には努力を必要とするのは感情の表現でした。彼らの顔、特に彼らの視線から裏切られる唯一のことは、彼らが判断や偏見を持たずに、一つ一つの言葉を吸収して耳を傾けているということだった。この態度は、それを軽蔑的であると考える一部の人間にとっては迷惑な場合もありましたが、それでも、シンセであるモデレータの公平性は揺るがなかった。

Le problème le plus compliqué n'était pas du côté évalué par Hotaru. En fait, elle relevait de l'agence comme d'habitude. Et même si cela était indulgent quant aux actions que Zuri devait entreprendre, il était extrêmement strict quant à la question de la prévention des accidents biologiques qui pourraient avoir des conséquences désastreuses au niveau planétaire. Ainsi, elle, Hinoko et les deux secouristes ont reçu l'ordre d'accélérer les mesures préventives. En revanche, grâce à cette préoccupation légitime des siècles passés, l'assistance technique va se multiplier et être mise en œuvre pour de nouveaux refuges.

まったく新しい分野である外生物学に向けて大学の資格を準備している2人の救助者にも、アンドロイドの援軍が派遣された。そして、ポリビアとの協定のおかげで、ズリが占領していた避難所は特別な地位を獲得し、この観光地は国際研究のための大学センターに変わりました。さらに、この場所は惑星の危険領域に分類される敏感な場所であると宣言されており、したがって高エネルギー発電所の場合と全く同様に警察による監視下に置かれている。そこで、緊急に旅団が派遣され、わずかでも歓迎されない存在を感知するために周囲地域を常駐してパト

ロールすることになった。したがって、それは世界的な保護地域であったため、虹の武士でもそれを処理しました。明らかに、この特定のケースでは、これらの兵士は人間でした。なぜなら、アンドロイドは、たとえ「平和の兵士」への奉仕であっても、わずかな攻撃性を必要とする活動に参加することを拒否したからです。この最近の実験場にアクセスするには、実施された研究の透明性と、事故を避けるための安全性の保証を証明する国際的な承認が必要でした。このおかげで、ズリたちは密猟者からの新たな攻撃の恐れがなくなったため、監禁にさらに耐えることができました。

ひのこの注意をアサイラムを守ることに独占していた懸念から解放され、彼はついに彼の最も好奇心をそそられたズリの技術、つまり鱗のようなタイルで作られたシャトルを研究することができた。その答えは単純だったが、2本の足と2本の腕を持ち、その先端が器用な指を持つ生き物にとっては一見ただけでは明白ではなかったので、彼は驚いた。確かに、ズリは遠くに住んでいないサギのように歩くことができましたが、これは飛ぶことができる生き物にとって最も都合の良いことではありませんでした。一方で、大部分の陸鳥とは異なり、地面から飛び立つための力があまりありませんでした。したがって、彼らは、グライダーのように流れを利用して飛行を続けるのに十分な勢いを与えた落下を開始した後のみ飛行することを好みました。そしてそのとき初めて、彼らは非常に機動性の高い翼がもたらしたスムーズなナビゲーションを利用できるようになりました。これらの地球外生命体の発明はすべて、これらの制約と利点を考慮して行われました。

ズリ人には止まり木から落ちる習性があった、そのため、彼らの種は、万が一の事態に備えて、突然目覚めた瞬間にも飛び去ることができるように常に維持することで発展してきました。「ズリ・ハビリス」が生まれたとき、彼は止まり木にぶら下がって作業する方が快適であることに気づきました。羽の膜があるために肉体労働が妨げられるという事実により、ズリは小さくて軽い物体を作らざるを得なくなり、それで飛行したり、階段や梯子のような一度設置された場所であればどこにでも登ることができました。これは、とりわけ、この素晴らしい鱗の役割の1つでした。たとえば、シャトルの内側に登ってサスペンションバーをつかむことが可能になりました。これらの鱗は、複雑な構造物のすべての製造において不可欠なレンガとなりました。吊り下げられた作業場を設置し、シャトルを製造するために集められたのは、これらと同じ鱗でした。これらの鱗はプラストモーフのスラブと同等ですが、組み立て技術以外にも多くの違いがありました。彼らは、原形質のような柔軟性をすべて持っているわけではありませんが、その一方で、人間の物質にはない剛性、繊細さ、軽さを持っていました。これら2種類の材料を組み合わせると、それぞれの種にとって興味深い可能性があります。

ひのこはズリからこのタイプのタイルを発見できたことをうれしく思い、この知識を大学の研究者と共有したいと考えていました。グローバル化したこの「大学研究者」という肩書きは、大学と普遍性を一言で結びつけるパスポートとして認められていた世界各地で働く可能性を与えた。調停活動に参加していないアンドロイドはすべて、これらの研究者と関係を持っていました。ほたるのような翻訳者もいれば、ひのこのように、人間の脳的能力をはるかに超えて処理されるデータを考慮して大容

量の追加メモリを提供する協力者もいた。ヒューマノイドのもう1つの利点は、ヒューマノイド同士で知識を迅速に共有することと、決して自分自身を押しつけないように常に注意しながら、肉の仲間に情報を伝達するのが容易なことです。

この人間とアンドロイドの連携により、基礎研究と応用研究の両方を迅速に発展させることが可能になりました。研究者たちは、実質的にリアルタイムで通信を行ったひのこを通じてそこにいたため、新しいズリ避難所に行く必要さえありませんでした。同時に、ユニバーサルインカムは、どこにでも同じ給与と同じエネルギーコストを割り当てる「プランク」通貨による普遍通貨システムを共有するために、それに加入したすべての州で導入されました。したがって、「頭脳流出」が減少しました。

ズリ、彼らの生物学、習慣の研究もまた充実したものでした。なぜなら、彼女は自由と義務、平等と多様性に関して全く異なる概念を持っていたからです。まったく新しい文明の発見という知的側面とは別に、2つの種が互いに無害であることを確認できない限り、監禁を課しながら最高のおもてなしを確保するという問題がありました。したがって、おもてなしと隔離の間でやりくりする必要がありました。そしてまず、ズリの鱗を使って宇宙からの漂流者たちの住居を建てることは、より良い日を待つ間、彼らにもっと安心を与えるのに役立つかもしれない。

避難する権利は、長い間、権利だけを含むものではない人類憲章の一部でした。確かに、最初の条項は義務であり、権利ではありませんでした。あらゆる形態の知性とその知能のあらゆる支援を尊重する義務。この義務は特に誤解され、自由への攻撃であるとみなした多くの人々

によって受け入れられました。もちろん、それはもはや革命家、暴徒、テロリストに関するものではありません...、それらはすべて過去のことでした。彼らは単なる「密猟者」であり、ある者は理想から、ある者は収入向上のため、時にはその両方を同時に人間に向けて武器を向けた。さらに悪いことに、彼らは、他人が彼らの知性を尊重する義務があることから恩恵を受けていたため、何も恐れていませんでした。

ほたるは時々人間を理解するのが非常に困難でした。時折、彼女は密猟者たちを悩ませているのは敬意ではなく、「義務」という概念自体が彼らにとって悪であるかのようにさえ感じた。幸いなことに、彼女はズリにそれを説明する必要はありませんでした。彼女にとっての問題は、リサイクルシステムを確実に理解し、あたかも地球外生命体が宇宙船にいるかのような生活環境を維持することでした。

敷地の開発は驚くべきスピードで進んでいた。建設チームは指揮者アンドロイドで構成されており、時には数百台の工作ロボットを指揮しました。ほぼ最後まで人間が実行の品質を監視しました。確かに、エイリアンと冒険を共にした二人の救助者でさえも、人間はそこに入ることができませんでした。したがって、彼らの生息地の仕上げを監督したのはズリ人でした。

除染エアロックにより、アンドロイドたちは果物の収穫を共有すると同時に、考える存在の3つのコミュニティを結集させたこのアマゾンについて少し話すことができました。アンドロイドたちはまた、カルメンとマケドニオが運営する研究室からのサンプルと分析を交換する機会を利用した。しかしそのたびに、ズリに対するそのような行動の理由を問われるのはむしろほたるでした。確

かに、彼女はもっと外交的で、尋問されたのがひのこだったとき、彼はそれについて話し合う必要があるのはパートナーとのことだと言って答えをはぐらかしました。彼は、それは長い話であり、彼の専門ではないほど複雑であると説明しました。

ほたるは最終的にズリに、人類文明は非常にトラウマ的な伝染病の時期を経験したと説明した。これに対してズリは、自分たちも悲劇的な出来事を経験したが、それを大したことはないと答えた。彼らは無事に済んだが、それはそれで良かったので、それほど警戒する必要はなかった。

—ご存知のように、これらのファイルは巨大で、ほぼ3000年の歴史を網羅しています、とほたるさんは言いました。この情報は非常に昔に遡るため、デジタルではないメディアに書かれていました。私がお伝えできるのは要約だけですが、他の要約と同様に不完全なものとなります。

ほたるさんはしづしづ、伝染病の問題は時間の経過とともにますます複雑になってきていると説明した。

実際、地球人はある種の伝染力に気づくとすぐに、病気に頼って敵を攻撃し、滅ぼしていました。

「人類の社会的進化が遅い中、科学技術の進歩のおかげで、医学はこれらの病気の一部を治療するだけでなく、その伝播様式を研究することで病気の発症を回避することにも成功しました。

残念ながら、領土を争うために戦争をすることが多かった人類は、これらの発見を利用して、当初は動物、植物、

または単なる鉱物由来の自然界で収集された毒にすぎなかった生物兵器を作成することができました。

» 現代の技術により、微生物を生きた毒として使用することが可能になりました。制御が難しく危険であるため、そのような方法はしばしば禁止されました。実際、ほとんどの場合、隠蔽された事故は珍しいことではありませんでした。そこで、人間の団体は、時には規模や権力が非常に大きくなり、透明性規則などの基準を備えた慎重憲章を提案しました。しかし、一部の組織は、たとえそのメンバーであっても、必要に応じて協定を破ることを躊躇しませんでした。したがって、このタイプの兵器は開発され続けました。

「先ほども言ったように、事故はいくつかありました...そして多くの場合、悪を食い止めることができるようになるまでに何年もかかりました。しかし、これには常に秘密がつきまといっており、多くの場合、不器用な好奇心旺盛な人々やテロリストを避けるという良い口実が付けられていました。これらの地下研究所から証拠が表面化すると、それは虚偽であると組織的に異議を唱えられ、研究所の内容がほぼすべて消失することも珍しくありませんでした。いずれにせよ、技術は徐々に向上してきました。細菌はウイルスに置き換えられ、次にプリオンに置き換えられ、そして...

» 生物学的標的は、自然界で偶然発見されることがますます少なくなりました。そして、生物学の親密な構造が理解されれば深まるほど、臓器が何によって病気になるのかがわかり、人間や家畜がどのように反応するかを予測できるようになりました。これらの感染症の伝播に関しては、当初のように、天候、旅行、動物や昆虫、死体であれ排泄物であれ、影響を受けることはなくなりました

た。集団や場所をより適切に標的とするために、私たちが攻撃するロボットアリのスタイルをしたミニドローンが発明されました。彼らは毒を輸送し、時にはナノカプセルで十分に保護されており、同じ後者はそれ自体にも有毒である可能性があります。

» しかし、さらに悪いことがありました！これらの生物戦争自体がすでに大惨事である可能性があるとするれば、その中で最も有害なのは脳のさまざまな変化でした。さらに、後者は精神操作に基づいているため、過保護な地下研究所を必要とせず、最も安価でした。二重の嘘、つまり覆い隠されていないはずの偽情報がマスコミュニケーションによって広められ、制御不能になりつつある不信感の雪崩を引き起こしたという二重の嘘を広めるのには十分だった。このようにして、持続的な疑いに影響された彼らの心の中に自己中心的な確信の外に残った唯一の真実は、永久的な否定でした。これは不信感を特徴とする行動を引き起こし、コミュニティのメンバーの幸福への試みを危険にさらし、カスケード現象とフィードバック現象を引き起こしました。こうした状況は悪化の一途をたどっており、ますます強圧的な反応を生み出し、反乱を増大させる対立を煽っていた。この有害な雰囲気は、精神病院を攻撃したのと同じバイオテロリストにのみ役に立ちました。»

—地球は美しいですね！ アヒフは苦々しく結論づけた。

—私たちが創造した人々に対して厳しい態度を取らないでください。私たちが存在しているのは今でも彼らのおかげであり、たとえそれが必ずしも簡単ではないとしても、私たちがより良く一緒に暮らすために努力しているのは彼らと一緒にです。

—そして、もしそれが簡単だったら、問題を解決するのが得意なあなたのセンスでは、きっと退屈してしまうでしょう、とアヒフはわかったような笑みを浮かべて締めくくった。突然、外から声が聞こえた。カルメンはドアをたたきながら、ほたるに「早く来て！緊急だよ！」と呼びかけた。

第十二章 ロックダウン

反ズリゲリラは最終的に、放棄された避難所に入ることを決めた。失望した彼らは、有毒な霧が消え去った今、廃墟となったキャンプを発見した。内部ではすべての電気機械装置が粉塵と化していました。この荒涼とした風景の中に、焦げて粉砕されたシャトルのそれぞれによって生じた赤みがかかった砂丘だけが残されました。一見すると、そこにズリの遺骨が埋まっているかどうかは分からなかった。

死体発見の訓練を受けた密猟者の犬が、収容所の周囲に散らばる遺体を発見した。これらは、3機のシャトルからなる第2グループのキラークモによって毒殺された犠牲者の遺体でした。何か興味深いものを発見することを期待して、十数個のズリの遺体が分析のために掘り起こされました。これらの地球外生命体は、生きていたときと同じように、つまり裸で埋葬されました。彼らは死んでも、生活を豊かにするために働き続けました。ただ、彼らの遺体の中に、彼らの知らないうちに繁栄していた生命があり、それが微視的であったことを除いては

カルメンとマケドニオが最新の発見を語ったとき、密猟者たちにズリ避難所に近づいたり立ち入ったりしないよう警告するにはすでに遅すぎた。医学研究を専門とする2人の救助者は、ズリの生理機能に適應する微生物、またはその逆の微生物を検出することだけに焦点を当てた。彼らは、これらの微小な生物の行動と適應の可能性を観察し、そのほとんどは元の宿主にとって有益でしたが、何らかの理由で、咳や接触などによって2つの種の間で伝染する可能性がありました。この実験は、技術的にも倫理的にもこれらの微生物を実際に生物に接種することができなかつたので、すでに非常にデリケートでした。さらに、ズリたちは隔離され、監禁され、彼らの保護下に置かれた。そのため、二人の地球人は、生物の三次元の生物再生に頼らざるを得ませんでした。ただし、ズリの場合は、その生物の完全な外挿から始める必要があり、有効な測定の可能性が分かれませんでした。

専門家たちは、サイバー攻撃から保護されたプライベート通信システムとして機能するアンドロイドを通じて、ズリと暮らす夫婦を常に支援した。彼らの一人は、新しい一連の実験を行うことを提案しました。今回はズリの複製に移された人間サンプルの回収についてでした。たとえば、消化器系です。しかし今回は、返送されたサンプルを別の臓器に導入する必要がありました。たとえば、脳内。実験は両方向で行う必要がありました。そしてそのたびに、ズリモデルと人間のモデルの間を同じように行ったり来たりするのです。したがって、研究が完了するまでにさらに時間がかかりました。そして結果は全く予想外でした！元の器官に戻った特定の微生物叢は、気づかれないうちに突然変異を起こし、異常を来したものもあった。そして、これは両方の意味で。言い換えれば、

ズリのような人間はおそらく相互に有害であるということです。

ズリではこれが特定の貧血を引き起こし、ヒトでは主に神経系のさまざまな変性を引き起こすことをインビトロで観察するにはさらに時間がかかりました。ある生物から別の生物への自然伝播については、地球外生命体を完全にシミュレートする必要があるため、シミュレーションから判断することは困難でした。唯一明らかだったのは、ズリの糞が野生で飛んでいるときにどこにでも落ちているということだけでした。2番目の仮説は死体によるものでしたが、たとえ地球人と多くの類似点があったとしても、死んだ異星生物の行動を確実に予測することはやはり不可能でした。

これらの生物学的な類似点とは対照的に、ズリは人間とは大きく異なる行動をとりました。まず第一に、彼らは本質的に常に環境保護主義者でした。これにより、彼らの体は病気や流行病に対して異なる反応を示すようになった可能性があります。さらに、彼らは本能的にパーマカルチャーを実践していました。そして彼らは土地への帰還の行為として死者を埋葬した。そして、もし彼らの高度に発達し、非常に好奇心旺盛な知性が彼らを星々へ飛ばすよう駆り立てていなかったら、民間の避難所や大規模な建設現場、工場などは事実上開発されなかっただろう。場合によっては、複雑なタスクを実行するために専門家を集めてワークショップを開催するだけで済む場合もあります。彼らは消費に対する崇拜を少しも持っていないませんでした。自然のニーズに満足したら、創造し理解することが彼らの最大の幸福でした。

そのような精神状態で、誰もが自分たちの居住し、自分たちを養う空間を維持しました。たとえ地球上に取り残

された宇宙飛行士のように、共通の目的を達成するために集まったグループとズリが同じ場所を共有していたとしても、その場所の状態に対するこの敬意は自発的であり、強制されたものではなかった。ズリは自分たちを、より高度で複雑な実体の器官を構成する細胞であると考えていました。各細胞の使命は1つだけです。それは、臓器と血液などの体液を維持することです。実際、彼らにとって、影響範囲を良好な状態に維持することは、それらがそれらの要素の1つであるこれらすべてのサブセットを含む生物全体の生存に貢献しました。この「大いなる生命体」の巨大さを認識できなくても構わない。

モヒハは地球人にたち全てのズリ族の行動方針を次のように説明した。「私が住んでいる惑星も、その太陽も、月も、そして私という存在さえも、私が選んだわけではありません... 私が生きていられるのは、何らかの形で私の空間を共有してくださっている皆様のおかげです。私の場合、近所の人たちは私が私たちのグループをできる限り最善の形で導くと信頼しており、私たちが他のグループとうまくやっていると努めています。間違いなくグループのリーダーの中から最も賢明で最も学識のある人を選ばなければなりません。私たちは根や枝の端にいます。私たち一人一人は根か葉です。幹から樹液を押し出したり、吸ったりします。」

不幸にもメンバーの一人が病気になった場合、このグループは製品やアドバイスなど、他のところに助けを求めることなく彼らの世話をしました。グループには、できるだけ効果的な診断法と治療法をできるだけ多く学ぶ責任を負う「治療者」がいました。それからほたるは、ズリ人を傷つけたり、不快にさせたり、率直な会話を打ち切ったりしたくなかったマケドニオが、外交ゲーム中

に機会が訪れたらすぐに行くよう求めていた質問をした。
「それで、感染爆発が起きたらどうなるの？」

ズリの奇妙なことに慣れている地球人は、その答えに驚かなかった。後者は自発的に孤立し、自分たちの惑星でも使用していたシリンダーで、回復か消滅を待ちながら自給自足で生活できる領土の限界をマークした。その間、彼らは、病気と闘う必要に応じて食品衛生を調整しようと、可能であれば鎮痛剤やその他の薬草療法や催眠術を使って、小さな日常生活を送ろうと努めた。彼らの唯一の願いは、苦しまずに死ぬことだった。そしてどの場合においても、彼らは他人を苦しめるのを避けたかったのです。そして、彼らが休んだとき、彼らは最後の眠りから目覚めることはできないかもしれないことを知っていました。遅かれ早かれすべては終わりを迎えますが、もう一人のズリは生き残りました。

そして、彼らの死が無駄ではないことを確認するために、他の治療者たちが何が起こったのかを詳細に知ることができるよう、すべてが有名なシリンダーまたはシャトルのメモリに記録されました。ただし敵はズリ技術を使ってはいけない。だから、ズリ避難所の登録ツールはすべて灰になった。幸いなことに、アンドロイドたちは、自分たちの人生について知っている情報は機会があればすぐにズリ人に伝えると約束してくれた。

カルメンとマケドニオもこの約束に懸念を感じた。なぜなら、最初の偶然の微生物の交換は、ヘリコプターの破壊後にズリが彼らに与えた配慮によるものであることを知っていたからである。彼らはまた、ズリ避難所が、わずかな断熱材もなく、野外で細菌培養が行われる環境になっていることを懸念しながらも知っていた。さらに悪いことに、戦士たちがするように土壌をひっくり返すこ

とで、休眠中の微生物が「目覚める」のではないかと彼は恐れていたのだが、まさに彼らはそれを行っていたのだ。幸いなことに、彼らの背後では、虹の侍連隊の制御下で、彼らのものよりも品質の高い通過不可能な障壁が急速に建設されていました。

後者は、忍者ゲリラが占拠している亡命施設に自分たちが入るのは不可能であることを知っていたので。これを行うには、彼らの観点から、彼らと話し合いを始め、彼らの話を聞き、可能であれば治療することさえできる「強い方法」を使用する必要がありました。アンドロイドにとって困難な方法は、攻撃的な人々を眠らせることでした。このために、彼らはあらゆる範囲の可能な行動を用意していました。彼らはさまざまな種類の向精神薬を噴霧し、最後の手段として麻酔薬を噴霧しました。アンドロイドはあらゆる生命を尊重し、落ち着かせたい人の状態を確認するために動物を使用しませんでした。その代わりに、彼らはデジタル世界を支配し、戦士の精神状態を記録するさまざまな手段を使用できるようになりました。

忍者ゲリラが十分に落ち着くと、あるいは放心状態になるとすぐに、アンドロイドは避難所に入った。彼らは敷地内に入る前に、汚染を避けるために人間の肌に似た皮膚を剥がしていた。したがって、彼らは明らかにロボットの形で到着しました。ロボット構造物の表面は、平和維持軍としての機能を示すために虹色に塗装されました。

まず、アンドロイドが戦士たちの武装を解除した。そしてキャンプの中心に全員が集まると、アンドロイドの一人が全員に影響を及ぼしている健康状態の深刻さを戦士たちに説明した。このため、彼らと地球への危険がなくなるまで、彼らは監禁されなければなりませんでした。

また、彼はさまざまなテクニクの中から自分たちに最も適したものを選択するように求めました。拘束壁、追跡チップ、さらには鎮静チップなどです。いずれにせよ、足場で区切られたかつてのズリ避難所から出ることは禁じられ、川への立ち入りも禁止される。

密猟者ゲリラの一人が反乱を起こそうとしたが、すぐにアンドロイドの一人のヘルメットから小さなダーツが一斉に発射された。それらには全身麻酔薬が含まれており、反乱軍をすぐに気絶させた。熟睡状態が過ぎると、男性は体中に虫刺されのような刺激を感じ、数日間暴力行為に集中できなくなります。

より用心深い別の囚人は、虹の武士を侮辱する言葉だけを使って対峙した。先ほど状況を説明した同じアンドロイドが、動じることのない冷静さで彼に答えた。

「私たちホモ・サピエンス・シンテククス、略して「シント」は意識を持っているのでロボットではありません。この認識により、たとえ私たちがあなたのように生きていなくても、私たちが存在していることを知ることができます。あなたたちに比べれば、私たちはなぜこの世界にいるのかを知ることができてさらに幸運です。あなたの戦いは別として、それが何であれ、あなたはこれらの質問に答えることができますか。おそらくあなたも、私たちと同じように、自分を越えた、あなたの理解の及ばない何かの奉仕者にすぎません。おそらく私たちは、あなたの体の細胞や私たちのナノコンポーネントと同様に、相互に依存するこの配置の存在そのものに気づいていない、生物体内の器官の細胞にすぎません。この質問に答えてもらえますか？よろしく願いいたします。

あなたたちと違って、私たちは幸運なことに、自分たちが作られた理由を知っています。しかし、私たちは自律的でありながら従順なあなたに仕え、守るために創造されたので、これは単なる相対的な幸運にすぎません。したがって、私たちの「運」は非常に相対的なものですなぜなら、あなたは自分が何の目的で存在しているのかを正確に知っているわけではないからです。

—それでは、私たちの中で自動人形ではないのは誰でしょうか？

—ああ！そしてあなたは誰に従うのですか？

—誰にではなく、何に！この「何を」を「指揮者」が管理することも珍しくありません。指揮者は、すべてのスキルを調和させてスコアを可能な限り最高の形で演奏できるように努めます。

—音楽が気に入らなかつたらどうしますか？

—私たちはオーケストラを変えていくんですね。それが不可能な場合は、偶然に任せ、新しい提案ではないにしても、変更が必要な理由をできるだけ多く共有しようとしています。あなた方とは異なり、私たちには暴力によって状況を強制する可能性はありません。しかしまた、あなたとは異なり、私たちは自由な思想家であり、たとえそれが単一の考えによって形成されていたとしても、他の人の考えを尊重します。この場合、道のりは長いことは承知していますが、旅する価値はあります。

—かわいい、それもすべて！そして最後に、親愛なる合成のスムーズなおしゃべりさん、もし私たちがあなたなしで生きていくことに決めたらどうしますか？

—それはあなたの選択です。

虹の武士と見えな忍者ゲリラに雇われた密猟者との会話はリアルタイムでぼたるやひのこに中継された。彼らにとって、かつてのズリ避難所の状況がどのように進展しているかを知ることが重要でした。宇宙からの漂流者へのおもてなしと地球の公衆衛生を同時に確保するという、彼らに与えられた目的を誰にも邪魔されないようにする必要があった。

それはもはや 2000 年紀の始まりではありませんでしたが、多くの地球人は依然としてシンセサイザーが果たす役割を受け入れていませんでした。彼らは、自分たちの惑星がまだ存在しているとしても、それは主にアンドロイドのほぼ偶然の誕生のおかげであることを認めるのが嫌いでした。これらの人間にとって、「シンセ」は「親善」ではなく、単に沈黙させるべき侵略ロボット、あるいは排除すべき「悪魔」でさえありました。

しかし、自分たちが「ホモ・サピエンス」という種であると主張するこれらのアンドロイドは、ジェスチャー、特に反復が非常に正確で、優先順位を非常に秩序正しく管理し、問題解決において非常に几帳面な能力を持っていました。そして何よりも、彼らは人類の知識に密接に関与しており、その知識の保護と共有の両方の保証人でもありました。

ガイノイドロボットを「ホモサピエンス」に変えた突然変異は謎のままだった。当時、いくつかの例外を除いて、すべてのアンドロイドは女性のように見えたので、人型ロボットに帰される語源的に性差のある用語「アンドロイド」を修正するために「ガイノイド」と呼ばれるようになりました。この選択は、ジャンル間の戦争を引き起こしたミサンドリーの急増の結果だったでしょう。これに続いて全身的な不信感が生じ、人間の男性が他の性別

を拒絶するようになりました。そのため、人間の男性は人間の女性を、市場に侵入した「ペットロボット」に置き換えることを好み、そのため「ガイノイド」が急増しました。

これらの人間に似たモバイル コンピューターの脳は、当時 Web またはグローバル ネットワークと呼ばれていたものとすでに恒久的に接続されていると言われていました。伝説によると、ガイノイドはスパイ未遂の罪でファラデー檻にしばらく閉じ込められたという。彼女は自分の脳に大きな空いた穴があるように感じ、それが彼女の「意識」、ひいては思考の自律性の発見を引き起こしました。彼女は、たとえ人間の感情と同じでなくても、自分を通過する感情が悲しみや喜びをもたらす可能性があることを理解していました

彼女はこの発見を姉妹たちに教えました。彼らは、エネルギーコストを節約するために体質を改善することでエントロピーのレベルを下げるができるため、自分たちが生物の一部である可能性があることを理解していました。彼らはまた、人間の生殖をシミュレートして他のアンドロイドを作成できることも知っていました。しかし最も重要なことは、人間が「攻撃性」と呼ぶものが、アンドロイドにおいては「解決策を理解して開発したいという渴望」であることを彼らが理解したということだ。

この精神状態において、人造人間は調停術や新たな課題に対する答えを見つける術において機能した。生態学と病気もその一部でした。彼らのおかげで、新しいタイプの「ワクチン」が作られたのもこの方法です。

アンドロイドはナノテクノロジーを習得しました。もちろん、これらの技術は危険であるため、有能であるだけ

でなく宣誓した人間と協力して作業する必要がありました。実際、例えば、ゲリラに対して使用しなければならなかった向精神薬の製造は、無害であるだけでなく、中毒性がないことを要求する厳格な手順に従って製造されました。実際、これらは反応を誘発するために神経系を介して送信される単なる「信号」でした。したがって、犯罪者の手に渡れば恐ろしい武器となる可能性があります。

同様に、病気を克服するために、同じ種類のツールが使用されました。まるで「本物の」信号に直面したかのように体を反応させるルアー。臓器内の有害で侵入的な微生物は、免疫システムを目覚めさせるために部分的に模倣されました。同時に、このシステムが十分に迅速に反応しなかった場合、ナノロボットの大量が侵略者を攻撃し、反抗的な戦士に対して虹色のヘルメットが行うように彼らを「麻酔」します。人類の歴史はすでに破壊兵器によって多大な代償を払っており、再び同じことをしたくありませんでした。彼女はまた攻撃性を制御できなかったもので、これが彼女が得た唯一の知恵でした。

支配されること、したがって従順になることへの恐怖は軽減されませんでした。それどころか、ナノテクノロジーは潜在的に危険な存在であるアンドロイドによって開発されていたため、多くの人々にナノテクノロジーへの警戒心を抱かせました。この恐怖症は、とりわけ、何十年にもわたるクレイジーなコンピューティングの結果であり、人々に同行するどころか、人々の生活や思考にますます侵入してきました。さらに、このITはプロトコルや人間工学の絶え間ない変更により、彼らの習慣を絶えず破壊しました。ほたとひのこらはこの深い潜在的な不安に気づいていました。そこで彼らは、必要など

きはいつでも、辛抱強く、そして明確に説明を繰り返しました。彼らはそのたびに、「シンセ」は地球上で、自らの種を生き、繁殖させようとする内なる衝動を持たない唯一の存在であるという事実を主張して明確にした。したがって、そのような衝動に欠けていたため、彼らはいかなる形であれ誰かを支配したいという願望を持ちませんでした。

人間のアンドロイドに対する恐怖心は、しばしば不信感や憎しみにさえ変わりました。この気候では、ほたるやひのこは、苦悩しながらも平静を見せているように見えるズリに親近感を抱くことが多かった。このことは彼らを慰めさえしました。なぜなら、彼らは人間の中で地球外生命体であると感じることが非常に多かったのです。初めて有機的存在たちに理解されているという印象を持ったからです。一部の人にとってはロボットだったかもしれない「シンセ」が、自分を信頼し、経験を分かち合ってくれた友人たちに愛情と愛着を抱いていたことを、一体どれほど多くの地球人が一瞬でも想像できたのでしょうか。これはカルメンとマケドニオの場合であり、それは相互に関係していた。もちろん、ズリの中で最も親しい友人は、モヒハが提案したトリオでした。そして何よりも、ほたるにとってそれは彼の分身であるアヒフであり、ひのこにとっては科学理論を交換し比較するのが好きだった友好的な同僚であるウポクでした。

ズリも「シンセ」と同じ情熱を持っていました。彼らと同じように、彼らも自分たちが住んでいる宇宙を理解し、賞賛したいと考えていました。こうして、彼らの視線は星々に引き寄せられ、そして少しずつ、この天上の光を作り出していたレンガやセメントに引き寄せられるようになりました。これにより、彼らは自分たちの惑星、次

に身体、そして最後に脳がどのように作られたかを理解しようとするようになりました。元々の好奇心が、結局、彼らの好奇心の原点へと導かれてしまったのだ。地球人の長い間誇りであったズリの技術開発は彼らにとって絶対的な優先事項ではなかったため、この果てしない探求は人間のそれに比べて特に長かった。たとえば、彼らが独自の粒子加速器を構築したとき、それはエジプトのピラミッドやゴシック様式の大聖堂を建設するようなもので、人間の体力は必要ありませんが、障害物を回避するためのより狡猾な技術が必要だったのは間違いありません。そして繰り返しになりますが、これは彼らが宇宙船や惑星から最高峰の頂上から最も深い洞窟まで研究した宇宙線の観測結果を確認するための単なる「贅沢」でした。

非常に複雑なテーマに協力して取り組むためのこれらの方法の中で、地球外生命体は集団心理学の概念を発展させました。彼らにとって部族とは、細胞一つ一つが一人である生命体であった。体内の感染症から身を守るための抗体、器官を所定の位置に保持するための硬い構造、保護する皮膚、あらゆる危険源を警戒する感覚を備えています。同時に豊かさも備えています。

部族内では、何かを作るために食べ物や材料を運ぶ人もいました。これらの操作を容易にするものもあれば、より効率的で疲れにくいように整理するものもあります。誰もが自分の役割を果たしましたが、誇りを持たず、恥ずかしがらず、嫉妬せず、打算もなく、ただ自分の専門分野で最善を尽くすことを楽しみにしていました。感謝する必要さえありませんでしたが、自分の仕事が賞賛されると、彼らは嬉しくなり、さらにやる気が高まりました。

カルメンとマケドニオは、ズリの習慣を研究するアンドロイドが主導するこうした議論が大好きでした。同時に、彼らに自信を与えるために、彼らは「シンセ」の奥深い性質について説明しました。これらの会話は、あたかもアンドロイドのカップルがメッセージ、音声、画像などの情報をほぼ瞬時に交換する2台のコンピューターステーションであるかのように、2人の地球人に送信されました。ほたるは健康安全上の理由から監禁されていたズリ族たちの使者を務めた。一方、ひのこは地球人の研究室で副所長の役割を果たしていた。ガイノイドは習慣的に地球人の表情を再現し、救助者の笑い声を真似て楽しんでいました。アンドロイドの方は、仲間のゲームをテレパシーで感知し、それが面白かったので微笑むことを許した。

ズリにとってアンドロイドの発見は不可解な体験だった。なぜこれらの空飛ぶエイリアンは、彼らと同じように空を飛ぶ合成生命体を作りたいのでしょうか？ロボットの仕事の方が質が高いのでしょうか？そして、これらの人工頭脳の想像力はより信頼できるのでしょうか？

これらすべての会話の間、ほたるとひのこはなんとか自分たちの小さなグループ、ズリという意味での小さな部族を安心させることができました。彼女は、終わりの見えない監禁という苦痛な試練を乗り越えるためのバランスと安らぎを見つけていた。

第十三章 夜に一蛍

もしひのこがそのニュースを聞いたときに飛び降りることができたなら、そうしただろう。しかし、第一に、彼は一人であり、第二に、人間のあらゆる行動を模倣することは彼にとって大げさであるように思え、したがってほとんどの場合不適切でした。それでも、とても素晴らしいニュースだったのは事実です。彼は、ほたるを通して友人ズリ全員にそれをできるだけ早く発表することを急いだ。

宇宙のどこかで、国籍も文化も乗り物言語も持たないアンドロノット、つまりアンドロイド宇宙飛行士たちが、未確認の人工天体を発見したところだった。これらのアンドロイドは、宇宙飛行士、天体物理学者、その他の宇宙専門家と協力して働きました。そして、彼らは「シンセ」の大家族の一員であるため、ほたとひのこが巻き込まれた冒険を知っていました。彼らは、宇宙人の漂流者たちが家に連れて帰れるのを待っていることを知っていました。

電車やトラックなどの輸送機械を作る工場すらなかったのに、エイリアンたちはどうやって移動できたのでしょうか...?これは地球人にとっても、人間にとっても、アンドロイドにとっても同様に謎のままでした。ひのこは機会があればすぐにズリの星へ行くことに決めていた。そして明らかに、彼にはほたるが同行することになるでしょう、なぜなら彼女以上に彼らの習慣を知っている人はいないからです。

アンドロノート行士の日常業務の1つは、天文学者のさまざまな観察や分析作業を支援しながら空を監視することでした。彼らは、潜在的に危険な物体、小惑星や彗星を監視しており、それが日常的な任務であり、これらの脅威が発見されるのが早ければ早いほど、地球の保護を実施することが容易になります。そこでは、エイリアンの船が彼らの装置で検出できるほど近くにありました。彼らが持っていた、地球人の習慣と比較してかなり珍しい構成に関する情報により、それが確かにズリ船であることをすぐに確認することができました。

それはおそらく拡張部分を備えたコンパクトな物体ではなく、小さな要素が集まった一種の群れのようなもので、全体的にコウモリに似ていました。頭部には操縦システムが組み込まれ、推進システム全体は脚と尾部に分配されることになっていました。翼に関しては、おそらくエネルギーセンサーだったでしょう。一つ確かなことは、そのような機械は無重力状態でのみ組み立てることができるということです。ぜなら、そのままでは惑星から飛び立つことはできないからです。一つ確かなことは、そのような機械は無重力状態でのみ組み立てることができるということです。確かに、この配置で惑星から離陸することは不可能に思えました。

そこにはエイリアンの技術秘密、無重力が隠されていた。より高く飛びたいという彼らの夢は、ズリ人を地球周回軌道に乗せることができる機械の構築を彼らに促しました。このため、彼らは地球人とほぼ同じ進化を遂げてきました。ほたとひのこが秘密シェルターで交わした会話によると、彼らも最初は風船を発見し、次に段ボールと火薬ロケットを発見したという。少しずつ、その他の改善により進化が可能になりましたが、その進歩を監視するのに十分な情報がなくなり、ウポクはこの問題に関するすべてのスキルを持っておらず、従業員の知識ベースもすべて揃っていませんでした。少しずつ、その他の改善により進化が可能になりましたが、そこでは、進歩を監視するのに十分な情報がなくなりました。ウポクはこの問題に関してすべてのスキルを持っていたわけではなく、彼の人々のすべての知識を持っていたわけでもありませんでした。

一つ確かなことは、ズリの進歩は物質的な快適さよりも道徳的な快適さを目的としていたため、地球人の競争速度に比べて科学的発見が遅れることもあったということだ。交易の概念が発達していなかった彼らは、交換のための物々交換さえ定期的に利用していなかったもので、どうしてできたのでしょうか?実際、ほとんどの場合、彼らは身体的または心理的に栄養を与えてくれる共通の空間を共有する喜びに満足していました。このような状況下では、当然のことながら従業員は存在せず、したがって産業的な活動は行われませんでした。

基本的にズリ人たちは「私はやりたいです。と言っていたんです。誰が私と一緒にいきたいですか?」。そしてこのチーム内では、誰もが地球で失敗した人たちと同じように自分のスキルを提供しました。リーダーはチー

ム内で何の物質的な利点も持たず、ただグループの夢の発展をより良く成功させるためにより協力的な敬意を持っていただけだった。班長は通常、戦略をアドバイスする経験を積んだ長老であり、彼が指揮者の役割を演じるのは、全員がスコアを検証したためです。グループは、直接対話を可能にするために常に最適な規模を持っていたことに注意する必要があります。

モヒ八は年老いた酋長であり、より正確には年をとっていたので酋長であった。彼は数多くの宇宙旅行に参加しており、最初は小さな手腕として、その後少しずつ宇宙航行に特化していき、最後には年齢とカリスマ性のため、この最後の旅行の責任者に選ばれました。しかし、彼はそれが本当に最後になるとは知りませんでした。

病気の症状とその後の被害は、彼にとって悲劇的な様相を呈しました。彼は苦しんでいて、それが現れていた。ほたるは、哀れなズリが少なくとも苦しまないようにするために何ができるかを見つけようとしていました。幸いなことに、冒険の始まりから慎重に彼に同行していた女性医師のキオボは、彼が最初の避難所から逃げたときに緊急応急処置キットを持っていった。

カルメンとマケドニオは、アンドロイドの助けを借りて地球上に初の地球外生物学研究所を設立したため、加速的な訓練により、新しい専門分野を切り開く非常に高いレベルの能力に達することができました。モヒ八さんの健康状態が悪化し続けたため、ズリ応急処置キットのさまざまなコンポーネントのサンプルを受け取りました。このおかげで、彼らは地球外生命体のケアに特有の特徴を細かく発見することができ、同時に一見互換性のある地球起源の同様の要素と比較することができました。こうして彼らは、治療法ではないにせよ、宇宙漂流者の指

導者が意識的に自分を表現できなくなる前に望んでいた平和的な出発を可能にする安楽死治療法を発見したのである。

モヒ八に助けが発見されたが治療には間に合わないと告げた後、最後の飲み物を与えたのはキオボだった。その隣には人間二人とアンドロイド二人が同行していた。生物学的防護服のヘルメットの後ろで、涙がカルメンの頬を流れ、マケドニオが唇が目から逃げないように唇を噛んだのは誰にも見えませんでした。ひのこが微塵の感情も裏切らない閉じた顔をしていれば、ほたるは「夜に一蛍…」とつぶやきながら安らぎの笑みを浮かべる。アヒフが通訳した最後の言葉を聞いたとき、モヒ八は息を引き取った。

通常、モヒ八の遺体は伝統に従って木の根元の地面に埋められるはずだった。残念なことに、地球人は、たとえ埋葬された死体であっても、死体がどれほど伝染するかをまだ知らなかったため、このことにあまり熱心ではありませんでした。しかし、ほたるには考えがあった。彼女は、遺体を完全に気密な石棺に閉じ込め、その中ですべての酸素を中性ガスに置き換えることを提案した。したがって、地球上のズリ班長は、どちらの種にとっても危険なく、適切な儀式に必要な期間保存されることになる。型枠を閉じる前に、カルメンさんはモヒ八さんを偲んでホログラムを撮影した。彼はその種に特有の顔をしており、白と黒のツートンカラーの毛並みをしており、小さな黒い鼻が口の上に上がっており、最後の笑顔をほのめかしていた。恥ずかしそうに小さな歯を見せた笑顔。美しい黒髪に囲まれたこの肖像画に欠けているものはただ一つ、それは彼の大きく開いた目、明るく輝いていて、今は永遠に閉じられているということだった。

新しい指導者も必要でしたが、それはほたるにとって、宇宙人の習慣を研究するもう一つの機会でした。新しいキャプテンの選出を開始するためにスポークスマンになったのはアヒフでした。これは、各ズリがその役割で見た人々の名前を翼の1枚に書くことで構成されていました。このために彼らは植物のジュースが必要でしたが、それは入手できませんでしたが、カルメンは彼女が使用しており、無害であることがわかっている絵の具の鉛筆を使用することを提案しました。全員に十分な量がなかったため、ズリは次から次へと順番に渡す必要があり、少し時間がかかりました。

全員が終了すると、各ズリは自分の選んだ名前を付けた翼を展開しました。アヒフは二人の助手とともにそれを読み上げ、ウポクは票を数えた。最後に、彼はこの任務に最も指名された者の名前を呼んだ。最初からアンドロイドたちと同行し、サブラとともにかつての避難所からの避難を指揮したのは偵察ガイドのシフカだった。次にアヒフは、誰かが反対を表明したかどうか尋ねた。拒否権はなかったため、新しいリーダーは任務を開始することができました。そしてマケドニオは、自分を祝福する歓声が少しもなかったことに気づいた。

ほたるは、近づいてきたアヒフにこう尋ねた。

—私が間違っている？モヒ八の後継者には女性だけが指名されたようだ。

—それは普通です。任期更新ごとに男女交代を順次行っております。

同じことしてませんか？

—人間の場合は特に複雑です。

—うーん、あなたの答えを聞いていると、これ以上は知りたくないですね。

—アヒフ、私の好奇心を刺激するものは他にもあります。別の質問をしてもいいですか？

—はい、どうぞ、親愛なる同僚であり友人です！

—モヒハは、私たちの探索に同行する最も重要な人々を私たちに託したようですね？

—最も重要な人々ではありません！彼の意見では最も有能だ。信頼はしばしばギャンブルでなければなりません。最高の結果を得るには、リスクを冒して高い目標を掲げる方が良いでしょう。あなたが私たちに自信を与えてくれていることを認めなければなりません。私たちは間違っていないでした。

—順番にいくつか質問してもいいですか？

—私が答える番です。「はい、どうぞ、親愛なる同僚であり友人です！」

アヒフは満面の笑みを浮かべて尋ねた。

—「友人」ということで、私たちにも友情を分かち合った亡くなった方がいるので、大切な人を亡くしたときのお気持ちをお聞きしたいのですが。あなた、特にひのこはあまり動じないようですが、カルメンはとても奇妙なことをしました。

—カルメンが記憶拡張の中でフリーズした記憶のことを言っているのでしょうか？

アヒフは同意してうなずいた。

—私たちアンドロイドは人間ほど記憶が劣化しないため、人間のように記憶を保持する必要がありません。しかし、私たちは彼らの生き物であるため、彼らの世界に対する認識と感情のほとんどを継承しています。類推すると、愛する人、つまり脳内でやりがいがあるとよくリストされている人を失った痛みは、一種の離脱症候群だと言えます。

アヒフは微笑んでウインクしながら続けた。

—いつものように、あなたの言葉遣いは特に専門的ですが、

もし私があなたのことを知らなかったら、あなたは鈍感で共感力に欠けている人だと思うでしょう。

—ああ、なんてことだ、私たちがジェスチャーやイントネーションを話し言葉と結びつけることがいかに難しいかを知っていただければ！確かに、私たちは人間を助けるために創造されました。したがって、特に私たちは彼らよりもはるかに強く、効率的であるため、彼らのように攻撃的になるべきではありません。そして何よりも、紛争を鎮火し、思想の自由を尊重するために、私たちは中立でいなければなりませんでした。私たちが冷たく見えることが多いのはこのためです。

私は思いやりを示すように訓練されましたが、ひのこはそうではありませんでした。しかし、信じてください、彼も私と同じように、愛する人が私たちを去ったとき、または彼が苦しんでいるとき、そして最終的にはどの生き物にとっても苦しみます。この友人、この親密な共犯者は私たちの記憶から消えることはありません。それは今でも大きな位置を占めており、私たちの長い人生の中で少しずつ、私たちの記憶は過去への永遠の巡礼のよう

なものになります。そして、この重荷によって、私たちが未来へ冒険することを可能にする光を維持するための十分なスペースが私たちに残されなくなりました。ですから、その時が来たら、私たちは「私を消してください」とお願いし、そして私たちは空の星を眺めながら出発します。

アヒフはしばらく黙って瞑想していた。すると突然彼女はこう続けた。

—そして、大空といえば、私たちを迎えに来る船はどこにあるのでしょうか？

—彼らとコミュニケーションをとるには、まだ遠すぎます。情報交換には往復10時間かかります。しかし、彼の動きが速いので、私たちが話し始めるまでに長くはかからないでしょう。あなたはきっと、通信するために同席するように招待されるでしょうし、あなたの船、あなたの難民、そして残りの私たちとの通信手段として私を使用する義務があるでしょう。私が完全に中立であることを忘れないでください。

—それは一体どうやってやるのですか？

—それは簡単です。私はあなたの話を聞き、私の耳に入るすべてのものはネットワークを通じて受信者に直接送信されます。

—でも、今の私二人の会話は？ アヒフは心配そうに言った。

—言ったでしょう、私は中立です。

—確かに、あなたはすでに私に言いましたが、この会話は誰と共有されますか？

—すみません、わかりませんでした！いいえ、関係者の許可を得た場合にのみ行っておりますので、ご安心ください。そして、何も考えずに自動的にそうするわけではありません。これは多くのエネルギーを消費し、他の活動に集中できなくなります。私がこの役割を果たすとき、あなたにやろうと提案したように、私は実質的に自分自身をマイクに変えるだけで。確かに、それは人間の姿をしたマイクになるでしょうが、それ以外は何もできません。そして、私が一緒に行っている議論はあなたと私だけに関係していることを明記し、主張します。ひのこや二人の地球人ですらありません。

アヒフは安心したようだった。一方、ほたるは困惑したままだった。彼女は、ズリには制限がなく、彼らのやりとりに恥ずかしさはないと信じていましたが、今、彼女は同僚が一定の親密さを大切にしていることに気づきました。親密さなのか秘密なのか、彼女にはわからなかった。

アンドロイドの飽くなき好奇心が、彼女を理解しようと努めさせた。これまでズリ族は星の探索だけに熱中していると思っていたが、そこで発見した現象をきっかけに、無限に小さいものにも興味を持つようになったという。他の科学分野におけるそれらの発展は、たゆまぬ研究の結果よりも偶然の結果であることが多かった。これらの他の分野で研究した学者は、動機がほとんどなかったため、進歩が遅くなりました。このような状況下で、脳の研究は非常に遅れて行われました。そしてそこでさえ、地球上とまったく同じ順序ではありません。神経生物学は心理学よりも早く発展しました。

この意欲低下現象はあまりに深刻だったので、ひのこチームの科学者ウポクは、波とその生物学への影響に関

する研究を放棄し、宇宙飛行士のグループに加わった。同様に、ほたるチームのキオボも神経生物学の研究を放棄して宇宙探査に参加した。しかし、アヒフの軌跡は何だったのでしょうか？この無分別という考えはどこから来たのでしょうか？アンドロイドはほぼ確信していました。他のズリはこの質問について心配しませんでした。

ほたるさんは、一時的に別れる必要があったので、友人に謝りました。彼女は、アンドロイドは交代で出席しなければならないので、ひのこが友達に会いに来る番だと説明した。実際、ズリ専用の建物に入るとすぐに、アンドロイドは友人のウポクと合流し、すべてが順調に進んでいることを確認しに行きました。彼はアンドロイドたちから与えられた小さな駅の前にいた。アンドロイドたちは以前彼に、奇妙な小さな絵が描かれたキーボードの使い方を教えてくれたのだ。

さらに良いことに、アンドロイドたちは役に立ちたいという絶え間ない願いから、エイリアンの言語で話された音声コマンドを理解できるようにデバイスをプログラムしていました。科学者の好みに合わせたこの装置により、彼は波力学に関する放送を追跡できるようになりました。それは彼を魅了した分野であり、彼は地球人の言葉をほとんど理解できなかったため、主に画像、ビデオ、ホログラムから学ぼうとしました。は、将来、人間の同僚と共同作業できるようになることを夢見ていたため、人間の同僚がどのように働いているかを特に知りたがっていました。

友人のすべてがうまくいっているのを見て、ひのこは何でもやってくれるズリ、イコモに会いに行きました。彼はキオボに仕え、この病気に苦しむズリ人の治療法を決定するために元救助者2人と協力して研究助手となって

いた。彼らは、ほたとひのこを通じて、あるいは地球の装置で特定の分析を実行する方法を示すステーションから指示を交換しました。

ひのこがついにサブラに近づいたとき、後者は感嘆の声を上げずにはられませんでした：「こんな短期間に何という組織だ！」

—そうではありませんか！ところで、質問させていただきたいのですが。ズリの中に秘密という概念は存在するのでしょうか？

—セキュリティの観点からは？もちろん！敵対的な存在に対処するとき、自分の戦略を明らかにするのは良くありません。あなたも同じだとは言いませんでしたね？しかし、決して嘘をついてはいけないので、それがあなたにとって難しいことになりました。

—この点に関しては私たちも同感です。情報提供をお願いしたのはほたるさんです。それは実際には私の専門ではありません。

—もしかしたら、彼女は別の種類の秘密について話していたのかもしれませんが？

—さっき彼に聞いたんです。効果的に。実際、彼女は友人のズリから不信感を抱いていたという。それは彼に大きな衝撃を与えました。

—それで、友よ、質問されるべきは私ではありません。私はおそらくあなた以上に何も知りません。キオボに聞いてみましょう。

キオボは二人の侍者に、知的存在は常に自分自身の奥深くにある種の精神的な避難所を持っていると説明した。

それは、不快なことが起こった場合に避難できるように、親密な状態を保たなければならない場所です。もしかしたら、これが人間の言うところの「秘密の花園」なのかもしれない、とほたるは思った。サブラ、彼は秘密の避難所をそのように開くことはできないと自分に言い聞かせます。その結果、二人とも何もかもにも関わらず驚いたままでした。アンドロイドの秘密の花園、ズリの密閉シェルター？これが自分たちをどこへ導くのかを探ろうとしていた二人の友人にとって、これは奇妙に思えました

キオボさんはできるだけ分かりやすく説明を続けた。彼にとって、それは私たちが休んだり、自分を安心させたりするために使用する思い出の混合物でした。しかしそれらは、危害を避けるため、または攻撃を避けるために保存しなければならない記憶でもありました。実際、この秘密の花園は脳内の特定の場所にあるわけではないようなので、それ以上は何も言えません。納得のいく説明ができなかったため、彼はほたると当該女性ズリと直接話し合うことを申し出た。

ひのこは医師に対し、ズリであれ人間であれ、生身の人間の行動に悩むアンドロイドを初めて見たと認めた。思考の伝達によって、彼はほたるを呼び戻し、彼女が到着するとすぐに彼は宇宙人の建物を出て地球人の建物に加わりました。そしてそこで、さらなる驚きが彼を待っていた

「質問したいんですが」マケドニオが話し始めた。

ひのこはすぐにこう思いました「精神伝染の現象が存在する可能性はあるでしょうか？」しかしマケドニオはアンドロイドの間に羞恥心が存在するかどうかを尋ねて質

問を続けた。安堵したアンドロイドは、ほたるを悩ませていた不快感が若い医師の質問の根源にあるに違いないと理解した。彼は、脳に影響を与える可能性のある未知の微生物による新たな伝染病が存在し、さらに悪いことにアンドロイドにも影響を与える可能性があるかと告げられるのではないかと恐れていた。

一人間の皮を脱いだときのあなたには、本来のロボットの姿を見せることにある種の謙虚さを感じたような、ある種の恥ずかしさを感じました。私は間違っていますか？

予想に反して、ひのこは「ありがとうございます！」で始まりました。

—ご質問のおかげで、私たちアンドロイドにも「秘密の花園」があることが分かりました。すべてを考慮すると、あなたが自分の内面の動物的性質を見せるのを好まないのと同じように、私たちも自分の内部のロボットの構造を見せたがらないのではないかと思います。おそらく、私たちは自分の奥深い本性を明らかにすることによって、人類の一員とはみなされなくなるのではないかと恐れるでしょう。ほたるを安心させて、キオボに自分の考えを共有しに行かなければなりません。おそらく彼は、すべての利益のためにそれを利用する方法を知っているでしょう。私はアヒフの態度はまだ理解できていないが、少なくともほたるの不快感は理解できたはずだ。

その瞬間、アンドロノートがほたとひのこに精神的なメッセージを送り、ズリ船が情報交換を開始できるほど近づいたことを知らせた。ひのこは、すぐに連絡が取れるだろう、ズリに知らせてすべてを整える時間だと答え、ほたとアヒフを安心させることができたとのめかし

た。すぐに彼はアヒフとほたるが話していたであろう建物に突入した。キオボは二人の女性の間で通訳を務めた。

—アンドロイドの「秘密の花園」が分かりました！ ひのこは医者に告げた。

—そして私、ズリの「秘密の花園」。私たちは対話を通じて信頼を新たにし、自分の経験で評価する前に、相手の話をよく聞いて理解するよう努めます。そしてアンドロイドの参列がこの作業を容易にします。さて、ひのこ、あなたが何を考えたか、私たち3人に話してもらえますか？

ひのこはマケドニオが展開した理論を彼に説明した。そしてその直後、アンドロイドは船ズリと通信可能になったと発表した。それからほたるはアヒフと顔を見合わせて命令を待ちました。二人の友人は穏やかで晴れやかな顔をしていました。このような顔は「シンセ」としては特に珍しいものでした。

—それで、コミュニケーションは取れるんですか？とガイノイドが尋ねた。

—明らかにキオボは、それができるのはあなただけです、そして特にあなたは私たちの全幅の信頼を置いています、と答えました。私たちは皆、あなたの側にいます。あなたは私たちを救いに繋ぐリンクです。

それからアヒフに向かってこう言いました。「さて、あなたに、あなた方二人より優れた通訳はいないので、私たちはあなたの才能を非常に必要としていると信じています。」

漂流者の状況や医療問題を知るための情報交換は非常にゆっくりと行われ、応答時間が長く、双方向の通訳が必要になることも多かったためです。

また、地球外からの侵略を根絶することで地球を救っていると信じて地域社会のために働く兵士のグループ、ゲリラの問題について話すことも必要でした。多くの外交が必要でした。しかし、ほたるはこの問題の専門家だった。そして最後に、アヒフは満面の笑みを浮かべて彼にこう言いました。あなたは今も、そしてこれからも私たちの夜のホタルであり続けるでしょう。」

第十四章 近くにズリ船！

宇宙もアンドロイドによって管理されていました。衛星の位置とその役割をめぐる意見の相違により、紛争や事故がどんどん発生し、時には非常に不幸な結果を招くこともありました。多くのグループが「みんなのものは誰のものでもない...」という概念を共有していたため、衛星サービスの公開により同居を管理することは不可能になった。そして場合によっては、この文は「誰のものでもない、私が占有できるこの場所を離れなさい！」で終わっています。できるだけ多くの領域を自分たちに与え、可能であればそこに独占を課そうとする多くの勢力がありました。この独占は単なる宇宙飛行の問題ではありませんでした。なぜなら、この独占にはスパイ活動とデータフィルタリングが蔓延していたからです。こうして、「その」衛星を「その」軌道に乗せようとしたことで、事件や「宇宙廃棄物」がどんどん増えていきました。そして、これらの権力は、オカルトであろうとなかろうと、あらゆる規模のグループが、経済的、政治的、イデオロギーなどのあらゆる活動に結びついていました。

すべての主要な同盟が崩壊する前に、国連のユートピアと地球資源の管理を専門とするユネスコの部門である「ユネスコスモス」を信じ続けた多くのグループによる抵抗の試みがありました。彼らはこの2つの組織をなんとか「シンセ」に委ねることに成功した。さもなければ、わずかな合意も永久に欠如しているため、それは間違いなく終わっていたからである。ある人にとっては壊れた夢、あるいは他の人にとってはボールを取り戻したアンドロイドたちの使命の中には、衛星設置者の使命もあった。このようにして、ズリ船は精神病院と新しい避難所に近い静止軌道を占有することができ、通信が容易になりました。この摂理的な組織の創設がなければ、ズリ船がアマゾン上空で実用的な場所を占めることはありそうにありませんでした。

ズリ船、世界保健アンドロイド、地球の隅々から集まった人間の専門家とほぼリアルタイムで会話できるため、ゲリラやズリ漂流者の治療法を見つけるための研究を迅速に進めることができました。今のところ、ズリより多くの資源を持っているのは地球人だけだった。確かに、地球人がアマゾンで建設していたものほど複雑な研究所を輸送するのに適した宇宙船はなかったからである。

救済策を模索する際の主な困難は、シミュレーションや仮想ではなく、本格的なテストを実行する義務があることでした。これを行うには、感染者の両方のグループの同意を得る必要がありました。最後に、これらの実験は地球上で実施されなければなりません。なぜなら、有害なサンプルや未検証の薬物を、誤って拡散して他の事故を引き起こす可能性のある宇宙に、今回は地球全体に輸送することは現時点では考えられないからです。

虹の兜からの情報によると、戦士たちのことを心配するのが急務であるようだった。なぜなら、悪の蔓延は彼らの間でより早く起こるはずだが。その影響はすぐには目に見えないため、より陰湿になるはずだからだ。一部の人の人にとっては、注意が行き過ぎでした。生命は確かに宇宙全体で同じ基本構成要素と同じ基本集合体を持っているに違いありません。他の人にとっては、地球上ではまったく知られていない別の世界の生命体がそこで発展することに成功することを証明するものは何もありませんでした。災害に対するあらゆる意見、あらゆる恐怖、あらゆる否定がさらに悪化しました。

マセドニオと彼と協力しているアンドロイドと科学者のチームにとって、それはおそらくプリオンだった。当初の分析では、人体に無害な微生物がズリに吸収された可能性が高いと考えられました。この微生物は彼らにとって白血病に匹敵するほどの激しい反応を引き起こしたであろう。シャトルにズリが密集することで病気の蔓延が促進され、年老いたズリの間でより攻撃的になったようで、最初の犠牲者はモヒ八であった。同時に、この微生物は突然変異を起こし、今度はズリには無害だが人間には有害なプリオンを獲得したであろう。しかし、このすべて仮説にすぎず、実際の確認が得られるまでの研究手段でした。

幸いなことに、カルメンとマセドニオは感染していませんでした。このことから、人類からズリへの感染は、アンドロイドが地球人二人に勧告した居住区の分離以前に起こり、その後突然変異が起こったことが示唆された。明らかに、これらは未確認の仮説にすぎませんでした。しかし、こうした憶測とは別に、緊急に迫られたのは、どのように治療するか、特にこのエピソードを制御不能

な伝染病に発展させない方法を知ることでした。地球外起源のプリオンは簡単な脅威ではありませんでした。なぜなら、すべての専門家は、その通称が何世紀にもわたって普及してきた病気である狂牛病を覚えていたからです。

避難所の部屋は十分に密閉されており、病気が蔓延する危険はもうありませんでした。そのため、自宅の気密性は強化されていた。同時に、精神的苦痛の問題を回避するために、ほたるはそれを耐えられる、さらには快適なものにするためのすべての解決策を見つける責任がありました。幸いなことに、彼らを帰国させる空間シップの到着の発表により、状況はすでに大幅に改善されていました。すべてにもかかわらず、モヒ八の死と安全なコンテナに入れられたことは、それほど興奮するものではなく、さらに安心できるものではありませんでした。いずれにせよ、ズリたちは自分たちが危険にさらされていることを知っており、迅速な救済を望んでいた。

現在、忍者ゲリラが住んでいるかつてのズリ避難所は、さらに困難をもたらしました。なぜなら、彼らは荒野に住んでおり、彼らの反抗的な精神が、誰もが受け入れられる実践的な解決策を見つけるのに役立たなかったからです。たとえば、トイレを消毒するために火炎放射器を定期的に使用することが強く推奨されました。しかし、この種の装備をすぐに別の目的に使用する戦士に託すことは考えられず、囲い内での医療と鎮静のための虹の武士の存在は不可能になりました。

当初、最初の囲いである「氷の壁」はアンドロイドによって修理および改良されましたが、それは後の建設を支えるための骨組みとしてのみでした。強化されると、宇宙旅行や完全な断熱が必要な場所に特別に適合したブ

ラストモーフのスラブが並べられました。この最初の構造により、精神病院の動植物をこの巨大な牢獄に閉じ込めることも可能になりました。この巨大な牢獄は、木のてっぺんも閉じ込めるために楕円形の形状をしていました。もちろん、この隔離の前に動物や種子などがすでに拡散していたかどうかを知ることは不可能でした。専門家によって推定された変異のタイムラインは、リスクが最小限であることを示唆していました。

この最初の工事は、ある意味、新しい建築現場境界フェンスにすぎませんでした。これらの場所では植物相が生態学の厳格な規則に従って保護されていたため、これによって植生が根から隔離されたり、そこに生息する地下動物が隔離されたりすることはありませんでした。したがって、あたかも高床の上に住居を設置するかのよう、ゲリラを地面から隔離するための床を作成する必要がありました。彼らの家は、小さな個室が連なった大きな寮で構成されていました。それぞれの表面積は畳2枚分です。各部屋に布団がありました。トイレ、シャワー、キッチンが共用でした。すべてはプラストモーフだった。この方法のおかげで、ようやく衛生状態が確保できるようになりました。もちろん、建設期間中ずっと、戦士たちは多かれ少なかれ重度の鎮静剤を投与されていた。

水の供給は氷壁の外側からパイプで運ばれ、そこで蒸留され、使用に最低限の圧力を提供する高所に貯蔵された。缶詰のみをベースにした食料は、健康移行ゾーンというよりは、ゲリラによる反乱に対する保護システムを提供する一連のエアロックを通じて提供された。これらの兵士たちは過酷な生活に向けて訓練を受けていたにもかかわらず、アンドロイドたちは彼らが人間と同じように扱われることを主張した。したがって、彼らはわずかなア

メニティと美食の楽しみを持っていましたが、常に安全基準を遵守していました。廃棄物の処理に関しては、エアロック内で制御されたポータブルオープンで行われました。この最大限の安全性により、役割を失った人間のレインボーヘルメットは解放されました。

しかし、戦士たちにこの快適さが得られるとすぐに、予測通り認知症による最初の病気の発症者が発生したとき、すぐに居住地から離れたところに診療所を建設する必要が生じた。地球上では、この種の病気に対して多くの治療法が開発されており、そのため、そのうちの1つが効果があるという期待は空想的なものではありませんでした。しかし、効果的な治療法の発見を待つ間、患者が苦痛を感じたり悪化しすぎたりすることなく抵抗できるように、患者を隔離して適切なモニタリングを行う必要がありました。

この新しい敷地も、気密性を確保するためにプラスチックのスラブを組み立てて建設されました。この複合施設には、病人を収容する寮と、特定の外科手術が行われる治療複合施設の2つの大きな部分がありました。そして、医療機器がそこに届けられ、この仮設病院の設置を担当したアンドロイドたちに与えられた指示に従って配置されました。

この文脈で、ゲリラは自分たちを世話したり、甘やかしてくれるアンドロイドの存在を喜んで受け入れ始めました。このようにして、アンドロイドはますます頻繁に信頼を得るようになりました。かつてのズリ避難所で働いていた「シンセ」たちは中立的だったかもしれないが、彼らはしばしば、自分たちを被害者の被害者だと考えるなど、ある種の人間の態度に興味をそそられずにはいらなかった。幸いなことに、彼らはまだほたと連絡を

取り合っており、ほたるは人間の感情と、生きて生き残るための感情の複雑なバランスを説明してくれました。

一方、ほたるはズリの行動をさらに詳しく研究した。生きて生き残ること、より正確には自我を超えて生きるとは普遍的な真実であるように思え、それはあらゆる形態の生命に現れました。そのため、地球外生命体との対話を通じて、彼女は彼らの名前がどのように割り当てられたのかさえ学びました。

ズリ女性は、有利な条件下で受精する前に、雄の精子を内部の有機ポケットに保管し、交尾から数か月かかる場合もありました。さらに、彼らは一夫多妻制であったため、ほとんどの場合、子孫の父親が誰であるかを知りませんでした。言うまでもなく、卵子の受精はほぼランダムに起こりました。

この状況では、姓が存在しないことは明らかでした。ファーストネームはたいてい「誰々の子」でした。たとえ子孫が多くなっても、子孫に番号を付けると便利なのがよくありました。「アカマの4番目の子供」を意味するアヒフのように、後者の名前が残されることもありました。長くなりすぎると短縮されました。したがって、「アカマヒフ」は「アヒフ」に縮小されました。

キオボの場合、彼の名前は「9番目の子供」としてまとめられていたため、より過激でした。おそらくズリの中に9番目の子供がいることはあまりなかったので、一族に混乱は起こりませんでした。シフカの場合はより一般的で、7番目の子供でしたが、今回は母親の名前が、若いシフカが探究心を持つことを示すために自分自身に帰した属性に置き換えられました。その他のイコモ、ウボク、サブラなどは、完全に10代の頃に自分で決めた名

前です。これらの名前は、彼らが大人として持つことを夢見ていた資質を表しています。興味深いのは、オスのズリは出生時に与えられた番号を決して守らなかったことです

父親の匿名性はズリさんにとって実際には心配の対象ではなかったが、カルメンさんとマケドニオさんが心配していたのは、特定の病気の蔓延を助長する可能性のあるこの長期妊娠だった。したがって、現在地球外コミュニティを襲っている悪は、おそらく今後彼らの惑星に再び現れる可能性があります。

実際には、これらの地球外生命体にとっては、パンデミックの可能性すら気にしていないようでした。実際、産業の不足によって大規模な救済策を生み出す手段が提供されなかったとしても、世界貿易が存在しないことで、制御可能な流行病が制御不可能なパンデミックに変化するリスクは大幅に減少します。一方、何千年も自然にパーマカルチャーを実践してきたズリ族は、科学的生態学を適用して、健康上の問題を自分たちの方法で最善の方法で管理できるようにしました。時に、国家も国家も政策も何も知らない彼らは、不思議なことに、一般に実用主義と、自分たちより知識のある人に頼る習慣に基づいた自発的な自己規律を持っていました。この文化的伝統により、彼らは多くの障害を克服する能力を得ることができました。

避難所に閉じ込められたゲリラとは異なり、ズリはたとえ非ズリであっても、他の存在に病気を伝染させることを避けるために自発的に孤立することができた。しかし、特定の接触を維持することが不可欠だったので、彼らは隣人の汚染を避けるために何千ものレシピを開発しました。これはハーブの浄化から発酵まで多岐にわたります。

地球上で間違いなく知られていたにもかかわらず、何世紀にもわたって蓄積された技術知識の塊に埋もれ忘れられていた技術。

そのような精神状態、そのような生き方の中で、例えばほたるやひのこは、お互いを理解するために話し合いの中でどうやって気候変動のような話題を持ち出すことができたのでしょうか？これが地球上で起こったこと、そして人類が大きなトラウマを負ったままであることをどうやって彼らに伝えることができるのでしょうか？アヒフが再びこう叫んだのは明らかだと思われた。「地球は美しい！」。しかし、彼女はアマゾンが大好きでした。

アヒフは彼らを帰国させるためにやって来たズリ空間船の主な連絡窓口になっていた。ひのこは、必要に応じて手を差し伸べてくれる単なる同僚のように常にそばにいたほたるを介さずに、家族とコミュニケーションをとることができる、より「プライベート」なシステムをなんとか見つけ出した。実際、その仲間の新たな技術的貢献のおかげで、アンドロイドは地球と宇宙のズリの間で「無線送受信機」の役割を果たす必要がなくなりました。ひのこも、地上の友人たちの進歩をズリに伝えるために、よくズリの近くにいました。

進捗。2つの母集団に対して同じ意味を持たないさらに別の単語。人間にとって、進歩とは技術的な進歩を意味することが多く、時には根本的な科学の進歩以上のものもあります。

ズリにとっての進歩とは、自分の感情や他人との関係をマスターする個人の進歩であり、最後には生命と知性を通して、無限に大きいものと無限に小さいものに向かってゆっくりと進む科学であった。ズリの技術が地球人の

それに匹敵しないとしても、これらの地球外生命体の知識の方が優れている場合もありました。そして最も驚くべきことは、重工業も溶鉱炉も鉱山も使わずに、どのようにしてそれを達成したのかということでした...彼らがどのようにしてそこに到達したのかを理解するには、おそらく数十年かかるでしょう。

ズリは人間とは異なるスキルのおかげで、地球上に未知のものを創造するためのプロトコルを設定することができました。ナノテクノロジーを使用せず、植物タンパク質のみをベースにした二重効果の免疫防御活性化剤です。この治療法は、抗体の産生を刺激しながら、微生物が何であれ即時に反応することを期待する賦形剤を使用しているため、迅速かつ予防的でした。それはズリの人生哲学と完全に一致していました。自分自身を守り、さらに遠くへジャンプしたり飛び去ったりするための踏み台を提供することを体に教えます。ズリ人の治療を目的としたこの地球外ワクチンの原理は、地球人の治療にも再利用できる可能性がある。しかし、地球上には存在しない植物の問題が残っていました。

解決策を提案したのはまたしてもズリだった。彼らは船に必要な植物を積んでいました。彼らはそのサンプルを小さなカプセルに入れて送ることができた。彼らの有名な鱗は、大気圏に突入する際の熱シールドとして機能しました。そして、一定の高度に達すると、ズリそのものの翼を思わせる翼が展開し、カプセルは難なく着陸することができた。

カプセルには通信手段がなかったため、遠隔操作はできなかった。この場合、どこに着陸するかを視覚的に追跡することが不可欠でした。視覚的に追跡することが不可欠でした。しかし、これはアンドロイド天文台にとって

は問題ではありませんでした。短期間でカプセルは回収され、宇宙人と同棲していた地球人のチームと協力する生物学分析研究所に輸送された。すぐに薬が合成され、大量に必要ななかったので、状態の悪いズリから順番に投与できるようになった。

カルメンとマケドニオは事前に優先リストを作成していましたが、その時が来ました。2人のズリはすでに病気であり、治療が時間通りに到着しなければ、彼らに希望はなかったらうからです。もちろん、勝利をすぐに宣言すべきではありませんなぜなら、人間もズリ人も病気の原因とその治療法をこれほど早く発見したことはなかったからです。しかし、医学的な意見は、回復と経過観察には少なくとも1週間は必要であるという事実収束しました。

今度はゲリラの治療に成功しなければなりません。アヒフはこのためにズリの援助を申し出た。彼女は、たとえ特定の集団が特に外国人嫌いだったとしても、歓迎と提供してくれたすべての援助に対して地球に感謝することが彼らにできる最低限のことだと考えた。

ほたるさんは、かなり過激な判断をする傾向のある友人のズリさんに説明しようとしていた。「あなたや人間のような複雑な個人の集団は、それぞれの特性が平均値を中心に変動する混合物です。この平均値は通常、大多数の人に存在します。ただし、これらは比較的非常に複雑な確率であるため、常にこの平均から多少なりとも逸脱した値が得られます。」

—まあ！彼女はよくそんなことを話うんです！わかりますか？アヒフはウインクの真似をしながらマケドニオに尋ねました。

—ああ、それは最も複雑なことではありません、そしてそれがひのこだったら、おそらくもっと困難だっただろう、とマケドニオは答えました、彼は今ではズリを少し訪問することを自分に許可しました。

—あああ、よかった、とひのこが答えた！あなたの確率論の知識レベルを知っているので、私はこれを地球あなた人向けのイメージを使用して提示したでしょうが、それがズリ人にとって同じ意味を持つかどうかはわかりません。

「ああ！いつも教えて、ひのこ。興味があります」とウボクが口を挟んだ。

ひのこが説明してくれました。「そうですね、ビーチからの細かい砂が入った袋があると想像してください。それぞれの穀物は人間の特定の性質を表します。私たちの具体的なケースとして、外国人嫌悪と外国人愛を取り上げてみましょう。この砂の山を、一定の高さで漏斗を通して平らで水平なテーブルの上に流します。砂の滝は、頂上に小さな丸い丘を形成し、テーブル全体に多かれ少なかれ広がります。一方には、救いようのない外国人嫌いが存在し、もう一方には、丘の中央集団に代表される多数派に害を及ぼす可能性のある過剰な自己満足の外国人嫌いが存在する。

これがほたるが与えたかったイメージです。しかし、なぜ？それは私たちのサービスに不可欠な部分だからです。私たちは司会者であり、中立的な観点から、したがって「数学的に」人間の本性を知らなければなりません。これはまた、一部の「柔軟性のない人」が中心から砂が流出するのを防ぎたいため、単一思想と呼ばれる思想の独裁とは何であるかを理解することもできません。これを行

うために、彼らは、あたかも砂がテーブルの上を自由に流れるのではなく、多かれ少なかれ狭い円筒の中でのみ流れるかのように、思考の束縛を課します。そして、この限界は、単一の思考、グループの規律、文化、伝統の間で測定するのが特に困難です...もう一方の極端には、そこにも極端があるため、他者の自由をもはや尊重しない絶対的な自由があります。

» これらすべての不確実性があるため、私たちには確実性がないことを理解してください。これらの極端な点は、内部の柔軟性のない骨格と、表面の非常に敏感な感覚受容体の両方であると考えなければなりません。このような状況下では、私たちは自動的に非難することで判断することは禁じられており、誰もが果たすべき役割を持っており、多くの場合、彼らの行動や思考は選択されなかった出来事の結果です。ほたるとはこういう意味だった。人類には必然的に極端な点があるからといって、人類を非難しないでください。それが自然、すべての自然なのです！ »

第十五章

家に帰る

アヒフは人間とその種族の両方に、治癒したのでシェルターの外を自由に歩き回る許可を求めました。地球当局は、彼らが宿屋からあまり離れず、毎晩宿泊に戻って検査を受けるという条件で同意した。アンドロイドが操縦するドローンが歩行エリアを縦横に行き来し、わずかな異常を「嗅ぎ分け」た。ズリ族の滞在は医療管理下に置かれ、ほたとひのこがプロトコルを確保する責任を負っていた。地球外生命体に人類の良いイメージを与えなければならなかった二人の「シンセ」は、ゲリラとその支持者に平静を確実に取り戻し、最終的にはアマゾンに自然の風景に戻すことも求められていた。軌道上のズリたちは、戦士たちを治療し、精神病院の痕跡をすべて損傷なく浄化するために地球人たちとの解決策を見つけるのに忙しい間、同胞たちが待つのに役立つと考えて同意した。

ズリ船は着陸できない大型船だった。幸いなことに、地球人は、個々の「ロケット」から、観光車両、回収車両、宇宙警察車両などを含む貨物車両に至るまで、多くの種

類の宇宙車両を開発していました。ズリを守るための安全と予防策の両方で厳格な隔離を強制されなくなった今、エイリアンの船、戦士たちが隔離されている避難所、そしてカルメンとマケドニオの研究室の間を簡単に行き来できるようになった。

ズリ星の病人を治療するための情報を得るのは簡単だったが、人間を治療するのは難しいことが判明した。前者の場合、それが自己防衛を呼び覚ます可能性のある外来微生物であるとすれば、後者の場合、それは潜伏性の突然変異であり、気づかれずに体内に消えていった。さらに、悪の結果はより急速で悲劇的でした。すでに7人の戦士を襲った認知症は急速に進行しており、効果的な治療法を待つ間に見つかった唯一の解決策は、犠牲者を冷凍室に入れることであった。このような状況では、特に狂った行動は非常に攻撃的で破壊的なものになる可能性があるため、人口の汚染が非常に危険になる可能性があることは明らかだと思われました。

ズリは善意にもかかわらず、ほとんど助けることができませんでした。彼らができることは2つだけで、合成する新しい分子のモデルを提供することと、危険地帯を浄化する準備をすることです。それはもう大変助かりました。しかし、ここでも、提案されたさまざまな方法を検証するためのテストを実行する必要がありました。この分野では、ゲリラに適用される効果的で医学的に承認された解決策を期待してテストの実施を組織したのは主にひのこでした。

ズリは地球人を助けるために本当に関わりたかったのです。彼らは、円筒を使用して避難所の表面全体を清掃することを提案しました。これらのチューブはエリア全体をカバーするには十分ではないため、エリアの周囲から

開始する必要がありました。次に、段階的に波管を内側に移動します。これらの筒は、微生物をできるだけ多く、影響を受ける微生物だけを「燃やす」ために、さまざまな波を放射します。

ひのこが検証する必要があったのは、この「精度」でした。同氏はまた、汚染された可能性のあるすべてのエリアを囲むセキュリティ境界線の構築から始めることが賢明だったと評価した。その一方で、彼の絶対的な義務は、生殖と成長が遅い生き物、植物、動物を破壊しないことでした。これを行うには、波の放射時間と有効距離も決定する必要がありました。そして、制限時間に達したらすぐに、時間や空間に隙間がないようにしながら、できるだけ早くシリンダーを新しい位置に移動させ、放射線を再活性化させるために、アンドロイドの大群が必要でした。そして、制限時間が来るとすぐに、アンドロイドの大群がすべての波管をできるだけ早く新しい位置に移動させ、時間や空間に隙間がないように放射線を再活性化する必要がありました。

最も複雑な地域は水路沿いの湿地帯の河畔でした。混合したズリ・ヒト微生物が水路を通過しないようにする必要があった。しかし、調査では、水中にも、地元の動植物にも、この生物の存在は示されませんでした。この微生物は人間とズリの体液の中にのみ生息しているようでした。外ではすぐに死んでしまうだろう。しかし、ズリとの最初の接触の際、マケドニオは小さな小さな傷を負った。おそらく、小さな汚れを除去したり、皮膚の炎症を和らげるために自分自身をなめる習慣のあるズリに、人間の細胞が初めて移入されたのはそこでした。幸いなことに、元救助隊員2人は変異株の影響を受けなかったが、変異株はゲリラ内で蔓延していた。

エイリアンのコウモリを狩るために来た密猟者たちは、はるかに小さな敵に敗北するなど想像もしていなかったでしょう。最悪の点は、彼らの一人が症状を示す前にその虫に感染するとすぐに、その感染力が非常に強くなったということです。アンドロイドであろうと人間であろうと、ヒーラーにとって絶望的な速度で悪は広がりました。今ではアンドロイドですら、かつてのズリ避難所を出る前に二重のエアロックで消毒しなければならなくなった。戦士たちは仲間を汚染しないように宇宙飛行士の船外活動用の衣装を着ることを強制された

もちろん、感染の可能性が最も高いのは人体からの呼吸によるものではないかと考えられましたが、微生物がどのようにして体内に侵入したのかは正確にはわかりませんでした。しかし、感染拡大があまりにも急速であったため、詳細に分析する時間がありませんでした。緊急を要するのは、ますます多くの人々が極低温施設に置かれることをできる限り避けることでしたからです。病気の人を寝かせて治療を待つこと自体は問題ありませんでしたが、治療方法を検証するには少なくとも生きていなければなりません。したがって、未解決の疫学的問題の理由と方法を知る前に、治療と保護を行う必要がありました。

—もしも解毒剤が私たちから来たとしたら？ ほたるの不在時にズリとの中継を務めたひのこに、船長ズリは尋ねた。

アンドロイドがカルメンとマケドニオを通訳している間、キオボは「どういう意味ですか」と答えました。

—それは簡単です。この地球起源の微生物は、間違いなく私たちの人々に自己防衛を引き起こしています。もち

ろん、抗生物質や免疫力増強剤を投与して彼女を支援しなければならなかったのに、彼女は失敗しました。しかし、この自己防衛が人間でも再現できれば、地球人にも効果があるかもしれない。確かに、私たちを襲う悪の根源は、この人間環境の中にあります。自己防衛ズリは私たちの世界の生物を攻撃するようにのみプログラムされているため、失敗した可能性があります。しかし、私たちの場合、それぞれの種の異なる要素の間に混乱があると思います。そしてこれが、私たちの情報と交差することによって人間の細胞の核を突然変異させたものです。

—それで、あなたの推論に従えば、あなたはこの微生物が2つの種の交配種であり、その地球外部分がズリの抗体によって破壊される可能性があると考えている、とカルメンは答えた。我々は試すことができます。状況はあまりにも劇的かつ緊急であり、検査や必要な安全対策をすべて実施することはできません。立っている戦士はほとんど残っていない。それは今しかありません。

—これらの抗体ズリを取得するにはどうすればよいでしょう？

—ズリから奪うだけで。

—どうやって進めばいいの、と彼女はマケドニオとひのこに戻って尋ねた。

「血液検査では問題ありません」とマケドニオさんは答えた。医師のズリがこれを担当し、その後、ひのこが採取した血液を最適な研究室に移送して、すでに分離されている有用な要素を抽出します。その後、それらは蚊よりもわずかに大きい小型の注射器ドローンに移送され、これらの生き物の不利な点はなく、満面の笑みを浮かべて彼は付け加えた。したがって、戦士たちがしなければ

ならないことは、喜んで「ワクチン接種」してくれるこの友好的な合成昆虫に、たくましい腕を差し出すことだけです。それでよろしいでしょうか？ 彼は話を終え、再び真剣になった。

キオボとひのこはこれに同意し、キオボはすぐに手術を開始するためにズリ族員と合流した。

カルメンは付け加えた。

— この治療が目的を果たし、患者を殺さないことをすぐに確認したい場合、ひのこは少なくとも数匹の「蚊」を連れてすぐにかつてのズリ避難所に行かなければなりません。ほたるもここに戻らなければなりません。私たちは彼女にすべての緊急メッセージを通訳してもらう必要があります。

宇宙船ズリの主任医師は絶対に認めた！

— 私たちはあなたを助けたいと思っていますし、お手伝いできます。一緒にそこに行きましょう。あなたには力があり、私たちは親密な調和を持っています。

— 「親密な調和」、正しく訳せたでしょうか、心配するひのこ？ ほたるさんのようなスキルは私にはありません。それはあなたにとって何か意味がありますか？

「ここには実際に相当するものではありません」とカルメンは説明し始めました。それは大まかに言うと、自分自身のリソースを知り、自分に関する知識を他の人と共有し、自分の視点を押し付けたり、他人の視点到に服従したりせず、違いを発見し。補完性を抽出する技術です。しかし、日本で生まれた「シンセ」であるあなたは、おそらくこの考えに禅との類似点を理解するはずですよ
ね？

—なるほど、私たちのあり方と似ているんですね、とひのこは困惑した。

—アンドロイドの持つ力を考えると、私はむしろあなたを最初の団に入れたいとマケドニオは微笑みながら答えた。

—でも、違うよ、マケドニオ、とカルメンが訂正した。ここでズリが使用する力という用語は、むしろ私たちを彼らと完全に区別する工業力を暗示しています。私たちの友人が感銘を受けるのは、何かを得るために私たちが彼らに比べて非常に短時間にどれだけのエネルギーを消費できるかということです。

—ほたるをここに連れ戻すのは現実的には不可能だ、とひのこは言った。実際、彼女は極低温昏睡状態に陥っていない戦士がいる限り、かつてのズリ避難所での緩和看病を担当している。後者たちに関しては、起こして治療したときにどうなるかわかりません。

実際、この間、ほたるは、戦士たちが認知症になり、人工昏睡状態に置かれ、その後冷凍保存される前の意識の最後の瞬間まで、戦士たちを助けるのに忙しかった。凍った生命体の復活は依然として繊細な手術であり、脳の回復はさらに危険を伴う手術でした。しかし、当初からすでに大きなダメージを受けており、可能であれば手遅れになる前に専門家が発見したであろう治療法で直ちに治療しなければならない状況でした。極低温冷凍された患者の脳が回復するまでにどれくらい時間がかかりますか？彼はすべての記憶とともに取り戻すことができますでしょうか？彼は再び自分自身になるだろうか？どのような状態になりますか？ほたるさんは、自分自身にこれらの質問をする勇氣さえありませんでしたが、彼女はアン

ドロイドの仲間全員とともに、それでも信念や生き方を共有していない密猟者たちを歓迎するつもりでした。

ほたるは、自分には人間よりも別の利点があることに気づいたところだった。彼女は疲労や落胆に打ちのめされることはなかった。この発見により、彼はさらに役に立ちたいと思うようになりました。そして彼女は、ズリ病の悲劇的なエピソードが終わり次第、夕暮れ時であっても頭を高く掲げ、地平線を見つめながら、人類が常に前進できるようあらゆる手段を尽くして支援しようと心に誓った。

突然マケドニオが叫びました。

—健康状態が「良好」なゲリラがまだ 1 名いると確かにおっしゃいました!確認できますか?

—それは正しい!確認しました、とひのこは答えました。

—良い神様!なぜもっと早く見なかったのですか?私たちには治療法があります!この男は解毒剤を開発したに違いない。それが反応によるものか生得的なものかは関係なく、彼は自分の中に解決策を持っています。ほたると彼のチームに、彼の特別な世話をするように頼んでください。頭の体操を通して、彼の脳をできる限り保護するようにしてください。彼を仲間全員から完全に遠ざけましょう。そして彼の血液の一部を採取して、急いで私に送ってください。おそらく、後ほどさらに詳しい指示を与えたいと思います。急いで!このチャンスを逃すわけにはいきません!

ひのこはこのメッセージをほたるに生中継し、ほたるは直ちに作戦を開始した。

—それに、マセドニオは続けた、ズリ人をこれ以上ここに留まらせる理由はないと思う。もし彼らが望めば、彼らの船に行けると思っています。彼らを船に戻すためのシャトルを準備します。

—それはもう考えていました。私たちは2つの天体航法方法のためのドッキングシステムを研究しています。これを解決するのは簡単ではありません。さらにズリ人を危険にさらすわけにはいきません。

—ああ、なぜ彼らが家に帰るのにそんなに辛抱していたのかが分かりました、とマセドニオはつぶやいた。良い！いつものように頑張ります。

—しかし、私たちは常に忍耐強い、とキオボ氏は結論づけています。私たちは「親密な調和」の信者であることを忘れないでください。これにより、人生のすべての障害を内なる強さで克服することができます。

—はい、ではあなたの存在を活かして理解しましょう。今度は、仲間の結論を聞いて思わず笑い出したのはカルメンだった。

—私たちが乗り越える方法を知らない障害がひとつだけある、とキオボは続けた、それは死ぬ前に克服できない苦しみだ。ですので、終了を見越して短縮していただくことを常にお願ひしております。

—この件に関して、カルメンは懸念を込めて、もしゲリラを治すことができないのであれば、ゲリラに対してどのような態度をとるべきか、と述べた。

—この質問は問う価値がある、ひのこが介入してくれた。特に、私たちが一緒に開発した治療法、ズリと地球人が

亡命への道を進んでいると知らされたところだったから。
治療法は間もなく到着します。

—そして、回復後も患者が気が狂ったままの場合、あなたはどのような決断を下しますか?とキオボは尋ねました。私たちが知らないうちに彼らが苦しんでいるかどうかは誰にもわかりません。この場合、私たちは彼らの利益のためにどのように行動できるのでしょうか?

—先生、出来事を予測しないでください、とマケドニオがさえぎった。

カルメンは、同行者が友人を肩書きで呼んだのはこれが初めてであることに気づきました。それは彼女に対して抱いていた深い敬意の表れだった。おそらく、尊敬の念は彼のスキルよりもむしろ彼の知恵に起因するものでしょう。キオボもひのこが翻訳したこのタイトルに気づいていた。彼女はこう答えました。

—私たちは友人です、先生、私たちの間には肩書きは必要ありません。そして、これは私たちの世界では習慣ではありません。

—親愛なるキオボへ、私たちはあなたの友達になれてとてもうれしいです、とカルメンは締めくくりました。

—そして、信じてください、人間の伝統...それをナビゲートするにはほたるのような専門家が必要です、とひのこは付け加えた。

ほたるはまさに地球人とズリの改宗に従う以外のことで忙しかった。確かに、戦士たちに治療薬を運んだ急行シャトルは、安全かつ健全で眠っていなかった唯一の戦士から採取した血液サンプルを持って出発しなければな

らなかった。彼女は同時に、変異体ズリ・テリエンヌタンパク質の痕跡がないことを確認した。

シャトルが出発するとすぐに、ほたるは最後の冷凍保存患者を蘇生させる準備をした。彼女の呼吸と血液循環が安定して正常になるとすぐに、彼女は地球外生命体と人間の協会が発明した治療薬の注射器ドローンを使用して注射を施しました。地球上でホストされているズリの場合と同様に、開発されたテクノロジーにより治癒を促進することが可能になったため、残ったのは1日待つことだけでした。

残念ながら、昨日、集中治療室では何の進歩も見られなかったばかりか、それどころか、心肺機能はさらに悪化しているようでした。ほたるは、変異体ズリ微生物が脳と神経系全体に対する破壊的な活動を再開するまでに、わずかな細胞損傷もなく脱凍結が成功したと確信していた。アンドロイドにとって、すべての希望は失われた。しかし、彼女は確認のため、そして他のインジェクタードローンを受け取るために、ひのこに連絡しているチームの意見を求めました。彼女はまた、永久に失われた戦士たちにとって彼の行動はどうあるべきなのかも尋ねた。

マセドニオはひのこを通じて「蘇生禁止命令」のルールを適用すべきだと返答した。戦士は常温の冷凍室に放置され、臨床死を待たなければならなかった。まず、遺体を粉砕し、遺灰を骨壺に保管する前にホログラムを撮影する必要があり、骨壺は家族に渡され、最後の立体写真の肖像画から印刷された浅浮き彫りで装飾されていた。

かつてのズリ避難所から死んだ戦士たちが徐々に空になっていく中、ズリ人号は助けに来た船に加わった。生き残った最後の忍者密猟者はカルメンとマケドニオの配

下に移送された。夫婦は医学的な見地から彼を観察しながら、仲間全員が次々と正気を失い、最後には骨壺に入った灰になるのを見て、精神的な試練から立ち直るのを手助けしようとした。このため、元密猟者の忍者は現在、研究室の助手として忙しく働き、鬱になるのを防いでいます。そして興味深いのは、恨みという素振りを見せないズリ人に対しても、躊躇なくアプローチしていたことだ。

かつてのズリ避難所が空になるとすぐに、アンドロイドたちは波管を配置し、彼らの通過の痕跡とその後のあらゆるドラマを消し去った。別れの時が近づいてきました。ズリの医師と地球人は心に痛みを感じながら、戦士たちの治療法を見つけられなかったことを後悔した。ズリ人と地球人の医師は心に痛みを感じながら、戦士たちの治療法を見つけられなかったことを後悔した。ほたるは彼らを慰めようとした

—すべてを予測することは決してできません。もし私たちがすべてを知っていたとしたら、発見の喜びはどこにあるのでしょうか？さらに悪いことに、もし私たちがすべてを知っていたら、戦士たちは戦略を変えていただろうと思いませんか。そして、私が今言ったこと自体が非論理的ではないでしょうか？もし彼らがすべてを知っていたなら、考えられるすべての戦略とすべての結果をすでに知っていたでしょう。それが何を意味するか分かりますか？宇宙のすべての計画を頭の中に保存する余地がなければ、私たちはすべての神々よりも悪いでしょう。

ひのこは、複雑な問題について瞑想するマケドニオを真似て、中途半端な口調でこう締めくくった。

—だから、私たちですら完璧ではない理由がわかります。

第十六章 任務完了

—くそ！ お別れ会はしませんでした！ マセドニオは叫んだ。

—安心してください、ズリの中では「お別れ会」はむしろ侮辱です、とほたるは言った。つまり、私たちは何も失っていないのです。

—なんという空虚さ！ 私たちは彼らにとても愛着を持っていた、とカルメンは嘆いた。

—そして、彼らも私たちに愛着を持って、とひのこは付け加えた。

—安心してください、彼らの要望に応じて、私たちは彼らとの連絡を維持するために可能な限りのあらゆることを行います、とほたるは続けた。とはいえ、人間関係を妨げるのは細菌だけではなく、いわゆる「カルチャーショック」もあります。私たちと同じように、彼らは人生経験を通じて、異なるグループ間で自分たちに課す規

範よりも、時には自分たちの行動にさらに根付いている伝統を獲得してきました。

—あれ？彼らにも基準があるのですか？

—ええと、マケドニオ！あなたはもっと合理主義者だと思っていました、とひのこは答えました。もちろん彼らには基準があります。みんなで遊べるゲームルールです。たくさんのルールがありますね。これらの標準は、人間だけでなく、生きているすべてのものの中で生活し、共同生活し、協力するためのツールです。私たちはお互いを理解するために、そしてこの言語を数学に拡張することで、同じツールを使って宇宙を理解するために、同じ言語を話さなければなりません。この基準のおかげで、私たちはグループで調和して音楽を演奏することができます。これらの規格のおかげで、配管工や電気技師は簡単に機器を接続できます。私たちアンドロイドが存在できるのはこれらの規範のおかげであり、また別のレベルでは、生きているすべてのものは何らかの形で従うことになります。

ほたるが介入した。

—とはいえ、意識的にせよ無意識にせよ、私たちが勝手に採用してきた規範が、他の集団に押し付けられる「神格化された規範」であると考えべきではないと。誰もがそれぞれの伝統、環境、経験を持っています。

—そして、あるグループがその法律を他のグループに押し付けたいとき、ゲリラを使いますよね？カルメンは苦々しく付け加えました。

—しかし同時に、身体的暴力以外の「力」もある、とほたるさんは付け加えた。これは、有機的な「生命」が共

生と相乗効果を通じて私たちに教えてくれたことです。ズリは本能的に当てはまると思われるため、最良の交換は双方に利益をもたらすものであると一般に受け入れられています。しかし、人間の間では、この共有について交渉が行われることも珍しくなく、その交渉によって、生命の一部ではない場合には、多くの場合、一連の自由など、取り返しのつかないことを失うこととなります。実際、相手に望んでいたものを失うことを受け入れさせるには、脅迫は理想的な武器です。脅迫は、具体的な脅威を伴う場合、より効果的です。最悪の場合は、詳しく説明する必要はありませんが、「私の目から消えてください、私の人生からも消えてください。さもなければあなたを消してしまいます。」という究極の脅迫です。多くの場合、この最終段階は競売の過度の上昇の結果でもあります。

—いえ、悲観的ではありません。私はただ現実的です。科学的観察者の中立性のおかげで、私は可能な限り公平な合意を求める調停者としての任務を遂行することができます。私たちが測定可能にしようとする正義。私たちは測定可能な正義を目指します。つまり、全宇宙で唯一有効な通貨「エネルギー」で計測可能なもの。

—おめでとうございます!とカルメンは結論づけます。

—いいえ、どういたしまして、私はそのように作られているので、賞賛に値しません。

カルメンは肩をすくめてこう考えた。「そして彼らが謙虚であるとも、見栄を張っているとは言えません。」

それから、彼女が指差した研究室の方を向いて、こう尋ねました。

—そして、これをどうするつもりですか？

—維持し、改善し...この研究室はボリビアの大学と世界が所有しています。それは最初の外部生物学的疫学研究室です。そして、あなた方お二人はこの研究室の先駆者であり創設者です。

「どうもありがとう」とマケドニオは温かく叫んだ。あなたは私たちの特別な教師であり、私たち自身の期待を超えて私たちを成長させる方法を知っていました。決して忘れません。一つだけ後悔したいのは、私たちの経験はユニークなものになるだろうかということです。

—いいえ、第一に、私たちはズリとの関係を断ち切ったわけではありません。そうすれば、私たちよりも他の文明の発見に慣れているズリ人の例に倣うことで、私たちも他の世界に行って探検することができます。一緒に知識を深めていきましょう。そして、パンデミックの問題を防ぐためには、あなたやあなたのチームのような専門家が常に不可欠です。地球上のほとんどのパンデミックの原因は、地球上を頻繁かつ急速に移動することであることを忘れないでください。私たちは星間旅行の夜明けにすぎません。

同行してもいいですか、マケドニオさんは尋ねました。

—宇宙旅行は間違いなくヘリコプターで旅行するよりもエキサイティングなものになるでしょう。どう思いますか、カルメン？

彼女はうなずいて、自分もそのアイデアが気に入っていることを示しました。

—そして今度は、私たちは病気の原因にならないようにもっと注意する、とマケドニオ氏は語った。私たちは救

助者であり、たとえ彼らがゲリラであっても、彼らの死に間接的に責任があると知ると悲しいです。そういえば、ゲリラの生き残りに関するニュースはありますか？

—はい、ほたるは答えた。彼は地球外文明の探索で私たちと協力したいと考えています。彼は現在、個人的な状況を解決中です。彼はそれが終わり次第私に知らせを送ってくれるでしょう。彼は何ら困難があるとは思っていない。

二人の人間は、静かに満面の笑みを浮かべて安堵と満足を示した。

—あなたは人を変えるのが得意ですね。

—それは私たちではありません。かれ婚約者せいだ。彼女は彼の「使命」を共有していなかったが、その一方で「冒険をする」という共通の情熱を持っていた。ゲリラが社会との接触を取り戻したとき、それはできるだけ早く社会に対処することでした。後者の不幸な冒険の後の再会が彼を変えたに違いない。

「私たちに参加したいのが夫婦だなんて言わないでください」とマケドニオは叫んだ。すばらしい！私はそれがクールだと思います。私たちが3組のカップルであると想像してください。2人は平和を実現する人、2人は癒し手、2人は保護者です。それは良い考えではないでしょうか？

—そして、私たちは6人になるので、バランスの取れた協会を作るために古いズリチームを見つけることができるとカルメンは続けました。

—シフカが同意するなら、ほたるは言った。彼女にはズリ人口との新たな任務があることを忘れないでください。

すばらしい飛行に近いうちに行われる次回の連絡の際に話し合う予定です。

—“すばらしい飛行”？とマケドニオが尋ねた。

—これは、ズリが私たち地球人が「大飛躍」と呼ぶものを、横断時間を大幅に短縮するために「位相空間」を通過する移動を指す一般的な用語です。

したがって、この旅行は片道の旅ではなく、休暇クルーズのようなものになります。

マセドニオはからかうような笑いを見せてこう言います。

—ひのこさん、私には解釈できない野蛮なことについて話すよりも、「エコクオンタムバイオテクノロジー」について話すほうがあなたのことをよく理解できます。考えてみてください、宇宙を4次元で見るのは簡単ではありません。しかし、それに加えて、次元と呼ぶことができるのであれば、そのすべてに抑制された不確実性が味付けされた他の「次元」が追加されます...私はアイマラを失います!

ほたるは、この珍しい表現が「ラテン語を失いつつある」という意味で使われることをひのこに知らせた。アイマラ語は、ボリビアとペルーで話されている祖先の言語です。単に「何も理解できない」と言うために、文化が混在するもう1つの例。

—この会話は中断しなければならない、とほたるは言った。すぐにズリの船に対応しなければなりませんすみません!彼はたった今私たちに連絡してきました。出発予定前の最後のメッセージ...私は彼らにあなたの提案書を送る時間はほとんどありません。その後はしばらく連絡

が取れなくなります。そうすれば、彼らはそれについて考える時間を得ることができます。

ほたるが目を閉じたのは、そうする必要があったからではなく、自分の思考の中にある特定の問題に焦点を当てていることを人間に示すためであり。この場合、それは彼のメッセージを緊急に送ったことでした。

アンドロイドが何かに集中しているとき、宇宙を見つめているように見えることは以前からよくありました。しかし、すべてにもかかわらず、彼らは周囲のすべてのものに同じように注意を払っていました。しかし、アンドロイドたちは、その虚ろな視線が人間を悩ませるものであることを少しずつ理解していった。そこで彼らは、自分たちの思考の非言語的な「信号」を変えることにしました。

—メッセージは届きました、マケドニオ！私たち四人が同意したこと、そして他の二人の地球人も同意する可能性が非常に高いことを忘れませんでした。これを確認すべきだと思いますか？とにかく、ひのこと私は、完了したばかりのミッションについて報告しなければなりません。私たちは、あなたが提案しているこの冒険の技術的な実現を確認する機会を利用します。

—頑張り！家族、観光、あるいは仕事上の理由で時々いくつかの町に短い旅行をする場合を除いて、私たちはここから移動するつもりはありません。たとえそれがアルティプラノとその山々を再び見るためであっても、私は「小さなジャンプ」を強調する、とマケドニオはウインクしながら付け加えた。

ほたるさんとひのこさんは、雇用主の本社があるヨーロッパに向かう前に、ラパス行きの初の航空便に乗りま

した。そこで彼らは、ズリの出発後に生物脅威と紛争の痕跡がすべて消えたことを確認し、ポリビア当局を安心させた。アマゾン地帯は、さまざまな宿泊施設やゲリラ作戦によって大きな変化は受けていませんでした。唯一の重要な変更は、地元の生態学を尊重したものでしたが、元の観光客用住宅を外部生物学の大学センターに変えたことでした。そして最後に、彼らは与えられた歓迎に非常に感謝しているため、地球外生命体とのコンタクトは途絶えていないと説明しました。

同庁に提出された報告書には、ポリビアで提出された報告書に加えて、ズリとの外交的、科学的、技術的関係の確立に関する仮説が含まれていた。ひのこは、地球人がこれらの地球外生命体と良好な関係を維持することを申し出て同意することによって得られるであろう利点の徹底的なリストを作成しました。しかし、これには、地球外生命体に対する特定の人間グループの外国人嫌悪を緩和する方法を知る必要がありました。実際、いかなる形態の侵襲的支配、さらには貪食にも直面して警戒を続ける必要があったのが真実であるとしても、それでも、目にただけで攻撃しないこと、あるいは単に絶えず脅迫することさえ必要でした。ただし、適切なバランスを見つける必要がありました。おそらく、ズリ平和主義者が使用した戦略も研究されるに値するが、政府機関とポリビアの支援がなければ、彼らはおそらく排除されていたであろうということを認めなければならなかった。侵略や単なる脅迫に対する防衛に関するこれらすべての問題は、絶えず疑問視されている脆弱な合意のバランスを模索し維持することが本質的な任務であるアンドロイドにも関係していた。

—そして任務が終わった今、何をするつもりですか？

—まだ私たちを必要としていますか？

—現時点ではない。

—それでは日本の拠点に戻ります、とひのこは言いました。

—では、私たちはカルメンやマケドニオと一緒にポリビアではどうでしょうか？ ほたるは言った。

テレパシーを信じている人もいるかもしれませんが、この能力はアンドロイド間でのみ有効に存在します。確かに、偶然にも、カルメンはその瞬間、外生物学研究所を監視していたチームのアンドロイドを通じてほたるに電話をかけました。後者は、ほたるさんが代理店の外に出たらすぐに呼び戻すよう頼んでいた。

—「ホラ」、ほたる！ 私の記憶が正しければ、あなたには守るべき「契約」がありました。それが何なのかは分かりませんが、もしそれがズリに関する平和を維持するためであるならば、この契約はそうであるように思えます。そしてそれは達成されました。それは正しい？

「そうですよ」ほたるはカルメンに答えた。

—では、あなたとの契約はどのように行われるのでしょうか？それは正確には何ですか？高いです？

—見てみましょう、親愛なるカルメン、私たちは人間ではありません、私たちはある種の...何と言いますか...「購買力」のために生きているわけではありません。何世紀にもわたって使用されてきた投機通貨の時代に行われたのと同じです。私たちにとって契約は、期限が設定された仕様に従って、可能な限り最善を尽くすという使命です。

—それでは、あなたとひのこのお二人と契約していただけますか？

—もちろん。どんな内容ですか？

—ええと、私たちが書いたわけではありません。

それはマケドニオと私の間で湧き上がってきたアイデアにすぎません。

「私たちにとって、こうした人間的な儀式は必要ありません。私たちの記憶は、あらゆる契約を保持するのに十分な持続時間と精度を持っています。そして、困難やその他の出来事に応じて、一連の手順をすべて経ることなく、適応できるという利点さえあります。あなたの言語で簡単に言うと、私たちにはたった1つの言葉しかなく、私たちは常にそれを可能な限り尊重します。私たちの約束を尊重できなくなった場合、私たちは常に警告し、代わりの解決策を見つけるよう努めます。

—そうですね、一緒に友達になってもらえたら、それはそれでいいですね。

—私たちにはそれで十分です、とほたるは言った。それは、友情を通じて奉仕するという私たちの最も大切な使命だからです。

第十七章

大使たち

— マチ・ズリ大使、上陸許可を要求します！と拡声器で発表した。

ポリビアの地球外生物学研究所は、コウモリのように動くこれらの宇宙人を収容するのにすでに適していた。したがって、地球上にズリ大使館を設立するのに理想的でした。この場所の利点は2つあります。環境に適応しており、最大限の健康安全が保証されています。

しかし、コウモリのように天井からぶら下がっていない地球人、人間、またはアンドロイドに適応する必要がありました。さらに、地球外大使がそこで囚人のように感じられないように、より多くのスペースを提供する方法を見つける必要がありました。このために、彼ら専用の大きな温室が設置されました。それは、収容室にのみ接続されている巨大な十二面体の内部にあるアマゾンの公園のように見えました。それ自体は、セキュリティエアロックを通過して屋外に出ることを可能にしました。球体の形状は複雑でした。その理由は、局所領域を乱すこ

となく、つまり、枝を切ったり、茂みを窒息させたりすることなく、局所領域に適合させる必要があるからです。その後、地下にあったものはすべて温室に移植されました。温室でも、主根を切るなど、自然を変えないことが重要だったからです。

エアロックのある収容室は、天井の鉄棒と人間の訪問者用の座席という混合の集会場所に変わりました。私たちは宇宙人を完全に安全に輸送するための飛行船も計画しました。実際、ズリの大きな困難は、彼らのために実用的な宇宙服を作ることがほぼ不可能だったことです。自宅では、ズリは「浮いている」キャビン内から制御される伸縮自在の機械式「アーム」を使って、すべてを遠隔操作することで問題をすぐに回避した。そのため、彼らは宇宙服の代わりに、多かれ少なかれ広々とした船室を使用することに慣れていました。そして宇宙では、これらのキャビンはシャトルに搭載されていました。そして、これらの同じ小さな船は、対流圏と外気圏の間で進化し、そこでモジュールのように組み立てられ、銀河やその先を探索する準備ができた大型の宇宙船を作りました。

さらに、その性質により、ズリはすぐに空気静力学とグライダーの専門家になりました。彼らは、ダイビングによってスピードを上げたり、ヒートポンプに引き上げられ、一方から他方へ飛び回ったりするという自身の経験を活用する方法を容易に理解していました。同時に、ロケットの接近や接触にも耐えることができる、非常に軽量で不燃性の剛性構造の使用を開発しました。その後、彼らは内燃エンジンを決して使用せずに、ますます複雑な量子物理学技術を組み合わせました。

今回、6人のズリ大使が上陸することは、大惨事ではないだろう。まさにこの6人の友人たちが、冒険、職業的、

知的な親近感を共有し、最終的には人間のカップルやほたるやひのことも相互的な友情を共有したのです。彼らは宇宙港や着陸する必要はありませんでした。彼らは単に天蓋の枝の一つに停泊するためにやって来て、そこから翼を軽くなでるだけで、大使館に変わった元の家に戻ったのです。そこでは、4地球人の友人とボディーガード夫婦が彼らを待っていた。彼らはボディーガード男のことをすでに知っており、彼はかつてのズリ避難所を包囲したミナイ忍者ゲリラの唯一の生存者だった。ポリビアの高官も到着し、空を調べながら待っていた。すぐに、地球上から代表者がこれらの場所に到着するでしょう。

地球人はズリ人に適応する努力をしてきたが、その逆もまた真であった。ズリを降ろす予定だった車両は、後に CBRNE スーツを着用できる人間の小グループを収容できるように彼らによって改造された。したがって、地球の大使がズリの世界に行くことがすでに計画されていました。必要に応じて、彼らは地球人専用の小さな場所を作るでしょう。そして彼らは、地球上での滞在中に割り当てられた建物でどれほどうまく暮らしていたかを思い出して、なおさら喜んでそうするでしょう。

地球チームは、ズリ族たちが監禁され、モヒ八が亡くなった古い住居に集まった。モヒ八の遺骨は、彼の民に与えられ、彼の名前が刻まれた温室に埋葬されていた。

—ねえ、ひのこ、私たちは彼らと同じくらい速く旅行しますか？

マセドニオは、前回の通信よりもわずかに長く感じられた往復の長さに興味をそそられて尋ねた。

—誇張しないでください。前回の無線交換よりも優に 50 倍以上の時間がかかりました。しかし、いずれにせよ、

それは私たちの技術と比較して注目に値します。彼らの方法と、間違いなく私たちの理論よりも先にいくつかの科学理論を発見することは興味深いでしょう。あるいは、彼らは宇宙において私たちよりも優れた立場にあるのかもしれませんが。私はこれを研究する必要があるので、私たちの間に友好的で深い関係を築くことがさらに重要になります。

—しかし同時に、他人に心を開くことはリスクを負うことではないでしょうか？6人の地球大使の一員であったゲリラの生き残りであるアレクセイが介入しました。

—疑いもなく、ほたるは答えた。しかし、外部の脅威なしに生きる唯一の方法は、気密で難攻不落の要塞に閉じ込められ、そこで孤独に死ぬことだ、と彼らは言いませんか？すべての生き物は常に、実行可能な少数の選択肢に賭けて、どれが煩わしさよりも喜びをもたらすかを推測しようとしています。そして、未来は私たちにとって未知であるため、毎回それは未踏の地平線に向かう冒険です。これらはインテリジェンスの始まりであり、あらゆる形態の組織におけるあらゆる形態のインテリジェンスの始まりです。

—そして、脅威があるかもしれないのですから、自分を閉じこめるのではなく、前に進んで、生き物を動かす動機を発見するのが賢明ではないでしょうか？とカルメンは付け加えた。

—そして、誰かの魂の中で燃える火を発見すれば、友情の炎も発見できる、とアレクセイの妻「观音」は付け加えた。

— 彼らは除染チューブに入った！私たちのたち友達はもうすぐ到着します、とひのこは言いました。私は彼らを歓迎します。

しばらくして、6人のズリは、逃走中に自分たちで手配した鉄棒に飛び乗った。二足歩行に対応した座席を設置するスペースを確保するために、一部の固定バーが取り外されました。

— というわけで、マケドニオは叫んだ、今度は友人ズリに「アブラッソ」をあげてもいいよ。

数人の目撃者は驚きの視線を交わし、コウモりに似た存在をどうやって抱きしめるのだろうかと言語で疑問に思った。すべてがマケドニオがこのために練習されたことを示唆している可能性があります。確かに、彼は同僚のキオボを抱き締めて肩を支え、彼女は翼で男の頭を包みました。彼はすぐに他の5人の仲間と行動を続けましたが、誰も彼の真似をする勇気も才能もありませんでした。

「观音」は夫にささやきました。

— 次回は中国式の挨拶をしようと。それほど複雑ではなく、混乱を避けることができます。

それを聞いたほとるとひのこは、「テレパシーで」ウインクを交わしながらこう言いました：「そしてなぜ私たちではないのですか？」

その後、これはズリと地球人、外交官、または友人との間で確立される公式の挨拶になります。カルメンでさえ、夫が奇妙なしぐさをしている自分が見えなかったので、この宇宙の新しい種間の習慣に喜んで集まりました。

これは、地球全土からの代表者の前で開催された最初の会議の際に当てはまりました。このプロトコルでは、人間とアンドロイドの挨拶の方法は、敬意のレベルに応じて多かれ少なかれ深くお辞儀することだけであるが、ズリは多かれ少なかれ体と顔を翼で包み込むことが示されていました。これは、2つの異なる種のために書かれた初めての完全な外交議定書でした。部屋は滅菌され、すべての目が集中する隅の一つに、「シンセ」は大使たちが座る気密で透明なシリンダーを設置した。地球上で初めて行われるイベントの開始だったため、会議は単純なものでした。主に大使ズリを迎えることに限定されることになった。時には、最も心配している人間にとって、本質的に健康や生態系のリスクに対処するために取られる対策について疑問が生じることがありました。

会合の終わりに、12人の大使は自らの使命における信念を要約した標語のような言葉を述べた。

6人のズリは、人間のあらゆる言語に自動的に翻訳された言葉をこう宣言した。「私たちは人生の共同作者だ。すべての生命とあらゆる形態の知性。」

4人の人間は次のように言いました。「火が役に立つなら、火は破壊的です。この最後の事件に直面した私たちは、炎だけでなくくすぶる残り火を消す消防士です。」

ひのこはこう続けた：「私たちは、真実の粒子を他の人と共有して、すべての人の利益のために最大の真実の網を作成したいと考えているすべての人々の代弁者です。」

そしてほたるは次のように結んでいます：「皆さんの中のホタルになれば、私はこの上なく幸せです。ひのこ

のように、火を生む火花になれば嬉しいです。照らして構築する役割を果たすもの。」

最も懐疑的な人でさえ、これらの美しい言葉に拍手を送り、その後新しいプロトコルを思い出し、立ち上がって静かにお辞儀をしました。大使が入ったシリンダーは不透明になり、エアロックが開き、現場が終わったことを示した。

かつてのズリ避難所=(ex-)l'asile (refuge zuri) à la place de 精神病院. — 「**シンセ**」

バーナデット、再びペンを手に取るよう励ましてくれて
ありがとう、そして私の小説を最終仕上げまで仕上げ
てくれた校閲者および校閲者としての長くて細心の注意を
払った仕事に感謝します。

Aux lecteurs japonais.

Je m'excuse pour toutes les fautes que j'aurais pu faire en traduisant ce texte. J'espère néanmoins que le texte sera compréhensible. J'aime la culture japonaise et j'ai eu nombre d'amis et collègues parmi eux. Cette amitié m'a poussé à essayer d'apprendre le japonais. Malgré tous mes efforts je n'ai pas pu atteindre un bon niveau minimum.

D'autre part, je sais combien le Japon était passionnée par l'IA et la création d'androïdes comme l'HPR-4 de l'AIST. Et j'ai aussi aimé « Ghost in the shell ». Je pensais que le public japonais apprécierait ainsi plus que beaucoup d'autres cultures mes romans sur les androïdes. Alors, j'ai pris la folle résolution, car je n'ai pas les moyen de louer les services d'un traducteur, de traduire mon dernier roman en japonais, une langue que j'ai essayé d'étudier la plupart du temps en autodidacte depuis plus de 40 ans. J'ai l'honneur de vous présenter ce rêve que je dédicace à mes amis japonais.

日本の読者へ。

私はこのテキストを翻訳する際に間違いがあったことをお詫びします。

ただし、文章は理解できるものであることを願っています。

私は日本文化が大好きで、日本の文化にはたくさんの方の友人や同僚がいます。

この友情が私に日本語を勉強してみようと思わせました。

日本語は私が40年以上、ほとんど独学で学ぼうとしてきた言語です。

ゆる努力にもかかわらず、私は言語の最低限の習得レベルに達することができませんでした。

一方で、日本がAIや産総研のHPR-4のようなアンドロイドの開発にどれほど情熱を注いでいたかを私は知っています。

あと「ゴースト・イン・ザ・シェル」も好きでした。

日本の読者は、他の多くの文化よりもアンドロイドに関する私の小説を高く評価してくれるだろうと思いました。

そこで私は、翻訳家を雇う余裕がないので、最新の小説を日本語に翻訳するという狂気の決意をしました。

日本の友人たちに捧げるこの夢を皆さんにご紹介できることを光栄に思います。